
フェトリアス物語～白銀の獅子～

稲本 楓希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェトレアス物語〜白銀の獅子〜

【Nコード】

N2999X

【作者名】

稲本 楓希

【あらすじ】

スピルナ公国にあるレグラ地方、そのとある街道で出会った二人の少年と少女。しかしその邂逅がとてつもなく強い運命に導かれたものだと、彼らはまだ知らなかった…。

序章 「運命の邂逅」

スピルナ公国・レグラ地方のとある街道

両側を林に挟まれた下り道を、少女は息を切らせて走っていた。後ろから追ってくる男の足音と怒鳴り声はつきりと聞こえてくる。しかしわざわざ振り返ってそれを確認する暇はない。

ただでさえ、所詮小娘である自分と大の大人である追っ手とではかなりの体力差がある。その上そんな隙まで見せれば、途端に追いつかれる事は火を見るよりも明らかだ。

しかし、そうでなくても少女には限界が近づいて来ていた。

普段からまともな食事も摂れない事による体力の低下、走り続けてひどく痛む脚や脇腹や肺、次から次へと流れ落ちる汗の粒、自分の耳にまで聞こえてくる程に張り裂けんばかりに高鳴る心臓の鼓動、そういつた事象すべてが、彼女にこれ以上は無理だと訴え続けている。

そもそも、男はなぜ自分を追っているのか。思い返せばそれは、あまりにも理不尽な理由だった。

しかし、それを必死で説明した所で、男が信じることは無いだろう。悲しいことに、それは彼女にとって、いつものことだった。

みなし子として生まれてから今までの人生で、運命が自分に味方してくれた事など、一度たりともなかった。自分の言うことをまとも信じてくれた人などほとんどいなかった。

いつもいじめばかりを受けて、誰にも受け入れられずに、常に孤独の中で生きてきた。

人生の中で唯一自分を愛してくれた育ての親さえも、二年前に病気で亡くなった。

その後の放浪生活の末にたどり着いたこの村でも、やはり不運ばかりが続いた。

その揚句に、あの男の店で自分が盗みを働いたと誤解されて、今こうして必死に逃げている。

まるで、世の中の幸福という幸福に見放されたような人生を、彼女は送って来たのだった。そして、それは、これからもずっと続くのだらう。

ならば、自分は何のために生まれて来たのか。何のために、今、生き残ろうとしているのか。

そう考えた時、その答えは、誰にも、本人ですら見当もつかなかった。

突然、目眩が起き、急激に視界が狭まる。足がもつれ、体勢を立て直すことも出来ずに、少女は不様に道に倒れ込む。過呼吸に陥って、体に力も入らない。

ぼやけた視界に男が追いついてくるのが見えた時、力尽きた少女は心の中ではもはやほとんど諦めかけていた。

次の村に向けて街道を歩いていた彼はその時、数十メートル先の道端で何やら事件が起こっているらしい事を見て取った。年端もいかない長髪の少女が、精根尽き果てたように横向に倒れこんでいる。その目の前には、一人の男が何やら怒ったように腕を振り上げている。

男は、見たところ武器は何も持っていない様だし、中肉中背のその体格からみても、どうやら山賊などではないらしい。

ということとは、恐らくあの男は、ただの商売人が何かだろう。多分、あの少女に大事な商品を盗まれるか、壊されるかなどとして激昂しているのだらうと、彼には容易に予測がついた。

まだスピルナ動乱と呼ばれる巨大な内戦が終結して間もなく、いまだ多くの戦争孤児を抱えるスピルナ公国では、そんな泥棒の孤児を店の店主が追いたてている事など、よくある光景だった。

孤児は、泥棒にでもならなければ生きては行けず、庶民は庶民で

戦争の間に財産を奪われたために生活に窮して、苦勞して仕入れた商品の一つ一つが命綱となっている。何よりどちらも、戦争で心に傷を負っていて、他人に構ってやる心の余裕はないのだろう。もつとも、スピルナ公・アルデバランのお膝元である首都アルスや、その周辺の町などは、戦争が終わってからは、次第に治安もよくなりつつある。

しかし、例えばこのレグラ地方などのような片田舎などは、今でもこんな差別や貧困に満ち溢れている。戦争を終結させた英雄と持て囃されるアルデバラン・アルトも、全能ではないのだ。

とは言っても、実の所、彼にとってはスピルナ公国の情勢などどうでもいいことだ。そもそも彼はスピルナ公国の出身ではないのだ。スピルナの西側に広がるガブル平原が、彼の故郷である。

それが、こうしてスピルナを旅しているのにも、ある理由があるからである。

少し話が逸れたが、とにかく理由はともあれ大の大人が少女に向かって暴力を振るおうとしている様は、見ていて楽しい物ではない。とにかくもつとよく状況を見ようと思ひ、彼はその現場に向かって歩きだす。

諦めて目をつぶって、殴られる事を覚悟し、身を堅くして永遠とも一瞬ともつかない時間を待っていた少女は、しかしいつになっても男の拳が振り下ろされないことを訝しんでいた。

前に一度、この男の商品だった魚を盗んで、男に捕まった孤児の男の子を見かけた事があったのを思い出す。その男の子は、一も二もなくボコボコに殴られたあげくに、破れた革袋のように道端に打ち捨てられていたのだ。

その男の子が、その後どうなったかは知らないが、それ以来顔を見かけなくなつた所からすると、恐らくは恐怖のあまり村から出て行つたのだろう。

この男は、近隣の村全てを引つくるめた中でも、一番の頑固者で通っていたのだ。実際、彼の魚屋で盗みを働いて、無事だった者はいまだかつていないという。

しかし、今、自分が盗みを働いたと誤解しているこの男が、自分にげんこつの一つも喰らわせないのは、一体どうしたことだろう。少女は訳が分からなかった。

しばらく横たわっていた間に、多少は息が整い、酸素が体に回ってくる内に、体の感覚も、徐々に戻りつつあった。すると、自分の近くで二人の人間が言い争っているのが聞こえてきた。

「だから、この小娘がウチの魚を盗みやがったんだ！ テメエみてえなガキに口を挟まれる筋合はねえと言ってるだろが！」

一人はあの魚屋の男の声だった。やはり猛烈に怒っている。

「だからといって、すぐに子供相手に手を上げてるようじゃ、お前の器の広さはたかが知れてるな」

対してもう一方の声は初めて聞く声だ。声からするとたぶん、ちょうど自分の何歳か上の少年だろうか。

それなのに、我を忘れて怒鳴っているのは主に男の方だった。

魚屋よりも年下のはずの少年の方がずっと落ち着いているとは、奇妙な状況だ。

もつとよく状況を知ろうと、少女は勇気を出して薄目を開ける。

どうやら、休んでいた間に視力もちゃんと戻ったようだ。

見えたのは、やはり男と少年だった。男の方は紛れも無くあの魚屋の頑固者の店主で、もう片方の少年は多少乱雑に伸びた手入れのされていなさそうな真っ白な髪を風になびかせている。

身長は少年の方が少々高い。

「ガキイ、黙って聞いてれば、勝手な事言いやがって。これ以上ぬかすと張っ倒すぞ！」

魚屋の店主はどんだん声を荒げる。よほど子供相手に足元を見られることに慣れていないのだろう。

「まったく、安っぽ過ぎるぜ、オッサン。まあ、張っ倒したいなら

好きにすればいいけどよ。後悔しても知らないぜ」

少年はあくまで落ち着いた声で言う。

この状況でのその落ち着きぶりは、むしろ挑発に近かった。

「なんだとお！」

魚屋の店主はその言葉で遂にぶちギレたようだった。腕を振り上げて少年に飛び掛かる。

しかし、その腕が少年に届く前に、突然店主が仰向けに転び、尻餅をついた。

少女には一瞬、何が起こったのか分からなかったが、店主が飛び掛かった瞬間に、少年が目にも止まらぬ早さで相手の足を払ったのだと気付いた。

店主の方も、初めは何をされたのかも分からなかったようだったが、状況を飲み込むと始めに驚き、そして次に怒りの表情がいかつい顔の上を走り抜けた。

しかし大人の自分が尻餅をつき、少年の相手がまったく動じていないという情けない状況から、怒りの言葉を発することもできず、最後には居心地が悪くなって、急いで立ち上がると、驚くほど多岐にわたる様々な悪口をまくし立てながら走り去って行った。

「……あの、」

店主が去って行った後、少女は立ち上がり、居心地悪そうに頭をかく少年に声をかける。

「ありがと……助けてくれて……」

「…別に気にすんなよ。ただ単にオレはああいう大人が大っ嫌いなだけだ。恩に着せたりするつもりはねえよ」

少年はぶつきらぼうにそう答える。

「ただ、ついでに言うけど、お前も、泥棒するならもつとバレないようにやれよ」

「…やってないよ。泥棒なんて」

少女は目を泳がせながら、今にも消え入りそうな小さな声でつぶやくように言う。

「ゴカイされたただけだもん」

「なんだ、冤罪か？そりやまた運が悪かったんだな」

少年は心から同情するでもなく、しかしまったく無関心という訳でも無いような中途半端な声で返す。

「それなら、今度は間違えられないようにするんだな。じゃあよ、そういつて少年はさっさと去って行こうとする。

「待つて……」

少女は自分でも無意識の内に彼を呼び止めていた。理由はどうあれ、ああして自分をいじめてくる人間から守ってくれた人は初めてだったのだ。

少女はあまりにも守られる事に対する免疫がなく、そのためどう対応していいか戸惑っているようだった。

「なんだよ、まだ何かあるのか？」

少年は振り返って尋ねる。自分を見つめるその視線を感じて、少女は理由も分からないのに唐突に恥ずかしい気持ちになった。

「あの…お名前は…？」

なぜそんなことを尋ねたのかも、少女には分からなかった。

さつき自分で声を掛けた時から、まるで自分の口が他の誰かに操られてでもいるかのように勝手に言葉が口について出てくるのだ。

「何でそんな事聞くんだ？」

少年は訝しむように聞き返す。しかし、一瞬経って考え直したように答える。

「オレはジーク。お前は？」

「あたし…スウ…スウ・ロ・ヤマ・イシユラーグ」

スウは反射的に答えた。

「…随分と変な名前だな。どこの出身なんだ？」

とジークは尋ねる。

ここスピルナ公国は元々いくつもの民族が住む国である。

当然、名前の付け方なども民族ごとに様々であるため、スピルナには多種多様な名前のパターンがあるのだが、彼女の名前は今まで聞いたことのあるどの民族の名付け方の特徴にも当て嵌まらないのだ。

だとすれば、ジーク自身も知らないような少数民族か、あるいは、出身はスピルナ公国ではないのではないかと考えたのだ。

そして、仮にそうだとすれば、なぜそんな少女がレグラ地方にいるのだろうか。

しかしスウの方はそんなジークの懸念など露知らずに、ちょっと考え込んでから答える。

「うんとね、育ったのはセル国っていうところ。だけど、生まれた場所は分かんない」

それを聞いてジークは考えを巡らせる。

セル国と言えば、スピルナ公国のゾド山脈を挟んだ東側にある小国である。ラシエル教という独特のカルト宗教を持っていて、他国を認めない排他的・封鎖的な国として知られている。

そのために、今やいくつもの国が加盟している大規模な組織である『テルフ同盟』にも加盟せず、独立姿勢を貫き通している。

しかし、だからといって国内の団結が強いのかというとそうでもなく、国民に対して、為政者側にとって都合のいいラシエル教を押し付け、その考えを脳に刷り込ませる事で何とか国家としての形を保っているのが現状だ。

その排他的な政治姿勢から、セル国に関して他の国が知り得る情報はきわめて少ない。

そこでふと、ジークはあることに気付く。

よく見ると、このスウという少女は、耳が尖っているのだ。それに、彼女の大きな瞳は、いままで見たことも無いような、宝石を思わせる紫色だったのだ。体中泥だらけで髪も乱れ、ボロ布みたいな服を着ているというみすばらしい姿のせいか、今まで気づかなかつたのだ。

それは、彼女がただの人間では無いことを如実に表していた。

「…お前一体、何者なんだ？」

ジークは半ば独り言のようにつぶやく。

人知を越えた力を持つという、いわゆる『尖り耳』の一族の話は、遠く南方で語られていると聞くが、あいにくジークにはその知識は無かった。

しかし、スウはその質問の意味をはかりかねて、首を傾げるだけだ。出身地が分からないと言うのだから、あるいは自分でも自分が何者なのか分からないのかもしれない。

しかし、具体的な事はともかくとして、『尖り耳』である以上、スウが普通で無いことは確かである。

「まあ、そんな事はオレにはどうでもいいか」

ジークはため息混じりに言う。こんな小娘相手に、何を真剣に考えているのか。

「で、もう用はないのか？」

「え……？」

スウはぼんやりした瞳でジークを見返す。どこか、心の中の考え事に心を奪われていて、周りに気を配れていなかったような表情だった。

「だから、オレはもう行っていいのかって聞いているんだよ。」

ジークはスウのあまりのマイペースぶりに多少むしゃくしゃしつつ繰り返す。

するとスウは少しの間逡巡したのち、意外にも首を横に振った。

「…あんね、あたし、お願いがあるの…」

スウは言いづらそうに伏し目がちに言う。

「…あなたがこれから、どこに行くのか知らないけど、あの、できれば、あたしも連れてって欲しいの…」

スウはそう言って、すがるようにジークを見つめる。

「なんだそりゃ？」

しかしジークは心底呆れたような声音で応える。

「オレとお前は今初めて出会ったばかりなのに、なんでお前を連れてかなきゃならないんだよ」

「う…うん…やっぱり、そうだよね……」

そう言ってスウはしょんぼりと悲しそうに俯いた。

「…何か、事情でもあるのか？」

その様子を見て、ジークはふと、ついでのように尋ねる。

「え…それは……」

スウはジークが自分に興味を持ってくれた事が嬉しかったのか、いままでよりも目を輝かせていた。

「あたし…いままでどこに行っても…ずっとのけ者で、誰からも優しくして貰えなくて…一人だけ、あたしの面倒を見てくれた人も、もう死んじゃって…それで、これからも…どうしていいか分からない…」

いつしかスウの目は、今度は泣き出さんばかりに潤みはじめていた。人付き合い、特に異性に慣れていないジークはスウのその無防備さに、どうしていいか分からずに居心地が悪くなった。

「だから…さつきみたいに…助けてくれたのが、うれしくて…だから…お願い……」

そう言ってスウはまたジークを見つめた。

「なんだよ、まったく…この状態で断ったら、オレが嫌なやつみたいじゃねえかよ」

ジークはさらに居心地が悪くなる。

「……もう知らねえよ！好きにすりゃいいだろ、まったく」

最後の最後でジークが折れた。と、言うよりはこの状況に堪えられなくなって半分やけくそになった、という表現が正しいかもしれない。

とにかくジークには、この少女は言葉でいくら言った所で聞かないだろう、という事が分かったのだった。

にもかかわらず、それを聞いて素直に嬉しそうに輝いたスウの瞳から、ジークはなぜかしばらく視線を外すことができなかった。

「…まったく、あのガキめ！」

魚屋は独り言のように罵った。そこは帰り道の途中だった。しかし、いくら一人で悪口を言おうとも、うつぶんを晴らす効果は皆無だった。

あの、生意気な、白髪のガキ。

口で何と言おうとも、自分がその少年に一本取られた事実は変えられなかった。

「次会うことがあつたら、ただじゃおかんからな！」

街道には誰もいないのに、彼は怒鳴り付けるように言った。しかし、そんな事しても、ただ虚しさがますますだけだった。

彼にとつて、人生はストレスのかたまりだった。

戦争で親を失い、戦争が終わつてからはゼロから商売を始めた。

しかし持ち前の頑固さから商売はうまくいかず、女房は愛想を尽かして出ていった。

その後も商品である魚を狙ってくる戦争孤児達との戦いが、彼の中にストレスを蓄積し続けた。

相手が子供とはいえ、孤児は盗みが手慣れているし、己の命がかかっているだけに粘り強く、それが厄介だったのだ。

なのに彼はすべての原因とも言える自分の頑固さについてを考え直すどころか、まるで金鎚に打たれた鉄のごとく、その頭は日ごとに硬くなっていく一方だった。

鉄は鎚で打てば硬くなるが、その代償にしなやかさは失われ、それが過ぎれば逆に脆くなってしまふものだ。

彼の性格は、そんな打ちすぎた鉄に例えられるだろう。

あるいは、熟れすぎて腐った果物にも、例えることができるだろう。

しかし、今の彼は、自分が自分で思っている以上に脆くなっている事を、知る由もなかった。

やはり、彼はこれからもいままで通りに生活するのだろう。そして、自分も知らない内に、何かを失っていくのだろう。

せめて、彼がもう少し賢くて、己の弱さを自分で解っていれば、あれほど簡単に付け込まれることはなかっただろう。

「おい、その人間」

突然、声がした。魚屋は驚いて振り返る。ついさっきまで、いや今もまだ、人の気配など感じないのだ。

それなのに声がするのだ。魚屋は背筋が凍る思いだった。

「お前、なかなか良い『闇』を持っているな」

その声が再び淡々としゃべった。やはり何の気配もしない。

「てっ…てめえ何モンだ!？」

魚屋は恐怖のあまり上ずった声で叫ぶ。その声は誰もいない街道に、虚しく響く。ふいに風が吹いて、木々がざわめく。幾羽かの鳥が、バサバサと音をたてて木から飛び立った。その冷たい風が魚屋の膚に鳥肌を立てさせる。

その時、突然魚屋は気付いた。

何かいる。

自分の目と鼻の先、皮膚と皮膚が触れ合うほどの近くに、確かに何かがいるのだ。

なのに見えない。魚屋は、まるで喉元に刃物を突き付けられたかのようないい知れぬ恐怖感に襲われ、もはや声すらも出なかった。

「いいよ、お前」

その声は言った。今度はさっきのようなどこか遠くから聞こえるような声ではなく、まるで、耳元に囁かれたかのような静かな、しかしはつきりとした声だった。

魚屋の頬に冷たい汗が流れる。自分の中の理性は、今すぐ逃げる

と叫ぶが、体は動かない。

彼の本能が、まぶた一つ動かしただけでも、その途端に殺されるのだと悟っていたのだ。

魚屋の耳のすぐ近くで、『それ』の息遣いが聞こえる。

『それ』は間違いない、楽しんでるのだ。彼の恐怖を。

長い間狙っていた鹿を、ついに追い詰めた狩人のように。

「お前の望みを叶えてやろう」

『それ』は今度は誘惑するように甘い声で囁いた。

実に甘い、しかし不気味な声で。

魚屋はだんだんと息苦しくなっているのに気がついた。気付けば自分の周りの世界が暗くなっていくように見えた。

ふいに、視界が歪んだと思ったら、魚屋は突然気を失った。

レグラ地方 中央街パテル

中央街とは、スピルナ公国に十二ある地方それぞれにある、その名の通りの中央都市である。

巨大な内乱だったスピルナ動乱が終わり、アルデバラン・アルトを公として平等主義であるスピルナ公国となつてから、この中央街の制度も一新された。

元々、地域を表すあやふやな単位であった『地方』にはつきりした境界を引き、戸籍や納税の拠点として、それぞれの地方に『中央街』を置いたのである。

十二個の中央街は、その名の通りの広大な道『大街道』によって結ばれており、地方間の物資の出入りを効率的に行えるようにした。その結果必然的に中央街は地方ごとにもつとも豊かな街となつたのである。

実際、今ジークの目の前にあるレグラ地方の中央街・パテルは、片田舎というイメージの強いレグラ地方とはとても思えないような、

発展した都市だった。

都市は周りを高い城壁で囲まれ、南東の方角には大街道に向けて開く巨大な門がそびえていた。

その門から果てしなく延びる大街道は、茶色の荒野に向かってまっすぐにつきぬけていた。

「ふわあ、すごい……」

後から追いついてきたスウが、灰色の城壁を見上げて、感嘆の声を上げる。

「なんだ、中央街に来るのは初めてか？」

ジークが尋ねる。

「うん……なんだか、おっきいケーキみたいだね」

「ケーキって……」

スウの発想の自由さに、ジークはむしる驚く。

しかし確かに、円を描くように張り巡らされた城壁と、その内側から天に向かってそびえる物見の塔は、百歩譲って見ればケーキっぽいと言えなくもない。

「そう思うんなら、ためしに食べてみたらどうだ？」

「え、いいの？」

嬉しそうに反応するスウ。

「……好きにしろよ……」

ジークは呆れたようにそう言って、再び歩きはじめる。スウはその後もう少しの間城壁に見とれていたが、置いてけぼりにされているのに気付いて、たつと駆け出した。

正確には、スウは、放浪していたところに中央街に来たことがあった。

しかしその時は、中央街だのなんだのも分からないほど、スウは疲れ果てていたのだった。だから、この壮大な城壁を、見上げる事すら考えつかなかったのだ。

実際のところ、スウは自分自身そのことを覚えてはいなかっただけなのだ。

中央街に関わらず、城壁のある街ではだいたい同じ事だが、門は昼は常に解放されていて、誰でも好きに出入りすることができる。

一応門番はいるが、それはほとんど形式的な物である。

そもそも、門を出入りする無数の人々を全員いちいち検問するとは不可能に近いし、何より手間がかかるため、効率的とは言えない。

だからといって、この往来の中で怪しそうな者だけを間違いなく見つけることもまた、無茶である。

だから門番は、とりあえず念のため立っておき、いかにも怪しそうな者を見つければ気まぐれに尋問する、といった感じだ。

だから、ジークもスウも、街に入るのには何の手間もいらなかった。

パテルの中に入ると、街はまた違った表情を見せた。

堅牢な雰囲気や纏う城壁とは裏腹に、その内側は田舎なりの賑やかさを持っていたのだ。

どの地方でも、中央街は大街道を通じた交易の中心地になる。交易の品々は、大街道を伝ってまず中央街に集められ、さらにそこからその周りの町や村に運ばれる。

だから、ここパテルも、常に様々な地方から来た物で溢れているのである。

スウは、あちらこちらの店や、建ち並ぶ石作りの家々に目移りしつつ、前を歩くジークの後について歩く。

道の脇には、輸入品の出店が数え切れないほど並び、常に荷物を載せた馬車や買い物に来た人々が行き合い、そこで値切り交渉が行われている。

八百屋、肉屋、洋服屋、小物屋、雑貨屋など、どこも客が群がっている。

「ここは月に一度、売れ残った輸入品を放出する市場をするんだが、まさかそれが今日とはな」

その光景を見てジークはどうでも良さそうに言った。
スウは、周りの景色に目を奪われつつも、ジークとはぐれないように早足でついて来る。

ジークは、彼と同じ年頃の少年が、装飾品店を物色しているのを尻目に、食料品店で日持ちのする干し肉や乾パン、尽きかけていた塩などの調味料、そう言った物だけを買って、他の店には目もくれずに今度は宿屋に向かい、部屋を借りた。

宿屋は、大通りから外れた細くてくねくねした道の先にあった、木造りの小さくてみすばらしい下宿のような場所だった。

一階はバーになっていて人が人影はなく、この分では二階の部屋もすっからかんだらうと容易に予測がついた。

しかしそこを一人で切り盛りしている（切り盛りするほどの仕事があればの話だが）小肥りな亭主は、気さくで気前のいい人のようだった。

そう思いながらもスウは、今までの人生の中で身についた癖ということもあって、始終ジークの後ろに隠れるように行って、亭主に気楽に話し掛けられてもあやふやな反応しかできなかった。

そんなスウの気持ちを鈍いジークが察したのかどうか、は定かではないが、二人は早々に部屋に引っ込んだ。

階段を上った所の廊下を進んで、三つある部屋の内、突き当たりであった部屋が、ジークの借りた部屋だった。

部屋には古びて多少色あせた紫陽花柄の毛布のベッドが二つあり、それに挟まれるように四角い小さなテーブルが置いてある。

テーブルの上には灯油ランプの他に、メモ用のペンや紙なども置いてあった。

大きめな窓の外からは周りの平屋の屋根の海、その奥には城壁や物見の塔の一つなどが見えた。

夕方の日差しは直接は入っては来ず、部屋の明かりは外の家の屋根に反射される光のみであった。

大通りの辺りには他にもっと居心地良さそうな宿もあったのにと

スウが聞くと、ジークは、寝る場所なんかにいちいち高いお金を払う必要は無い、むしろ下手に高い宿に泊まれば目をつけられる事もあるのだと気のない説明をした。

日は沈んだ。暗闇に包まれる大通りの脇には、そこでランプがオレンジ色の明かりを放っている。

人間は、そうやってかりそめの明かりをつけることで、『闇』に対する恐怖から逃避するのだ。

しかし、結局そんな物は意味が無い。

『闇』への恐怖とは常に根元的なものだ。いくら目の届く周りを明るくしようとも、夜がなくなる訳ではないし、己の内なる闇をすべて取り去ることもできないのだ。

人間とは低脳な生き物だと、つくづく思う。

みすばらしいランプ一つ掲げただけで、闇夜を照らし、克服したつもりになっている。

愛という浅い、偽りの感情で、憎悪という深い、真の感情を消し去ったつもりになるのだ。

しかし、本当の『闇』とはもっと深く、濃い。

それを思い知らせるのが、我等の生業であり、本能なのだ。

(そろそろ、始めようか)

心の中で、甘美で邪悪なああ声が響く。

それとともに、周りの情景が、霞がかかったようになる。もはや、彼はその感覚の虜になっていた。

不思議と何をすればいいのかが頭に浮かぶ。そして彼は従順にそれに従った。

近くを数人で歩いていた町人のうち、一人の肩に手を掛ける。

町人は、おそらく酒を呑んで酔っ払っていたのだらう、上気した陽気な顔をこちらに向ける。

次の瞬間、その顔に苦痛の色が走った。

その町人を、彼が刺したのだった。罪悪感などという無駄な感情は完全に麻痺していた。

あるのはこの男を刺した、ナイフの感触だけだった。町人は一瞬何が起こったのか分からず、一度自分の腹に刺さったナイフを見て次に自分を見た。

その顔は驚愕と痛みに満ちていた。

そして、町人はそのままの体勢で前のめりに倒れた。

どこかで女の悲鳴が上がる。続いて男の怒鳴り声も聞こえる。

それは殺した町人と並んで歩いていて、呑み仲間だろう。襲ってくるのが見えたが、所詮相手は酔っ払いの千鳥足だ。

彼は素早く動き、前のめりに襲ってきたその男の胸に、ナイフを突き立てた。

その、肉を突き破り、返り血を浴びる感触は、さながら麻薬のように、彼を昂らせ、快感で満たすのだった。

彼は、その快感を得るために、既に息絶えたその男に、再びナイフを振りかざした。

その時、ベッドで眠っていたスウは、突然何かおぞましい感覚に包まれて、目を覚ました。何か恐ろしい事が起こっている。根拠も無いのになぜかそう直感した。

暗い中を急いで部屋の窓に走り寄り、身を乗り出して外を見る。ここからは大通りは遠くではつきりと見えないが、明らかに様子がおかしかった。

夜だというのに、やけに騒音が耳に付く。そして、大通りでは一部の建物が赤く染まっている。燃えているのだ。

気がつくと、スウが起きた気配を感じたのか、ジークも起きてきた。

「おい、スウ、どうしたん……」

眠そうにいいながら窓まで来て、外を見る。瞬間、絶句した。

その横顔は暗くてよく見えないが、驚愕しているらしいことは分かった。

「何が起こってるんだ!？」

火はあっという間に広がっていた。普通に考えればおかしいくらいの速さで、炎は周りの家々を飲み込んでいく。

その姿はまるで、腹をすかせて、怒りのままにのたうち回る巨大な龍のようだった。

「わかんない…けど…」

スウは震える声で、やっとの事でそこまで口にした。

「…この感じ、多分、さっきの…」

ジークにはスウのその言葉の意味が分からなかったが、問い正しはしなかった。

そう言っている間にも、火事は四方八方に飛び火して、次第にこの宿へも近づいてきていたのだ。

「とにかく、ここから出た方が良さそうだな」

ジークはそう言うなり自分の外套を羽織り、荷物と、ベッドの傍の壁に立てかけてあった大きな二本の長い棒状の包みを手に取る。

スウも少し外の光景に目を奪われていたが、すぐにそれに従う。

二人が宿を出る頃には、火事は手がつけられないほど広がっていて、辺りは火の光で赤く染まっていた。

一体どうすればこれほど速く炎が広がるのだろうか。

「…どうしょ、ジークさん…」

スウが慌てたように言う。ふと思いつき、来たときの道を戻って、大通りに出ようとしますが、ジークがそれを制した。

「町中がこの状態なら、大通りはきつと大騒ぎだ。それよりも、脇道を通った方がいい」

ジークは冷静な声でそう言って、スウの手を多少荒々しく掴んで、大通りとは逆の方向にあつた細い小路に向かった。

しかし、そうは言っても歩き慣れない街で、しかも火事が起きている家の周辺は避けなければならなかったため、なかなか速く進むこと

はできなかった。

それでも時折大通りの方から聞こえる逃げ惑う人々の喧騒が、もしあのまま大通りに出ていたらどうなったかを如実に語っていた。きつと大勢の人の波にもみくちゃにされて、あっという間にばらばらになってしまっただろう。

二人は建物と建物の間に挟まれた路地を、右へ左へと縫うように進んで行った。焦りのせいもあったのか、スウにはどの道もまったく同じに見え、時間感覚も失って、本当にちゃんと進めているのだろうかと心配になるほどだった。

そうやって数分の間二人は無言で走りつづけた。しかしある家の前を通り過ぎ、その角を曲がるうとした時、大きな音とともにその家が、文字通り弾けた。

弾けた家は一瞬にして炎に包まれた。スウはその様子を啞然として見ていた。

すると、崩れた家の残骸を乗り越えて、やって来る人影があった。しかしそこは当然火の海だ。普通の人間ならすぐに焼け死んでしまわうはずだった。

しかしその人影はなんの躊躇も焦りもなく、悠々と炎の中をこちらの方へと歩いてくる。その姿は明らかに不気味だった。

やがて人影は紅蓮に染まった家を完全に乗り越え、その姿を二人の前に晒した。

「…お前は…！」

それは、昼間にあつたあの魚屋の店主だったのだ。

その服は焼け焦げ、真っ黒になっていたが、体の方はやけど一つせず、むしろ昼間より健康的なようにさえ見えた。

ジークの声が聞こえたのか、魚屋はこちらを振り向いた。しかしその口から言葉は出てこなかった。まるでしゃべることを忘れてしまったかのように口をぱくぱくさせていたが、その口から出てきたのは微かな唸り声のような音だけだった。

「ジークさん…この人、なんだか怖い…」

スウが怯えた声でつぶやく。そりゃそうだ。炎の中を平気で歩く人間をみて、やあこんにちはなどと言える人間などまずいるまい。

魚屋は鈍感そうにしばらくこちらを見ていたが、次の瞬間、突然二人の方に襲い掛かってきた。その手には赤く血塗られたナイフが握られている。

「何なんだ、コイツ！」

ジークは吐き捨てるようにそう言い、とっさに抱えていたあの長い棒状の包みを使って、その攻撃を受け止めた。ナイフの刃で、包んでいた布が少し裂ける。

魚屋は防御されたことに驚くでもなく、ただ無心に距離を取り直し、再び襲い掛かってくる。

「なんだか知らねえけど、攻撃してくるっていうんなら、反撃するしかねえぜ」

しかし魚屋には、ジークのその言葉が聞き取れたようには見えなかった。喋れないのと同時に、聞くことも出来ないのだろうか。

ジークは魚屋の突撃をひらりと躲し、持っていた包みの中から棒状の物を取り出す。

それは鞘に収まった刀だった。それも、1メートルを余裕で越えていそうな大刀だ。

ジークは素早く鞘から刀を抜き出し、今は邪魔な荷物と鞘を投げ捨てる。鞘が地面に当たる乾いた音が虚しく辺りに響いた。

鞘から取り出された白銀に輝く片刃の大刀は、火事の炎の光を反射して、まるでそれ自体が燃えているかのように赤く煌めいていた。

魚屋はその刀を見ても、いままで通り全く動じた様子はなかった。三度、ナイフを構えて、まるで馬鹿の一つ覚えのように突進してくる。

やはり、明らかに様子がおかしい。

魚屋のナイフが目前に迫るまで、刀を構えたジークは身動き一つしなかった。

しかし、ナイフがジークの体に触れるかというその一瞬、信じら

れないような素早さで身を屈めたため、魚屋のナイフは虚空を突いた。

ジークはその体勢から刀を振り上げた。

刀とは思えないような鈍い音と共に、魚屋は吹っ飛ばされ、建物の壁にたたき付けられた。

見ると、その体にはどこにも切り傷はなかった。峰打ちだったのだ。それでも、今の一撃はかなり効いただろう。

しかし、なんと魚屋はまるで痛みを感じないかのように、よろよろと立ち上がった。

効いていない訳ではない。彼の体は明らかにダメージを受けている。それなのに、彼は痛みを感じていないようだった。まるで人にナイフを突き立てることだけが目的の殺人ロボットにでもなったかのように、魚屋は再びナイフを構えた。

しかし既に肉体が弱っているのだろう。その構えはふらふらと危なげなものだった。

「まったく、まだやるのかよ」

そうやってジークは再び刀を構える。

しかしそこで、唐突にジークを遮るものがあった。スウだった。

「なんだよ、スウ」

ジークは苛立った声で言う。

「ジークさん…この人、違う…」

スウは一見意味の分からない言葉を口にする。ジークが戸惑っているのを見て、続けた。

「あの人じゃない。見た目は、同じだけど、何か…他のモノを感じるの…」

やはり何を言っているのか、ジークには訳が分からなかった。しかし、あの魚屋の方には、その意味が通じたようだ。

突然魚屋は体をビクンと引き攣らせ、大きく痙攣し始めた。

スウとジークはその光景を愕然として見ていた。

すると今度は、痙攣を続ける魚屋の耳から、何やら黒い煙のよう

な物体がニユルニユルと出てきて、その頭上に溜まっていた。

しばらくすると耳からの煙の放出はとまり、魚屋は糸が切れた人形のように膝をつき、そして倒れた。

その上に溜まった黒い煙は次第に凝る様にして固まっていき、だんだんと形を成していった。

それは、人のような、人でないような、奇妙なモノだった。真っ黒な体は人に似た形だったが、腕が異様に長く、目とおぼしき顔の上にある真ん丸な点と、口とだけが真っ赤に光っていた。

それはまるで、どこかの人間の足元から勝手に逃げ出した影のようだった。

「ちっ、意外と早くばれちったな。まあ、どっちにしろもうこの人間は使い物にならなさそうだから、脱ぎ捨てようと思ってた所だったんだけどさ！」

その影は場違いな程に陽気な声でそう言ってケケケと不気味に笑った。地面に倒れた魚屋を無関心に見つめたあと、それはこちらに向き直る。その真っ赤な口は、嘲笑うように三日月形に歪んでいた。ジークには、後ろでスウが恐怖で身を強張らせるのが気配で感じ取れた。

「お前がその魚屋を操っていたのか！」

ジークが半ば叫ぶように言う。

不気味な影が人の中に入り込み、その体を操る。当然それはにわかには信じがたい事だった。が、もしそうだとすれば、いや、そうとでも思わなければ、魚屋のあの異変は説明がつかない。

「ケケケ、だったらなんだい？」

影はニヤついた声音で応える。

「オイラはこのニンゲンの中に巣くっていた『闇』を、このニンゲンの願いが叶えられるように、力に還元してやっただけだぜ？元々すべてはコイツが願ったことだったんだぜ。」

遊び半分でそうしてみりゃ、見るよこの街の有様を。ニンゲンの『闇』ってのは、ちよっとくすぐってやるだけで、簡単にこんくら

いの事が出来ちまうんだぜ、未恐ろしいねえ」

影はそう言って再び声を上げて笑った。

そうする間にも、周りの火事はどんどんと広がり、ジーク達のいる道を明るく照らしていた。

詳しい事は分からないが、この火の広がり異常なまでの速さは、コイツの能力に拠るものなのだと、ジークは気がついた。

影の話を信じるとすれば、魚屋はオレにやられた事で負の感情、つまり怒りが高まり、そこを突かれて影に体に乗っ取られた。そして影は、まるで新しく手に入れた玩具で遊ぶかのように、魚屋を使って火事を起こさせたのだ。そして、魚屋が血塗られたナイフを持つていたことから、恐らくはあれで人を刺させたのだろう。

その傍若無人ぶりは、まるで…

「…悪魔かよ…！」

ジークは口に出してその言葉を呟く。今まで、安っぽい正義感など持った事はないし、また持ちたいと思った事もなかったが、それにしてもその影のしたことはあまりに残酷に思えた。

「ケケケ…その通り！」

影は面白そうに言った。

「オイラの名前はメトネス。種も仕掛けもない真正銘の悪魔さ！今日はもう十分楽しんだし、今日はここまでにしといてやるしさ。最も、どっちにしろオイラはニンゲンにとり憑かなきゃ何にも出来ないしね。じゃあな！」

メトネスは嘲笑いながらそう言っつて、突然ジークの方へと、空中を滑るように飛んできた。

ジークは本能的にメトネスへと刀を振るった。しかし、刀は真っ黒な悪魔の体をすり抜けた。メトネスの体は魚屋の耳から出てきた時と同じく、煙状になっていたのだ。

メトネスはジークの体をすり抜け、かと思うと次の瞬間には闇に溶けて消えていた。

「ああ、そつだ、そこのジークとか言うニンゲン！」

メトネスの気配は完全に消えているのに、その声だけが残響音のようにどこからともなく聞こえてくる。

「アンタ、その小娘と一緒にいるつもりなら、また会うことになるぜ！ なんとたつてソイツは、類い稀にみる疫病神サマだからなあ！」

その最後の言葉が終わった後も、メトネスの笑い声は長い間通りに響き渡っていた。

序章「Encounter of fate」完

第一章 「悩み事」

パテルノーレラス地方間の街道

「ねえ、ジークさん、あたしもう疲れたよあ」

スウはその言葉通りかなり疲れた様子で言う。

二人は昨晚、メトネスが去った後、無事にパテルから脱出し、そしてその夜は城壁の外で野宿したのだった。

そして今はパテルから南に延びた街道の一つを通って、地方境を越えたその先にあるノーレラス地方エスル村へと向かっていた。

「それならついて来なきやいいだろ」

ジークが答える。

「そっちの方がよっぽど嫌だよ」

スウは頬を膨らませて答える。

「それなら少しの疲れくらい我慢しろって」

ジークは少し呆れ顔でそう言いながらも、スウを気遣うように立ち止まって振り向いた。

（なんだかジークさんって、冷たいんだか優しいんだかよく分からない…）

スウがそう考え込んでいたちょうどその時、二人の前を横切るごく小さな物があった。

街道を横断していたそれは、一匹の茶色いイタチだった。見ると、なぜか首の辺りに何かの緑色の宝石のような物をぶら下げている。

「ふあ、イタチさんだ！」

それを見たスウはさっきまでの精根尽き果てた調子とは一転、喜び勇んでその後を走って追う。

「疲れてたんじゃなかったのかよ…」

ジークは呆れたように言ったが、その時のスウにはまさに馬耳東風だった。

「…つつかまえた！」

言うが早いが、もうイタチを捕まえたスウ。

彼女のぼんやりした性格とは裏腹に、その素早さは驚異的だった。

「くそ、放せ、ガキ！」

スウの胸に抱かれたイタチがじたばたしながら喚いた。

「…ねえ、ジークさん、このイタチさん喋るよ？」

しかしまったく驚かないスウ。いつも通りのおっとりした目でそのイタチを観察している。

「当たり前みたいに言うなよ…」

スウのこのマイペースに慣れるには相当な時間が必要だろうとどこか苦い思いを噛み締めながら、ジークが言った。

「おい、ジーク、コイツ何とかしろ！」

イタチが叫ぶ。スウはいまやさも楽しそうにそのイタチを抱え上げてブラブラさせていた。

対してイタチはと言えばスウの手から逃れようと必死にもがいているが、よほどしつかり捕まえられているのか、無駄な努力に終わっていた。

「あれ？このイタチさん、ジークさんのお知り合い？」

それを聞いたスウがジークに尋ねる。

「まあな。とにかくまずは放してやれよ」

ジークはため息混じりに言った。

スウは少しの間黙っていたが、渋々その言葉に従った。

「…まったく、ひどい目にあっただぜ」

イタチは怒ったような声で言った。言葉を話すとは言え、あくまでイタチはイタチなので、表情はまったく読み取れない。

「それで、一体何の用なんだ、リゲル」

ジークがめんどくさそうに言う。このリゲルというのがイタチの名前のようだ。

「ねえ、ジークさん、このイタチさんは誰？」

そこにスウが横槍を入れる。

「ん？ああ、コイツか？コイツはリゲル。『リイト』の伝令役だよ」
ジークが答える。

「『りいと』ってなに？」

スウが続けて尋ねる。

「『リイト』ってのは、平たく言えば、『旅人』のことだな」

今度はイタチのリゲルが答える。

「つまり、旅する理由も目的も違う旅人達が、互いにとって利益になる情報のやり取りとか、いざというとき助け合ったりとか、そういった取引をするための組織だな。まあ、それだけってわけじゃねえが」
スウは半ば理解して半ば理解してない様だった。

かれこれ丸一日一緒にいて気付いた事だが、スウはやけに表情の変化が薄いので、ほとんどの感情は目を見て判断するしかない。

「オレもそのリイトの一人で、リゲルはその伝令役って訳だ。それで、一体何の用だ？」

ジークが改めて聞き直す。

「ちえっ、別にお前に用があつたんじゃねえよ」

リゲルはどこかバカにするような声で言った。まるで『自意識過剰な奴だな』とでも言いたげだ。

「エスル村に来てるカレハに用があつただけだ。そう言えば……」

ふと思いついたように、リゲルが言葉を切った。

「ここに来る途中、パテルを通つたが、ありやひどい有様だったな。どこもかしこも燃えカスだらけだったぜ。お前達、パテルから来たんだつたら、何か知らないか？」

それを聞いたスウが、少し顔を引き攣らせたように、ジークには見えた。

しかしそれはごく一瞬の事で、後になって思えば、見間違えたようであつた。

「あれは、『悪魔』だった」

ジークが一転、敵かな声で言った。

「自分で悪魔だと名乗っていた」

「悪魔、か…」

リゲルはそう言ったとき黙り込んでしまった。

「ねえ、ジークさん、あの『悪魔』っていったい何ものなの？」

ここでまたスウが口を挟む。

「お前な、もう少し空気を読めよ…」

ジークが呆れて言った。

「…悪魔ってのは、もともとはこの大陸の北端にある極寒の地に住んでた、闇の力を支配する一族だよ」

リゲルが説明する。

「けど、ここ数年でなぜか、ここスピルナ公国での目撃情報が出る。やつらは闇を操る人知を越えた力を持っているし、それに何より怖いのは目的が不明な事だ。しかし、ついに人を襲うようになったか」

リゲルはそう言ってまた黙る。スウはといえば、相変わらず状況を掴みかねて首を傾げている。

「つまりどゆこと？」

スウがジークを振り返って聞く。

「キケンなやつらがこの辺りに来て、目的も言わずに人間を襲ってるってことだ」

ジークは適当に答えた。

「…まあとにかく、目的も分からないやつらのことをクヨクヨ考えてもしかたがない、か。」

リゲルは諦めたように言う。実際、何故昨日メトネスがパテルを襲ったのかすらも、皆目見当がつかないのだ。

「とにかくこの事はオレからテグレスに伝えておくぜ。それじゃあ、オレはこれからカレハの所に行くが、お前はどうする？ジーク」

リゲルがジークに尋ねた。

「この一本道行ってるんだからどうせ行き先は同じだろ。一緒にい

けばいいじゃないか」

ジークは軽い皮肉をこめて答える。

「へっ、分かってねえな、お前みたいなノロマと同じスピードで動いてるようじゃ、伝令役はつとまらねえよ！」

そう言うのが早いがりゲルはあっという間に駆け出し、道の脇の森に姿を消した。

「ふあ、もう行っちゃった」

スウが至極残念そうに言った。あれ以上りゲルを使って何をしようとしていたのだろうか。

「それで、ジークさん、どうしてあのイタチさんはしゃべるの？」

スウの今更なその問いに、ジークは一考してから答える。

「…さあな。それより、早く行くぞ」

そう言っただけでさっさと歩きだすジークに、スウは膨れっ面で付いて行った。

「あね、ジークさん、あたし、一つ聞きたいことが…」

その後、しばらく無言で歩きつづけた後、唐突にスウが尋ねる。

「なんだよ、スウ」

ジークが聞き返す。

「どうしてジークさんは、旅してるの？」

スウにそう聞かれて、ジークは少し顔をしかめてしばらく黙っていた。

しかし、不意に言った。

「お前には関係ないだろ」

そう言うジークの声は、さっきまでよりもずっと冷たかった。さすがのスウにも、この時ばかりはジークが聞かれたくないことを聞いてしまったのだと覚った。

「ごめんなさい…」

スウは目を伏せ、消え入るような声で謝った。まるでちょっと触

られただけで頭を引っ込める、亀の様だと、ジークはふと思った。そういえばスウは初めてであった時、ずっと人に嫌われて生きてきたと言っていた。それを考えれば当然の事ではあるか。

「別に謝れとは言ってねえよ」

ジークは、頭の後ろをかきながら言った。ジークなりの一応の気遣いなんだろうかとスウは思った。

互いにそれ以上言葉を発する事も出来ないまま、二人はしばらく無言で歩いた。

しかし、その沈黙は長くは続かなかった。その沈黙を破ったのは、押し込めたようなゴロゴロという音だった。

すると、俯いたスウの顔が尖った耳の先まで真っ赤になった。ジークにはそれだけで何が起こったのかが分かった。

「そういえば、昨日の夜から何も食ってなかったな…」

ジークは思い出したように言った。メトネスに襲われたせいで、すっかり忘れていたのだ。

「しょうがないな、ここらで飯にするか」

二人は道の脇の森の中に適当な場所を見つけ、そこで昨日仕入れた干し肉などの食料で、簡単な食事をすることにした。

そして、そこでまた、ジークはスウの新しい一面を見ることになる。

スウは大食いだった。そのやせっぽちな体のどこにそんな隙間があるのか、ジークが一日で消費する量の肉を、あつという間にたいらげてしまった。しかも、さらにおかわりをねだってくる。

「お前、オレを一日で破産させる気か？」

焼き上がった一切れの肉を頬張りながら、ジークが怒っていると、いうよりは戦いた様子で言った。

「だって、だって、こんなにおいしい食べ物食べれるなんて、すごく久しぶりだから…」

しかしそれを全く聞いていないスウは、感無量といった様子で、今にも泣き出しそうなほどに目を潤ませていた。

あの味気のない干し肉で目を潤ませるとは、今までどれほどひどい生活を続けていたのだろうかと思わずにはいられない台詞である。

もしかすると、この大食いも、食べれる時に食べれるだけ食べて栄養をつけ、食べ物が入らないかもしれない明日に備える、そんな本能的行動ではないかとも思えた。

ジークは不意に、さっきからスウの事しか考えていない自分に気付く。その事に自分自身でも驚いて、彼は無意識の内にスウから目を離していた。

「あんね、ジークさん」

やっとおねだりを止めたスウが、ジークの顔を覗き込むようにして尋ねる。その頃にはジークの荷物の重さは始めの半分くらいになっていた。

たぶんジークが目を逸らしている間にもう何枚かの干し肉でも胃に納めたのだろう。

「次の町にはどんくらいで着くの？」

「ん？ああ、エスル村か？この調子で行けば明日には着くな。どうかしたか？」

「ううん、別に……」

口では何でもないようなふりをしてそう言いながら、スウはどこかほっとしたような顔をした。

一体この少女は何を考えているのだろうか。ジークはますます分からなくなってきた。

まったく、生まれてこのかたスウほど悩ましいものには出会ったことがない、とジークは思った。ずっとどこか寂しそうな表情をしている上、そのわりにいつもぼーっとしていて何を考えているのかまったく分からない。

どれほど危険な山賊とか、悪魔なんかと戦うよりも、よほど肩が

凝る。

しかし、その時ジークは、自分がなぜスウがついて来ることを許しているのかという所までは、考えが及んでいなかった。

その後、昼食の片付けを終えて、再び歩きだした二人は、パテルからここまでの街道をずっと囲っていた森をついにぬけた。道は、森を背に、まるで緑色の海のような、雑草に覆われた草原の中を果てしなく続いていた。

ここの地理はほとんど分からないが、多分この草原はずっと西のガブル平原まで続いているのだろう。

スウは爽やかな風にそよぐそんな雑草達を眺めつつ、改めて昨日の事を思い出していた。

無意識の内に、背中に回した右手の指で左手を包む。

その左手には、未だ昨日、ジークに手を引かれた時の感触、人の手の温もりが、余韻となって残っていた。

ジークの握力は強くて、掴まれた方は多少痛くさえ感じたが、その力強さが、何より心強かった。

あんな風に力強く手を握られたのは、いつ以来だっただろうか。

少なく見積もっても二年ぶりだろうと、スウは頭の中で数えた。

そういえば、まだセル国の山奥の小屋に住んでいた頃、父はよくスウの手を優しく包んでくれた。

父と言っても、もちろん前述の通り実の父親ではなく、捨て子だったスウを拾って育ててくれた親である。

歳から見ても、父親というよりは祖父だった。まあ、スウにとってそんなことはどうでもよかった。血の繋がりがなかるうと、年寄りだろうと、その人がスウの『父』だった。

その頃スウは、父と二人暮らしで、ほとんど麓には下りなかった。なぜかというと、スウ達にとつて麓の村に下りるといふことは、自らいじめられに出向くようなものだったからだ。

理由は知らない。当時幼かったスウに分かったのは、村の人々が自分を嫌っていたことと、同じように父の事も嫌っていたこと、ただそれだけだった。

でも、村でどれだけいじめられても、家に帰れば父が出迎えて、慰めてくれた。傷を優しく手当てしてくれた。

そんな時、父はスウの手を、その大きな手で優しく包んでくれたものだった。スウはただその温もりだけで、村であった嫌なことをすべて忘れられた。

そこにたった一つ、帰るべき場所があることが、スウにとって最高の幸せだった。

それに対して、ジークの手の温もりは、また別の種類のものだった。どう表現したらいいのか、スウにはまだ分からなかったが、とにかく違ったのだ。

父のように落ち着いていない、自分とたった四歳しか違わない、父ほど大きくはない、どこか頼りなげな手。

でも父よりもずっと力強く、手を掴んでくれた。

スウは、前を歩くジークの後ろ姿を見つめた。

白くて長い、ボサボサな髪、背中に背負った重そうな刀。スウの事を振り返りもせず、ただ黙って前を歩いている。

風が少し強くなった。スウは顔にかかった髪を左手で尖った耳にかけ、ただ黙ってジークの後をついて行った。

その胸に様々な想いをめぐらせながら。

パテルの傍の森の奥深く

そこには三つの『悪魔』がいた。どれもいびつな人間のような形で、誰一人はつきりとは見極められないような、曖昧な影のような姿だった。

そこに、さらにもう一つ同じような悪魔が、地上を滑るようにや

つてきた。やたらと長い腕に、三日月型の赤い口と、同じように真っ赤な丸い目。

それは、昨晚魚屋を使ってパテルを炎上させた、メトネスという悪魔だった。

「ほう、今戻ったか」

その悪魔の内の一つが、メトネスに語りかけた。そこにいた悪魔達の中では最も背の高い、細長い悪魔だった。

「ケケケ、まあね」

メトネスは持ち前のバカにするような口調で答えた。しかしその笑い声とは裏腹に、その声は心なしか疲れを含んでいるように思えた。

「ケド、全部思い通りにはならなかったしね」

メトネスは、どこか吐き捨てるような言い方をした。

「どうやら、そのようだな」

長身の悪魔が、メトネスの様子を見て、メトネスに昨日何があったか推理でもするように、ゆっくりと言った。

「途中で邪魔でも入ったのか？」

悪魔は、推理の末に結論づけるように言う。

「……つたく、『ライト』のやつらめ、いかんせん行動が速いんだよ！これもきつと『テグレス』、奴のしわざだしね！」

メトネスはなおも、見えない何かに叱り付けるように叫んだ。一瞬して、そんな自分の不様さに気づき、また悪態をついた。

「つたく、存在が影なだけに陰口かよ！また宿主の癖が移っちゃまったぜ」

あのやたら頭の硬い魚屋に取り付いたせいで、その変な癖までが身についてしまったのだ。

昨日、パテルから脱出する時に、わざわざ敵に弱みを見せることはしなかったが、彼にとってジークによる妨害はそれなりに堪えていたのだ。

「ハッ、まったく、いいザマだなあ。お前みたいな雑魚がイキがる

から、そういうことになる」

そこで、もう一つの悪魔が口を挟む。

「大体、本来の目的も忘れて街を燃やす方ばかりを楽しむようじゃ、まだまだだなあ」

「うるさいね、悪魔が人を痛め付ける事を愉しんで何が悪いのさ！
不機嫌なメトネスが食ってかかる。二人目の悪魔はそんなメトネスをバカにするかのようにそれを無視した。

「フン、まあ構わん」

先に話していた方の悪魔は、そんな不満タラタラなメトネスにはまったく取り合わずに、相変わらずのゆっくりとした口調で言う。

「どちらにしろ、今回だけで目的が果たせるなどとは思っていないかつたからな」

悪魔のその言い方は、再びメトネスを怒らせた。

「つまり、オイラごときじゃダメ元の噛ませ犬だったってことかい！？」

「違う、ここで果たせなくても問題はないと言ったのだ」

長身の悪魔はやはりすました声で答える。

「なにも焦ることはない。ゆっくり、着実に、駒を進めて行けばいいのだよ」

悪魔はそう言ってクククと控えめに笑った。

「ともかく、メトネスも帰ってきた今、このままここに居てもらわねえかかないなあ」

二人目の悪魔が言う。

「そろそろ移動を開始するべきじゃねえか？」

「それで、次は何処へ向かうのさ？」

メトネスが八つ当たりするように、詰問するような口調で尋ねる。
「行くべき場所へ、だ」

長身の悪魔が、さも当たり前のように言う。

「だから、それがどこかって聞いているのさ！」
メトネスが苛立った声で聞き返す。

長身の悪魔は、しばらくもつたい付けるように黙っていた。そして、静かに言った。

「…南だ」

次の瞬間、四つの悪魔達は、一瞬深い闇に包まれ、そして、ふいにその闇ごと霧散して、跡形も無く消えた。

そこに、さっきまで悪魔がいたことを示すものは、何も残っていなかった。

パテル〜ノーレラス地方間の街道

スウとジークは、日が沈みかけた夕暮れの草原の中で、たき火の赤い光を眺めていた。

そこは街道から外れたところに、ジークが見つけた空き地だった。中央にはたき火の跡と思われる窪みの中に炭が残っていた。おそらくは前にここを通った旅人が、ここに野宿したという証だろう。周りは背の高い草で囲まれていて、街道は見えない。野宿する場所としては、なかなかの物件だった。

唯一問題なのは、薪がないことだった。

今のような春の時期では、草は水分を含みすぎていて燃えづらいし、たとえ燃えたとしても草ではすぐに燃え尽きてしまう。

かと言っても周りはどの方向を見ても草原が続いていて、薪になりそうな木などはどこにも見当たらなかった。

もつとも、スピルナの春の夜はそれほど寒くない。したがって暖房としてのたき火は必要ない。

しかし、他の動物を近寄らせないためと、何より食事のためには、たき火は絶対に必要だ。味の良し悪しは別にしても、細菌による食中毒のことを考えれば、食料はできるかぎり熱を通してから食べるのが妥当だ。

特に、ジーク達のように旅をしているのなら、なおさら衛生には

気をつけないければならない。食中毒で倒れたあげく、誰にも見つかられずにそのままお陀仏、ということになりかねないからだ。

「ジークさん、お腹すいたよお」

スウが子供っぽく駄々をこねる。

「お前、昼にあれだけ喰つといて良くそんなことが言えるな。太るぞ」

ジークが言い返す。これ以上スウに好きなように食べさせていたら、本気で破産しかねない。彼の脳裏にそんな確信が過ぎった。

「だいたい、薪もないのに飯が作れる訳無いだろ」

「でもお〜…」

スウは諦めきれない様子で口を尖らせる。

スウはそうしてしばらくの間ジークを見つめつづけた。すると今度はジークの方が居心地が悪くなる。知らぬ間に、スウがジークと一緒に旅をしたいと頼んだ時と同じ状況になっていた。

ジークはその視線をできるかぎり無視しようと必死で努めたが、結局、それもまた無駄な努力に終わったのだった。

「ったく、しょうがねえな…乾パンなら食中毒にはならねえだろ」

ジークはそう言って渋々荷物から、一見クツキーのようにも見えるその保存食を探り出し、むすつとした顔でスウに投げ渡した。スウは、まるでフリスビーを追いかける犬のようにその袋に飛びついた。

「ふわあ、ありがと、ジークさん！」

スウはうれしそうに感謝の言葉をジークに投げかけたが、当のジークはといえば、また少し軽くなった荷物を見てため息をつくばかりだった。

「…ねえ、ジークさん、ひとつ聞いていい？」

スウはポリポリ乾パンをかじりながら話しかける。

「一つどころか、今日一日だけですでに軽く十回近くは質問されるけどな」

ジークは面倒臭そうな声で言うが、別に批判するような口調では

なかった。

「ジークさんってなんでそんな優しいの？」

その質問はジークにとって予想外だった。

「お前にはオレが優しそうに見えるのか？」

ジークは呆れた声で聞き返す。ジークは、自分で自分が優しいなど、露ほども思っただことがなかった。

「だって優しいもん」

スウは声を大きくして言った。

「そりゃ、あの魚屋なんかよりは優しいかもしれないけどさ」

ジークはやはり曖昧な答え方をした。今までジークは、人に『優しい』などと言われた事はなかった。それゆえ、それに対してどう対応すればいいのか分からないのだ。

「けど、少なくともオレはお前が思っているような人間じゃない。

これだけははっきり言える」

ジークはそう言うのと、どこか後ろめたそうに目を逸らした。

「なんで？なんでそう思うの？」

スウは続けて尋ねる。ジークの考えとは真逆に、スウにしてみればなぜジークがそんなことを言うのかが分からなかった。

「だってジークさんは昨日、あたしのこと助けてくれたじゃない。もしジークさんが優しくくないんだったら、あの時はどうして助けてくれたの？」

「それは…」

ジークは言葉に詰まった。改めて考えると、自分でもはっきりとは分からなくなっていた。

「別に、ただのちょっとした気まぐれだったの」

彼はなんとかその場しのぎの台詞を言ったが、しかしやはりスウはその答えに満足していない様だった。

スウは頬をぷくぷくと膨らませてジークを見つめていたが、やがて、
「もう、寝る」

むすつとした声で一言それだけ言って、スウは自分の分の毛布に

包まって、ジークに背を向けて横になった。

「…やっぱ訳が分からねえや」

しばらくその姿を無心に眺めていたジークも、しまいにはそう言い捨てて、自分の毛布を引き寄せて、それに包まった。

その後、日が暮れて辺りが真つ暗になってからも、ジークとスウは互いがいつまでたっても寝付けないでいるのを心のどこかで感じ取っていた。

次の朝、東に昇った太陽を左に見ながら、スウとジークの二人は昨日と同じように街道を歩いていた。

しばらく歩いていると、だんだんと辺りの風景が変わってきた。

今までただの草原だった道の周りに、高さ1メートルを越す木製の柵が見えてきた。どうやら草原の一角を囲んでいるらしいのだが、あまりに広いため、柵の反対側はまったく見えなかった。その柵の中では、晴天の下、ちらほら見える牛が気ままに牧草を食べていた。別の方向を眺めてみると、同じような柵があちこちにあり、あちらには羊、こちらには山羊と、それぞれ別の種類の家畜が放牧されていた。

これは、二人がとりあえずの目的地であったエスル村に近づいていることを表していた。なぜなら、それはエスル村に属する牧場だったからだ。

この辺りに気持ち良く広がるだっ広い草原は、地質が良く、牧畜には持ってこいの一等地として知られている。

それゆえ、エスル村を含むこの一角で生産される生乳や羊毛はスビルナ公国でもなかなかの評価を受けている、いわゆる一つのブランドである。

リゲルの一件から判明したスウの動物好きは、ここでもやはり表に出ていた。

「ねえねえ、ジークさん、羊さんって乾パン食べるかなあ」

偶然近くで草を食んでいた羊のそばに駆け寄って、スウは嬉しそうな声ではしゃいでいる。

「お前それ、オレが羊のために大事な食料を提供すること前提で言っただけか？」

ジークは少しイラツとしながら言った。一方的にジークから食べ物を買っているだけのスウには、その日暮らしなリイト（旅人）であるジークにとっての食料の大切さが分かっていないのだ。

「あたしにはよくて、羊さんにはダメなの？」

スウは口を尖らせて言う。まるで自分と羊を同格に考えているような口ぶりだった。

「当たり前だろ。なんでわざわざ羊なんか大事な食料を明け渡さなきゃいけないんだよ」

ジークはため息混じりに言った。動物をさん付けで呼んでいる辺りからも、スウがよほどの動物好きであることは分かっていたが、言うまでもなくそれは、ジークが羊に食べ物を与える理由にはならない。

「それに、そもそも羊は乾パンは食べないだろ」

「そうなの？でも、いっつも草ばかり食べてて、つまらなくないかなあ」

スウは残念そうに言った。

「そりゃ、人間と羊とじゃ考え方が違うんだろ。そんな細かいこと気にするなよ」

ジークは呆れた声で言う。

「でも、羊さんだってたまには草なんかよりおいしい物、食べたくなるんじゃないの？ねー」

スウはそう言って左の手を柵の間から入れて羊の頭を撫でていた。

ジークは呆れつつもそんなスウのやさしそうな横顔がどこか可愛く思えて、そんな自分に驚いていた。そしてそんな思考を振り払おうとするようにそっぽを向いたが、その感情の余韻はまだ胸の奥に

残って疼いていた。

「まったく、ついて来ないなら置いてくぞ」

ジークは焦って心にもない言葉を言ってしまう。そしてさっさと先へ進んだ。

スウはしばらくいやそうな顔をしていたが、仕方なくジークの後を足速に追った。

エスル村は、中央街であり、城壁で囲まれていた都会だったパテルとは対照的に、まさに田舎風でのどかな村だった。どの方向を見ても、なだらかな丘陵地帯にあるのは農場ばかりで、家らしい家は所々にいくつも見えるだけで、人の数より羊の数の方が多いのは火を見るよりも明らかだった。

なんだかんだ言っつて、この牧歌的な風景にはジークも心を和ませていた。

ただ、恥ずかしいのでそういう感情を表にだすことはほとんどない。

しばらく歩いて行くと、あるなだらかな丘を越えたところで、突然道の脇に一つの建物が見えてきた。

二階建ての四角い木造の建物で、正面にある入り口の上には看板があり、その横にはいくつも枝分かれした大きな黄ばんだ角が飾られていた。

看板には、何やら言葉が書かれていたが、あいにくスウは文字が読めなかった。

「『レインディア亭』だ。レインディアってのはトナカイの事だよ」
スウが尋ねるとジークはそう答えた。

スウはそこで、看板の横に飾られた角がトナカイの物だと分かった。端から端まで2メートルはあるかというほどのこの角の持ち主は、一体どんなトナカイだったのだろうか。

そんなことをボンヤリと考えていると、いつの間にかジークはそのバーに入ってしまったので、スウはいそいそとそれに続いた。

レインディア亭は、数えるほどしかないテーブルに、数人の村人が座っている。カウンターの奥では眼鏡をかけた細身のマスターが、せつせとグラスを磨いている。窓からはほのぼのとした朝の日差しが差し込み、茶色い床を照らしていた。スウが遠慮がちに開いた櫛の扉は、扉にさげられたベルを揺らし、カラカラと乾いた音を立てている。

朝のバーは、スウの抱いていたイメージとは違い、実に閑静な物だった。酒場が活気づくのは、昼ではなく夜である。

ただ、その中で多少目立つものがあるとすれば、それは一人カウンター席に座った旅装束の女性客だった。

ジークはバーに入るなり、カウンターの方へと歩み寄った。スウはジークの目的を知らないのです、どうするべきか一瞬迷ったが、結局ジークと一緒にカウンターへと歩いた。

「よう、ジーク、来たか」

すると、マスターがジークに話し掛けてきた。カウンター席に座っていた女性客も、それに反応したのかジークの方を振り向く。フードのしたから覗いたその顔は、だいたい二十歳前後と言ったところだが、化粧もしておらず髪は肩にかからない位の長さに切つてあるので、あまり女性らしくない顔立ちに見える。一言でいえば、色気がない。

マスターはふと視線をスウに向けた。その刹那、スウにはマスターの視線がスウの尖った耳を見てにわかにな鋭くなったように見えた。しかしそれはほんの一瞬の事で、次の瞬間にはにやっとした笑いを浮かべて、こう言っていた。

「今日はずいぶんと可愛い連れがいるじゃないか、ジーク」

マスターはからかうような声音で言った。

「お前もそろそろカノジョが欲しくなる年頃か？」

「ちげーよ、成り行きだよ、ただの」

ジークはイラツとした声で言い返した。

「そんなこと言って、顔が赤くなってるぜ、ジーク」

男言葉でそう言ったのは女性客の方だった。

「うるせえ！」

ジークはカツとして言った。

「あの、ジークさん…この人たちって…？」

そこにスウが遠慮がちな声で口を挟む。

「ん？ああ、悪い、紹介が遅れたな」

ジークは頭をかきながら言った。

「こいつらは、オレと同じ、『ライト』のメンバーだ」

ジークはマスターと女性客を指し示した。

「つつても俺は『元』だがな。シグルス・キエスト、今はこのレインディア亭でマスターをしている。以後お見知りおきを」

先にマスターのシグルスが言った。

「そんであたしはカレハ・ホーライク」

それに続いて女性客のカレハが気さくな声で自己紹介した。

「…あたし…スウ・ロ・ヤマ・イシュラーグ」

スウもそれに釣られるように自己紹介した。

「ずいぶんと珍しい名前だな。ま、よろしくな、尖り耳のおチビちゃん！」

カレハがそれに答える。

「ほらほら、二人とも、いつまでもそんなところに突っ立ってないで、こっちにきて座りなさいな」

シグルスがスウとジークに向かって言った。

「それもそうだな」

ジークはそう言ってカレハの右に空いていたカウンター席に腰掛ける。スウはそれに続いてジークの右隣りに座った。

「さてと、ジークは酒は駄目だし…オレンジジュースでも飲むかい？」

シグルスがからかうように言う。

「誰が飲むか！」

その言葉にジークがキレた。

「そう言うなって。ジークみたいなお子ちゃまにはぴったりじゃねえか」

そこに追い討ちをかけるようにカレハがからかう。

「オレはガキか！」

「違うのかよ」

「っ……」

ジークはそこで言葉に詰まった。認めようが認めまいが、十六歳という年齢そのものは変えられない。

「そもそも、こんなどうでもいいところでキレてるのがガキの証拠だな」

「っ……」

どんどん追い込まれていくジーク。そしてカレハがさらに追い討ちをかけようとしたその時、シグルスが一言。

「そんなことで調子に乗るカレハも一緒にオレンジジュース行きだな」

「なっ……てか、オレンジジュース行きって何だよ！」

そこでカレハがつっこむ。

「決まってるだろ？ 『ガキ扱い』って意味だよ」

「っーかちよつと待て、今カレハ『も』って言ったろ！オレは外せ！」

クールに返すシグルスと、小さな事を気にする子供っぽいジーク。そんな様子を、スウは半ば放心したようにブーツと眺めていた。

どうやら長い付き合いらしいこの三人の会話に、スウは自分の入るすき間がないことに気がついていていた。

スウは、胸に詰まる物があるのを感じて、俯いて、茶色い木製のカウンターに無数に走る木目を見つめた。そして無意識の内に左手の人指し指を伸ばし、横に走るその焦げ茶色の線をなぞる。ニスを塗られた冷たい、なめらかな木目の上に指を滑らせつつ、スウはひそかにため息をついた。

(結局、あたしには居場所なんてない……)

長年、周りの人間という人間にいわれのない差別をされてきた。父の居たあの家以外に、スウには居場所などなかった。まして父が死んでから二年、スウは居場所も生き甲斐も持てずに、流れるままに生きてきた。そして、ついに生きることさえも諦めかけたその時、ジークが現れたのだった。

もしかしたら、この人なら、自分の居場所になつてくれるんじゃないか。そんな淡い期待を抱いて、必死で継り付いたのだ。

けれど、もしかしたら、そんなものはただの自分の思い込みなんじゃないだろうか。そんな不安が、常にあつた。

実際、おそらくジークは今自分が居なくなつたとしても、何も気にかけないだろう。スウがどれだけ必死でも、ジークが同じように自分のことを思ってくれる訳ではない。

自分勝手な考え方だと自覚はしている。出会ってまだ二日の自分とジークがあまり打ち解けられないのが当然だと言うことも、分かつてはいる。でも、それでも、もっと自分を見てほしいと切に願う自分は消えてはくれない。そんなことを考える度、胸が苦しくなつた。

自分は誰にも必要とされていない。スウの中でその思いは、父が死んだあの日から、日に日に強くなつていった。

自分は一体どうすればいいのか。スウはそう自問した。だが、返ってくる答えはなかった。

「あれ？そっいゃ、スウはどこ行つたんだ？」

不意にカレハが オレンジジュースを飲みながら 尋ねた。

気がつくと、ジークの隣にいたはずのスウは、いつの間にか居なくなつていた。

「なっ、あいつ、いつの間に……」

ジークが驚いた声をあげた。

「お前、隣に座つてたのに気づかなかつたのか？」

そう言うシグルスも、やはり驚いている様だった。

「……」

ジークは返す言葉もなかった。三人もの人間がいる中で、誰にも気づかれずにその場を離れるなど、そう簡単にできることではない。というかそもそも、なぜいなくなったのだろうか。

「ちっ、仕方ねえ、とにかく捜しに行くか」

ジークが舌打ちして言った。レインディア亭の中に隠れられそうな場所はない。そう考えてドアに向かおうとすると、シグルスがそれを引き止めた。

「待て、扉から出て行つたんなら、ベルが鳴って気づいたはずだ。

あの子がそこを通つたはずはない」

「だとしたら、どこから……」

そこでジークは思い出した。レインディア亭には裏口があるはずだ。スウがバレないように出て行つたのなら、そこしかありえない。そこで裏口へ向かおうとすると、またもやシグルスがそれを制した。「何だよ、シグルス」

ジークが突っ掛かるようにシグルスに言った。シグルスはそれに対して冷静な声で答えた。

「行く前に、一つ教える、ジーク。あの少女はそもそも何者なんだ？」

その問いに、ジークはたじろいだ。そこに、シグルスがさらに問う。

「あの紫の瞳に尖り耳、素人が見たつて普通の人間じゃないって分かる。お前はなんで、あんな少女を連れてくるんだ？」

「……うるさいな、そんなのオレの勝手だろう」

ジークはそう言い捨てると、裏口へと向かった。

「しゃーない、あたしも手伝うか」

続けてカレハもジークの後を追う。

二人が出て行つた後、シグルスは一人、考え込んでいた。

ジークとカレハは、裏口からレインディア亭の外に出た。パツと見たところ、辺りは一面緑の草原で、スウが隠れられそうな所はほとんどない。

「おい、ジーク、あたしは念のため店の周り捜すから、お前はあっち捜してこいよ」

カレハは、草原の中でも特に背の高い草が生えている場所を指差してそう言った。スウがいついなくなつたのか、定かではないが、そう遠くには行っていないはずだ。もしスウが隠れているとすれば、それ以外に考えられる場所はない。

「分かつた」

ジークは一言そう言うと、走って行った。

そしてカレハは店の横にある納屋に向かった。

スウは膝を抱えて、暗い納屋に座っていた。納屋の中にはかすかにほとんど使われていないらしい納屋は、所々にすき間ができていて、そこから差し込んだ細長い光が、スウの指先を照らしている。その指の上を、小さなクモが這っていたが、スウは嫌がるそぶりも見せなかつた。

スウはまたため息をついた。何より、自分勝手な自分が情けなかつた。

(何でこんなことしてるんだろ)

その時、外で草を踏む足音が聞こえてきた。スウはドキツとしつつその足音を聞いていた。

足音は納屋の、スウがもたれ掛かっている扉の反対側で止まった。

「スウ、そこに居るのか？」

それはカレハの声だった。

「カレハさん……」

スウはかすかにため息をついた。

「ジークじゃなくて悪かつたな」

スウのため息を知ってか知らずかカレハが言った。

「ジークに捜しに来て欲しかったんだろ」

「そんなこと…」

スウはごまかすようにつぶやく。

「隠すなよ。隠したってアタシには分かる」

カレハが言った。

「え…？」

その言葉に、スウはふと顔をあげた。その動揺は、扉の向こうのカレハにも伝わったようだった。

「アタシは、今のあなたとおんなじ表情をした奴を、今まで二人見てるんだ。だから、あなたが何を考えてるのか、大体想像がつく。せつかく時間もあるんだ。少し、話をしないか？」

カレハは気軽な声でそう言った。それが自分を元気づけるためだということ、スウにも分かった。

「それはいいですけど…ジークさんは？」

思い出したように尋ねる。

「あいつなら今、あなたを捜しに出てったぜ」

「じゃあ、カレハさんはどうしてあたしがここにいて分かったんですか？」

「悩んでる時は、誰だつてどっか狭い部屋に入りたがるだろ？」

カレハは当たり前のように言った。

「でも、今はそんなことよりあなたの話だ」

スウは自分の膝を抱く腕に少し力を加える。背中にあたった扉越しに、カレハが反対側に座ったことが分かった。

「あなた、居場所が欲しいんだろ」

カレハは少し間を置いて言った。スウは腕の力をまた少し強めた。凶星だったからだ。そしてカレハは続けた。

「理由は聞かないよ。人間誰しも、自分一人の胸に仕舞って置きたい事はあるからな。理由はともあれ、あなたは自分の居場所が、居場所になつてくれる人間が欲しかった。だから、ジークについて行つたんだろ」

「…はい」

やはりこれも凶星だった。スウは隠そうとはせずに素直に認めた。「だけど、あんたはジークが本当に自分の居場所になってくれるか不安だった。だから突然いなくなったりして、あいつがどう反応するかを試そうとした。これも合ってるか？」

「…どうして、そんなに分かるんですか？」

スウがそう尋ね返したのは、驚いたからでも、怖くなったからでもない。

嬉しかったのだ。今までこんなに自分のことを理解してくれた人はいなかったから。

「アタシは、ジークみたいなデクの坊じゃないからな」

カレハはそう言って笑った。そして続ける。

「それにしても、あんたもいくらなんでもここまでしなくたって、他にも方法はあっただろうにな。」

要するに、不器用なんだよな、あんたも、ジークも」

「ジークさん…も？」

スウは驚いて聞き返す。

「そうだよ。あいつは昔っから不器用だった。何よりあいつは、自分の弱さを他人に知られたくないんだ。アタシも、初めてあった頃はあいつの事を理解するまで大変だったぜ」

「ジークさんの弱さって、どういう事ですか？」

「あんたも気がついてるんだろ。あいつは、優しいんだよ。根っからのお人よしだからな。それで、あいつはそれを自分の弱さだと思つて、必死に隠してんだ」

その言葉に、スウは納得した。この前ジークが優しいのか優しくないのかはつきり解らないと感じたのは、実際にジークの中でその二つの気持ちが葛藤していたからだだったのだ。でも…

「でも、優しさって弱さじゃないですよね」

その言葉は、スウの口から自然と漏れだしていた。

「やっぱあんたもそう思うよな。でも、それをあいつは分かってな

いんだよ。あいつはそういうところが不器用なんだ。だから言っとくけど、あいつが言った言葉をそのままに受け取るなよ。あんた達がどうやって出会ったのか知らないけど、もしあいつが『好きにする』なんて言ってたんなら、それは『一緒に来て下さい』って意味だからな」

それを聞いてスウは心の中でクスツと笑った。まったく凶星だったからだ。そして今度は、また嬉しくなった。いつしかスウは膝を抱えていた腕を解き、足を延ばしてリラックスした体勢になっていた。さつきまで自分の中に溜まっていた不安も緊張も、いつの間にもやら無くなっていた。

「…おっと、そろそろジークが戻って来る頃だな。」

カレハがそう言っただけで立ち上がるのが、物音で分かった。

「あんね、カレハさん…」

スウが唐突に言った。

「なんだ、スウ？」

カレハの声は、始めと同じく気軽だった。

「…ありがとうございます」

ありったけの想いを込めて、スウはそう口にした。

「いいってことよ。困った時はお互い様さ」

カレハが答えたその言葉もまた、温もりに溢れていた。

「まったく、今までどこ行ってたんだよ、スウ」

スウの姿を認めたジークは、ため息をつきつつそう言った。

「ジークさん、あたしのこと、心配してくれてたの？」

スウはジークを見つめながら言った。

「な、何言っただよ。突然いなくなっただから、びっくりしただけだよ」

ぶつきらばつにそう言うジークの頭には、そこそこに雑草が絡まっていた。

「あんね、ジークさん」

スウは勇気を振り絞って言った。

「なんだよ」

ジークは続きを促した。

「ジークさんは…ジークさんは、あたしが居てもいい？」

「何言ってるんだよ…言っただろ、好きにしるって」

ジークはゆっくりとした口調でそう言っただけで不自然に目をそらした。

すると突然、スウはジークに抱きついた。そして言った。

「やっぱり、ジークさんって優しいんだね！」

そう言うスウは、ジークに出会ってから初めて笑顔になっていた。

「どうしてそうなるんだよ！…つか、くつつくな！」

しっかりと抱き着いて離れようとしないスウに、ジークはドギマギして叫んだ。

しかし、ジークは突然喚くのをやめた。

自分に抱きついたままのスウが、声を出さずに泣いてる事に気がついたからだだった。

ジークはどうしていいか解らずに、とっさに助けを求めるようにカレハに目を遣った。

カレハは黙って見ていたが、意味ありげに一つ頷いて見せた。

ジークは少し戸惑っていたが、やがて覚悟を決めて、両手でスウを抱き返した。

スウが泣き止むまで、ジークはずっとその華奢な体を支えるかのように抱き続けていた。

第二章 「幻の町」

エスル村 レインディア亭

「おう、ジーク、スウはもう眠ったのか？」

ジークがレインディア亭の二階から階段を下りてくると、カウンター席に座っていたカレハが声をかけてきた。時間は夜8時過ぎ。外は日が落ちてあらかた暗くなっていたが、それに反比例するようにレインディア亭は賑わっていた。

エスル村では昼の間は家畜の世話に忙殺されている農夫や他の町や村から来た人達の数少ない娯楽と社交の場として、レインディア亭は重宝されている。ランプの赤っぽい明かりのもと、あちらでは羊飼いが仲間同士で酒を飲み、こちらでは吟遊詩人気取りの素人がめちやくちな詩を歌うというように、バーは小さいなりの賑わいを見せていた。

「まあな」

ジークは短く答えた。スウがジークに甘えたがってなかなか寝付けなかったなどは、恥ずかしくて口が裂けても言えない。

「お前もガキなんだから早く寝た方がいいだろ。成長止まるぞ」
シングルスが言う。

「だからガキ扱いすんのはやめろって」

ジークは怒る気力もなく言った。

「まあいい。ちょうどよかった。ジーク、お前に聞きたいことがある」
とシングルスがジークを手招きした。

「何だよ」

ジークはカウンター席に座りながら聞いた。といっても、何を聞かれるのかは察しがついていた。

「昼はいろいろあってちゃんと聞けなかったが、うちとしても正体

の分からない奴をおいそれと泊める訳には行かないんでね」

シグルスは遠回しに言ったが、ジークにはその言葉の意味ははっきり分かった。

「…スウの事か」

カレハも気がついて静かに言った。

「結局のところ、あいつは一体何者なんだ？」

シグルスが問い詰める。

「…正直、オレも知らない」

ジークが目を反らして答える。

「じゃあ、危険かも知れないやつをわざわざ連れてくるのか？お前らしくもない。時期が時期なんだ、用心するに越したことはないぞ」

シグルスは多少責めるような口調で言った。

「危険？それどういう意味？」

とカレハが口を挟む。

「阿保か、カレハ。あいつのあの紫の瞳も、尖った耳も、『精霊族』だけが持つ特徴だ。たいていの国じゃ不吉の証とされている」

シグルスがそう説明している間、ジークはずっと目を背けていた。

精霊族というのは、魔法の力を持ったあらゆる生き物のことを、人間が呼ぶときの総称だ。魔法になじみのない一般の人間達のほとんどは、精霊族は不吉で恐ろしい物だと信じている。

「…『精霊族』が不吉つてのがそもそも、人間が勝手に作った偏見じゃねえかよ」

ジークが吐き捨てるように言った。

「そうは言ってもな、ジーク。人間が『精霊族』を怖れるのだからちゃんとした理由があるからなんだよ」

シグルスが諭すように言った。

「…とにかく、スウのことはオレに任せてくれないか」

ジークは静かな声で言った。

「なぜだ？なぜそんなにあの娘を庇う」

シグルスが訝るような口調で尋ねる。カレハはその様子を黙って

観ていた。

「それは…それも、オレにも分からねえ」

ジークは情けない声で答えた。

シグルスは深くため息をついた。そしてしばらく黙っていたが、やがて言った。

「…テグレスには、オレが適当に伝えておく。それくらいはいいだろう?」

それは暗に、それ以上口出しはしないと意味を込めていた。

「すまねえ、シグルス」

ジークは静かに、しかし感謝の気持ちを込めて言った。

「話は代わるけど」

その時ジークが思い出したように言った。

「リゲルがカレハに用があるって言ってたが、あれは何だったんだ?」

街道でライトの伝令役のイタチ・リゲルに会った時、確かにそう言っていた。

「ああ、あれか」

カレハも思い出したように言った。

「なに、たいしたことじゃないよ。気にすんな」

カレハは持ち前の軽快な声で言った。

「それより、ジークもカレハももう寝ろよ。二人とも、明日発つんだろう?」

シグルスのその言葉に、ジークとカレハは渋々従った。

「ふあゝあ…」

次の朝、目が覚めたスウは大きなあくびをした。

これほど気持ち良く寝たのも、スウにとっては久方ぶりのことであつた。なにしろ父親が死んで、放浪するようになって以来、その日その日の宿さえもないような生活を送ってきたのだ。こうしてち

やっとしたベッドで寝れるというだけで、スウは幸せだった。

そつと木の床に足を下ろす。裸足が冷たい木に触れるのを感じた。ベッドから立ち上がると、サラサラとネグリジェの裾がすねを擦る。たまたまこの部屋のクローゼットに使われずに眠っていたのをスウがもらったその薄桃色の綿のネグリジェは、スウには多少大きかったが、寝巻としては十分な役目を果たしていた。

スウは大きく伸びをして、残る眠気を振り払った。そして右手の袖で目を擦りながら窓に歩み寄り、左手でカーテンを開ける。やわらかな朝の日差しが、スウの影を長く映し出し、その光はスウの隣のベッドで寝ているジークの顔をも照らし出した。

「う…ん、もう朝か？」

その光で目が覚めたジークが、寝むたげな声で言った。そして窓際に立っているスウを一瞥して、一言

「お前、寝癖ひどいな」

と言った。スウは赤面して、慌てて左手で自分の長い髪を撫で付ける。が、効果は皆無だった。

「そういうジークも、だいぶひどいぜ」

ちようどその時ジークのベッドの後の扉を開いて入ってきたシグルスが言った。

「うるせえな…」

と言いつつジークも自分の髪を撫で付けた。

「とにかく、朝メシできたから用意できたら下に来いよ」

シグルスはそう言い置いて、また下に戻って行った。

「よつ、スウ、ジーク」

二人が下のレインディア亭に降りると、先に起きてテーブル席に座っていたカレハが声をかけてきた。

「おはようございます、カレハさん」

スウがそれに応えて挨拶する。

「よう、カレハ」

続いてジークも言った。

「…おっと、そうだ、スウ、あんたに渡したいもんがあるんだ」
カレハは思い出したように言った。

「あたしに…？」

「そうそう、あつた、これだ」

そう言つてカレハがそれを取り出した。

スウにはそれが何だか解らなかつた。陶器でできた手の平大より少し大きい楕円型のそれは、表面に穴がいくつも空いていて、端っこの方に丸っこい出っ張りがあつた。穴の様子から、どうも中は中空のようだ。

「なんだ、あんた、オカリナを知らねえのか？」

首を傾げるスウに、カレハは拍子抜けしたように言った。スウはこくりと頷く。

「…オカリナ？」

スウはそれの名前を繰り返した。

「そ。ようは笛だよ、笛」

カレハはそう説明して、オカリナの吹き口に口をあて、実際に吹いて見せた。

すると、オカリナの穏やかな音色が、店の中に広がった。その音は、聞く人の心を鎮め、慰めるような優しい音だった。低く、高く、その音は響いた。

カレハが吹き終わると、スウは名残惜しそうに音の鳴らなくなつたそのオカリナを見つめた。

「…やつぱ、アタシじゃ吹けてもこんくらいか」

カレハはどこか情けなさそうにそう言った。

「そんなこと…すごく綺麗でした」

スウは首を振つて言った。世辞などではなく、正直にそう思ったのだ。

「褒めてくれるのはうれしいけど、こんなんじゃまだまだなんだよ、実際」

そういつつも、カレハはちょっと照れているようだ。

「これはだいぶ前にリイト仲間からもらったオカリナんだけど、アタシはあんま音楽は好きじゃないし、特別上手でもないから、持ってても宝の持ち腐れなんだよ。だから、あんたが持ってた方が良いと思つてさ」

そう言つてカレハはスウにそのオカリナを手渡した。が、スウはただただ戸惑うばかりだ。

「でも、あたしだって笛なんて吹いたことないですし……」

「大丈夫、基本のところはアタシが教えるから。次の街まで是一緒に行くことになったし、あんたも何がしか趣味があつた方がいいぜ。見たところなんにも持つてないみたいだし」

カレハは明るい声でそう言つた。

「あ、ありがとうございます……」

スウは感激した様子で受け取つた。

近くで見ると、オカリナの表面には不思議な模様が刻まれていた。のたうつ蒼い炎のような。逆巻く水の流れのような。スウはその美しい模様にしばし見惚れていた。

「おい、スウ、お前も早く朝メシ食つちまえよ。じき出発するぜ」
ジークにそう言われ、スウは一度カレハにお辞儀をしてから、ジークと同じテーブルに座つて食事に取り掛かつた。

そんなスウの素直で可愛い仕種を、カレハは微笑んで眺めていた。そして思つた。

こりゃ、ジークが惚れ込むのも分かるな。

そうしてジーク、スウ、カレハの三人はエスル村を後にした。次なる目的地はノーレラス地方の中央街・レイアークだ。今度はパテルからエスル村の旅よりも数倍長い距離があるので、かなり長い旅になりそうだ。

スウにとつて、それは有り難かつた。それはそのまま、カレハと

同行できる時間が長くなるという事だからだ。スウは自分を理解してくれるカレハに早くも好感を持ち始めていた。もし、スウにとつてジークを不器用な兄に例えるなら、カレハは面倒見の良い姉のような存在だった。

スウはジークの事が好きだし、慕っているが、なにぶん異性であり、その分の価値観の違いもあって、今までも気まずい空気が流れることが多かった。それに対して、カレハは親切だし、いろいろと気を遣ってくれた。

そんな道すがら、カレハはスウにオカリナの吹き方も教えてくれた。すると、どうにもスウには音楽の才能があつたらしく、指使いや音の出し方などの基本はあつという間にマスターしてしまった。

旅の一日目が終わる頃、三人は道の脇の岩影に丁度いい夜営場所を見つけた。ここなら一晩、誰の邪魔も入らなそうだ。

「それにしても」

とジークは言った。

「お前らなんでそんなに仲が良いんだ？昨日、何かあつたのか？」

そう言われてスウとカレハは顔を見合わせた。そしてスウは微笑んで言った。

「ひみつ」

「…そうかよ」

カレハがなぜか笑いをこらえているなか、ジークはぶつきらぼうに答えた。

「あんね、ジークさん」

たき火も消えかけた真夜中、隣で寝袋に包まっていたスウが、同じく寝袋に包まっていたジークに尋ねた。カレハはたき火を挟んだ向こう側で眠っていた。

「なんだ、スウ」

ジークが静かに言った。

「少し、お話ししない？」

スウのその提案は、昨日のカレハに影響されて出たものだった。
「お話ったって、何を話すんだよ」

「うーんと…ジークさん、あたしに何か聞きたいこと、ある？何だかいつつもあたしの方から質問してばっかりだから」

スウはそう言った時、もしかしたらジークは何も聞きたいことはない、と言うかと思った。しかし、その予感はずれた。

「お前さ、自分の親の事って、覚えてるか？」

ジークがそう言うときにスウに背を向けたのを、スウは物音とたき火の薄明かりで感じて感じた。

「あたしの、親？」

スウは少し意表をつかれて聞き返したが、やがて答えた。

「本当の両親は、覚えてないけど、あたしを拾って育ててくれた人なら覚えてる」

「そっか。どんな人だった？」

ジークはなおも静かに尋ねた。

「すごく、優しい人だった。セル国の山の真ん中の家で一緒に住んでいた。すごくいい人だったのに、あたしと同じで村の人達からは嫌われてた。だけど、二年前に死んじゃったの」

スウは二年前まで住んでいた、今は遠く離れてしまったその家を思い出すようにして話した。

あの家の庭に、春にたくさん咲いた勿忘草の一本一本まで、思い出すことができた。そして、その勿忘草から連想される、父親の優しい顔…。

「名前は？」

「確か…シルト・サーズ」

父親を名前で呼ぶこともなかったの、スウはその名前を思い出すのに少し時間がかかった。

スウはそこでふと、思いついて尋ねた。

「じゃあ、ジークさんは？ご両親のこと覚えてる？」

その、あくまで無邪気にスウの口から漏れただけのその問いに、

ジークは悩むようにしばらく黙って、それから答えた。

「覚えてない。オレは何も、覚えてないんだ。親も、家族も、いたのかどうかさえもな……」

スウはそれを聞いて、自分の胸に痛みのようなものを感じた。それが単なる憐れみなのか、それとも他の何かなのか、スウ自身にも解らなかった。

しかし、今まで自分だけが不幸だと思っていた自分に気づかされたのは、紛れも無い事実だった。

ふと、昨日カレハが、ジークのことを不器用だと言っていたのを思い出す。それに、ジークは自分の弱みを人に見せたがらないとも言っていた。

もしかしたら、表には出さないだけで、ジークはスウよりも、他の誰よりも辛い思いをしているのではないだろうか。普段は気丈に振る舞っていても、その心は誰よりも寂しさに溢れ、そしてありふれた愛を求めているのではないだろうか。

「じゃあ、ジークさん」

スウは胸に込み上げて来る思いのままに言った。

「あたしが、最初の家族じゃいや？」

「スウ、お前……？」

ジークは驚いたように聞き返した。

すぐに、スウは自分の言った言葉が誤解を招きかねないということに気がついて、急いで付け足した。

「だから、そのう、そういう意味じゃなくて、家族みたいに仲良くしようって、という意味で……」

ジークはそんなスウを信じられないような表情で見つめていた。スウは自分の声が尻すぼみに消えて行くのを、まるで別の人間として横から聞いているように感じた。そして、スウはジークを見つめ返していた。

スウとジークは暗闇の中、そうしてしばらく見つめ合っていた。が、最後にジークが口を開いた。

「スウ…ありがとう」

その言葉は、スウの胸に、そして言った本人であるジークの胸にも、深く、深く、暖かい温もりとなって伝わっていった。

翌日、三人は同じように旅を続けた。地図によると、目的地レイアークまでは五十キロほどで、早ければ明日には到着する計算だ。しかし、そうしてしばらく歩いていると、一行は思いがけないものにぶつかった。

なぜか、村があつたのである。地図に載っていない、存在しないはずの村が。

「どういうことだ？地図の間違いか？」

道の先に突然姿を表したその侘しい感じの村を見て、ジークは言った。

「いや、アタシは前にこの辺りを通つた事があるけど、こんな所に村なんてなかったぜ」

カレハも戸惑いつつ言った。

その村は、茶色い荒れ地に木造の小屋のような家がただ並んでいるだけの、淋しげな村だった。

しかし、その古びた家はどうみても、昨日今日に新しくできたばかりの物には見えなかった。

「こりゃあ何かありそうだな…とにかく、中に入ってみるか？」

ジークがそう言うと、カレハも警戒しつつ頷いた。

村に入ると、乱雑に並んだ小屋の中から、物音がして、あちらこちらの小屋から、村人達がぞろぞろと出てきた。

村人達は、みなみすばらしい姿をしていた。やせ細った身体にぼろを纏っていて、持っているものといえば、刃こぼれしたナイフだけだった。

いつの間にか、ジーク達は武器を持った村人達に囲まれていた。

「こいつら、追い剥ぎか!？」

ジークは焦った声で言う。村人達はその言葉には何も反応を見せず、ただ黙って距離をつめてくる。

「どうもそうっばいな」

カレハも少し焦ったように言う。

「おい、スウ、危ないから」

振り返りつつそう言いかけて、ジークは絶句した。一瞬して、カレハもその事態に気付いた。

スウは忽然と消えうせていた。

気がついた時、スウは暗闇の中にいた。辺りを見回すが、どこにも光の一筋も見えない。そこにあるのは、完璧な闇。それだけだった。

「ここ、どこ？」

そう言った、はずだった。しかし、声は出てこなかった。スウの背中に悪寒が走った。

さっき、ジークやカレハと一緒に歩いていて、あの村が見えた時、スウは何か嫌な予感がした。

耳の奥で妙な耳鳴りがしたのだ。それは、危険が迫っている時のスウによく起こることだった。

しかし、それをジークに伝えようとした矢先、突然目の前が真っ暗になって、気がついたらこの暗闇の中にいたのだ。

「ジークさん、どこ？」

再び喋ろうとするが、やはり声は出なかった。口からはただ、スーと空気が出るだけだった。スウは底知れぬ不安に押し潰されそうになっていた。

「ケケケ、いくら喋ろうとしても無駄さ。オイラの術にかかっている限りはね」

闇の中から、突然声がした。その不気味な笑い声に、スウは聞き覚えがあった。込み上げてくる恐怖を押し隠すように、スウは声のした方向の暗闇をにらみつけた。

「ケケケ、アンタみたいな小娘に睨まれたって怖くとも何ともないしよ」

その言葉と共に暗闇に二つの丸くて赤い目と、同じ赤色の三日月型の口が現れた。完全な真つ暗闇の中で、その不気味な目だけが、獲物を観察するかのように、スウを眺めていた。

それは間違いなく、スウとジークが出会ったあの夜に、魚屋を操ってパテルを襲撃し、火の海に沈めた悪魔、メトネスだった。

「ま、とにかくしばらくここで静かにしてるのさ。オイラの仲間が、アンタの大事な人達を殺すまでね」

メトネスのその言葉に、スウは戦慄した。

自分はこの悪魔に捕えられて、あの怪しい村では、もう一体の悪魔が、ジークとカレハを狙っている。

何とかして、この事態をジークに伝えなくては。

…でも、どうやって…？

「くそっ、どうなってんだ！」

ジークは襲ってくる追い剥ぎ達を、鞘をつけたままの大刀で押しつけながら言った。今やジークとカレハは、数十人に及ぶぼろを着た村人に囲まれていた。

「スウを捜そうにも、こんなしぶとい奴らに纏わり付かれちゃ…」

いくら襲って来るとはいえ、人間相手にそうそう刀を使えないのは、まだ少年と言っても良いくらいの年齢であるジークには、当然の事だった。

「しょうがねえ。追い剥ぎども！ちっと痛いかもしれないけど、我慢しろよ！」

そんなジークを見かねたカレハは、そう見栄を切って腰に挿した曲刀を抜いた。日の光がその刀に反射して、白く輝いた。

よく研がれた白刃を見れば、さしもの追い剥ぎもたじろぐか。と思いきや、それに対しても村人達は何の反応も示さなかった。

そんな追い剥ぎ達の様子に、ジークは違和感を覚えはじめた。どんな物にも反応を示さず、自分の命にさえ興味が無いかのよう、ただ黙々と向かってくるその姿……

「待て、カレハ！こいつら、もしかしたら悪魔に操られてるだけかもしれない」

はっと思いついてジークは叫んだ。たしか、パテルに現れた、メトネスという悪魔に操られた魚屋が、ちょうどこんな雰囲気だった。「それでも、こっちは早くスウを捜しに行かなきゃなんねえんだろ！ちよつとくらい攻撃したってしょうがねえだろ！」

そう言いつつもカレハは素早く手の中で刀をひっくり返し、峰を使って村人を押しつけた。

そして、スウというキーワードはジークにも響いた。この事件に悪魔が関係しているなら、なおさら急いでスウを見つけたさないと、最悪の事態も考えられるのだ。考えたくはないが。

「分かった」

ジークはそう言つて背中に背負っていたもう一本の棒状の包みも取り払った。そこから出てきたのはジークの『二本目』の大刀だった。

そしてジークは二本の刀の鞘を取り去った。まさに秋水と言ふべき曇り一つ無い二つの細長い煌めきが、中から解き放たれた。

そこにジークの両側からナイフを持った追い剥ぎが飛び掛かってきた。ジークはそのボロボロの刃物をしゃがんでかわし、それと同時に両手を左右に突き出して、刀の柄をその腹に食い込ませた。ま

ずは、二人が倒れた。

すると今度は後ろからジークの足に向かって腕が伸びてきた。ジークはそれをジャンプで避けて、逆にその足を（骨を折らないように加減しつつ）踏み付けた。

間髪容れずに正面から追い剥ぎが投げたナイフが飛んできた。ジークはそれを刀で弾き返し、一瞬で追い剥ぎとの距離を縮めておもいつきり刀を振って、峰を使って隣にいたのを含め三人の追い剥ぎ

を吹っ飛ばした。

一方カレハも、曲刀を巧みに操って一振りごとに追い剥ぎを蹴散らして行った。

いかに峰打ちとはいえ、本気を出したジークとカレハの前に、始めから飢えていた追い剥ぎなどは、物の数に入らなかった。

最後にジークが正面の敵のナイフを身軽なスウエーバックでかわし、右手を地面について、カウンター気味の上段蹴りをかませて、追い剥ぎ達は全員静まった。

「それにしてもスウは一体どこに行っただんだ？」

ジークは焦った声で言った。

「おい、ちよつと待て、ジーク」

カレハはそう言って村の一角にある小屋を指差した。

そこに、スウがいたのだ。小屋の前に立って、必死で右手を振っている。

「スウ、今までどこに行ってたんだよ！」

カレハはそう叫んでスウに駆け寄った。ジークはなぜか冷静にその様子を見つめていたが、やがてカレハに続いた。

「どうやらスウには目立った外傷は無いようだった。」

「ごめんなさい。でも、もう大丈夫……」

カレハとジークが近くに来ると、スウは伏し目がちに言った。

「いいっていいって、とにかくまずはこの村からどうぞ」

カレハはホツとした声で言った。しかし相変わらず、ジークは何も言わない。カレハも、さすがに訝しんだ様子で言った。

「どうしたんだよ、ジーク。こんなところからは早くおさらばしようぜ」

しかしやはりジークは黙って見ていた。カレハもスウも不思議がっていた。スウは首を傾げて、無意識の内に右手で左の前髪をかきあげた。

次の瞬間、ジークはありえないことをした。突然、目の前のスウに切りかかったのだ。スウは驚いて後ろに跳び退いた。

「何すんだ、ジーク！」

カレハが信じられない思いで叫んだ。

「…その程度で、オレを騙せると思ったか？」

ジークはカレハの問いには答えず、スウに向かって静かだが怒りの籠った声で言った。カレハにはその言葉の意味がにわかには解らなかつた。そしてスウが言った。

「騙す？ どういう…」

「お前はスウじゃない」

ジークはそう言つて再びスウに切りかかった。

スウは再び避けようとしたが、今度は間に合わなかつた。ジークの大刀がスウに迫る。

スウが刀に切られた瞬間、カレハはスウの姿がぼやけ、そして霧散するのを見た。スウの体は一瞬にして黒い霧となり、それが再び集まつて、全く違う姿が現れた。

それは、人間の姿をした真つ黒な影だつた。その出で立ちは、前にパテルを襲つた悪魔、メトネスに酷似していた。が、メトネスよりもずつと長身だつた。

「…なぜ偽者だと判つた!？」

長身の悪魔は唸り声で言った。

「残念だつたな」

とジークは答えた。

「スウは左利きだ」

「…なるほどな。私としたことが、そんな単純なミスを…」

長身の悪魔は呟くように言った。

「ジーク、コイツが悪魔か？」

カレハはその長身の悪魔を睨みつけながら聞いた。

「ああ。といつても、パテルを襲つた奴とは違つてみえたが」

ジークはそう答えた。

「ふふふ、その通り。私の名はグルナ。見ての通りの悪魔にございます」

長身の悪魔、グルナはニヤリと笑ってそう自己紹介した。そして、続けて言った。

「さて、それでは、そのお命頂戴いたします」

その言葉にジークとカレハは身構えたが、グルナは襲って来なかった。その代わり、二人の後ろで何か物音がした。

二人が振り返って見ると、さっき倒したはずの追い剥ぎ達が、再び起き上がって来ていた。

暗闇の中、スウはメトネスを睨み続けていた。それに対してメトネスの方は余裕たつぷりといった様子でスウを眺めている。

スウは、ただ捕まっているだけのふりをしながら、必死に耳を澄ませて外の音を聞き取るうとしていた。

スウの耳は、尖っているだけの事はあって、普通の人間にはできないことができた。

だから、今のスウには外のどこかでジークやカレハが戦っているのが音で判った。そして、二人がなぜか何も無い場所で空気を相手に戦っていることにも気付いていた。その近くに悪魔の気配がする。

スウは生れつき回転が遅いらしい頭を必死で働かせて考えた。

メトネスを見れば分かるように、悪魔には、特異な能力がある。

おそらく二人は、その悪魔の術にかかって幻覚を見せられているのだ。

だとすれば、このままでは、際限なく起き上がってくる幻の敵と戦って、二人はいずれ力尽きてしまう。どうにかしてその事実を二人に伝えなくては。

しかし、どうやって？

メトネスがいるかぎり、声を出すことはできない。ここから出ることもできない。こんな状況で、どうやってジーク達にメッセージを伝えることが出来ようか。

大事な人が殺されようとしているのに、自分には何もできない。そう実感した時、スウは突然弱気になった。メトネスを前にして

ピンピンに張り詰めていたスウの心は、今にもプツリと切れてしま
いそうになっていた。

スウのそんな感情の変化を感じとってか、メトネスはその不気味
な笑みをさらに深めた。その残酷な赤い光を放つ

今や心の鎧が崩れ、目の前の恐怖に直に晒されてしまったスウに
出来ることは、ただ震え、弱々しい姿で座ったまま後退りすること
だけだった。

スウの背中が壁に当たった。その時、何かが壁にあたって鈍い音
を立てた。それは、スウが肩からかけた丸いポーチだった。

それを見て、スウの中に微かな希望が芽生えた。

そのポーチの中に入っているのは、スウが生まれて初めて他人か
らプレゼントされた物だった。それと同時に、一つの記憶が蘇った。

それは、スウがカレハからオカリナの吹き方を習っていた時の記
憶だった。

「そういうや、スウ、そのオカリナの前の持ち主が言ってたんだけ
だよ」

とカレハは思い出したように言った。

「音楽には『魔を祓う力』があるって、知ってるか？」

「魔を、祓う？」

スウは小首を傾げて聞き返した。

「そ。音楽には、不思議な力がある。突き詰めて言えばただの音色
と音階の繋がりになのに、人の心を安らげたり、感動させたり、いろ
いろな事ができる。まるで小さな魔法みたいにな」

カレハは遠くを見るように言った。

「しかもそいつが言うにはよ、そのオカリナには、音楽が持つその
不思議な力を、手助けする魔法の力が秘められていて、その力を使
いこなせば、音楽の魔法が本物になるって言うんだ」

それを聞いてスウは自分の手の中にある、そのオカリナを見つめ
た。例の不思議な模様が描かれている以外には、別にどうというこ

とはない、ただのオカリナだ。

「音楽の魔法が…本物に…」

スウはその言葉を繰り返した。音楽の魔法、その言葉はスウの中に強く響いた。そして、カレハに尋ねた。

「それって、どうすればできるんですか？」

「えっ…と、それは…何て言ってたっけな」

「…覚えてないんですか？」

どうやらど忘れしてしまったらしいカレハのその言葉に、スウは残念そうに聞いた。

「いや、ちよつと待て、今思い出す！」

半ばスウを励ますように、半ば自分に言い聞かせるようにそう言っただけカレハは、なんとか思い出そうとしてしばらく首をひねって唸っていたが、いつまで経っても思い出せないようだった。

「『清き心と、麗しい姿を持つシオンの姫よ、静かなる星空に届かぬばかりの、暗闇にさす希望のごとき聖曲を奏でよ』…だろ」

横からそう口を挟んだのは、意外にもジークだった。

「あ、そうそう、確かそんな感じだった！」

カレハもピンと来たように言った。

「ジークさん…それって？」

スウが尋ねた。

「そのオカリナに纏わる詩だよ。そして同時に、そのオカリナに秘められた魔法を説明するためのヒントでもある。そのオカリナの前を持ち主が、そう言った」

ジークは少し芝居がかった厳粛な声でそう言った。

スウは、その詩にどうという意味があるのか、後で考えてみたが、何も思い付かなかった。

もし、このオカリナに魔を祓う力が、本当にあるのなら、もしそれを使えば、この悪魔達にも対抗できるのではないか。

しかし、そのためにどうすれば良いのか、スウには解らなかった。

それに、もしここでオカリナなど吹いたら、自分は間違いなく目の前の悪魔・メトネスに殺されてしまうだろう。

でも、このまま何もしないで、ジークやカレハが死ぬことになるくらいなら、たとえ針の穴ほどの希望でも、せめて何かしたほうがマシだ。

スウはポーチ越しにオカリナを握る手に力を込めて、必死になつて願った。

(どうか、できることなら、あたしに、みんなを救う力を……！)

「ちくしょう、一体どうなってやがんだ、こいつら！」

ジークはそう唸った。

相手はただの村人だ。ただの飢えた追い剥ぎだ。なのに、なぜだ。なぜ倒れない。

なぜ、いくら攻撃しても、まるで痛みもダメージも無いかのよう
に立ち上がってくる。

それは、横で戦っているカレハも同じだった。

「やっぱり、あんたが何かしてるのか!？」

カレハは虚空に向かって叫んだ。

さつきまでそこにいたはずの悪魔、グルナは居なくなっていた。

ジークとカレハが不死身の追い剥ぎ達に気をとられている間に、忽然と消え失せてしまったのだ。

「ぐっ……この状況、どうにかしないと……」

目の前の追い剥ぎの一人を押し倒しつつ、ジークが言った。

悪魔が関わっていると分かった今、少しでも早くスウを見つけないければ、何をされるか分かったものではない。しかし、この村人達はどれだけ攻撃しても全くダメージを受けないのだ。

ジークとカレハはまさに、敵の策略に乗ってしまったのだ。

そして、ジークのその焦りが、わずかな隙を作ってしまった。その隙について、追い剥ぎが後ろから体当たりをしてきた。

ジークはその追い剥ぎを切り付けた。追い剥ぎはジークの右の刀

をまともに受けて、吹っ飛んだ。しかし、しばらくするとやはり、再び起き上がってくる。

終わり無き戦いが続くうちに、ジークは大分息を荒げていた。横を見ると、カレハも似たような状態だった。

このままじゃ、全滅する。

ジークは、そう感じ始めていた。

その時だった。どこからともなく、戦場にオカリナの音が響き渡ったのは。

「これは…アタシがスウにあげたオカリナの音だ…」

カレハが唾然としてその音に、曲に聴き入った。

その曲は、カレハが教えたものではなかった。静かな短調で奏でられる、落ち着いた、どこか淋しげな曲だ。その音が、ジークとカレハの心に響いた時、不思議な事が起こった。

二人の周りを取り囲んでいたあの追い剥ぎ達が、一瞬で影となり、その形を失い、そして消えたのだ。

そこまで来て、ジークとカレハは初めてその追い剥ぎ達が単なる幻覚だったことに気がついた。

そして、追い剥ぎ達だけではない。気づけば周りにあつたはずの村さえも、闇となって消え去っていたのだ。そして、二人の前には、さっきのあの長身の悪魔、自分の幻術を無力化させられ、うろたえているグルナだけが残った。

「く…これは、どういう事だ…!？」

グルナは狼狽した声で言った。

「私の術が、掻き消されただど!？」

しかし、ジークはその悪魔に構っている暇などなかった。

「スウのオカリナが鳴ったってことは、鳴った方向にスウが…」

そう言っただけでジークは音のした方を振り返った。もうオカリナの音は止まってしまったが、その方向は間違いなく分かった。そしてその方向へ走り出そうとしたジークはしかし、思い止まったように立

ち止まって向き合っているカレハとグルナを見遣った。

「ジーク、気にすんな！こっちは任せとけて」

そんなジークの気遣いを見て、カレハが言った。

「…分かった」

ジークはそう言い残してその場を走り去った。それを見たグルナはジークを追い掛けようとしたが、それをカレハの曲刀が制した。

「そうそう思い通りには行かせないぜ、悪魔ヤロウ！」

ジークはカレハのその声を背中に受けつつ、走りつづけた。

音のした方角にジークがしばらく走っていると、村の幻影のあった荒地の端にあった林にたどり着いた。

その中であつた獣道にそって行くと、その先には小さな洞窟があつた。周りにはそれ以外にそれらしい場所はなかつた。ジークは急いでその中に入った。

スウは足をバタつかせて必死にもがいていた。メトネスに首を掴まれていたのだ。ジークとカレハを救うためにスウが決死の覚悟で吹いたオカリナは、今は地面のどこかに転がっている。

「よくもやってくれたね、この疫病神が」

スウを宙づりにしたまま、メトネスは罵った。計画を破綻させられたことに怒り狂っているのだ。

メトネスはもともと直接戦うタイプの悪魔ではないのだろう、特別強い筋力を持っている訳ではないようだ。それがスウにとって唯一の幸運だった。それでも、このままでは自分は息が出来なくてすぐに死んでしまうだろうということは分かった。

こんな時なのに、ふとスウは思った。少し前までの自分なら、死ぬことを怖がったりしなかつただろう、と。なにせ、自分の命にすら興味が無かつたのだから。

しかし、今はなぜか違つた。もう殺される事が分かっているとしても、心のどこかがそれを否定しようともがいていた。

なぜだろう。なぜ、そんな思いが沸き上がってくるのだろう。

その時だった。一瞬白い閃光が走ったかと思うと、突然、首を掴むメトネスの力が弱まり、そして手が離れた。スウは糸の切れた操り人形のようにその場にくずおれた。

目の前に、なぜか苦悶の表情を浮かべたメトネスの二つの目があった。真つ暗なこの場所では、それ以上は何も見えなかった。

「スウ・ロ・ヤマ！オイラはアンタを憎む！いつかまたアンタを殺しにきてやるしき、せいぜい覚悟するんだね！」

そう叫び残して、メトネスの赤い目が消えた。そして、それまでスウを締め付けていた言い知れぬ精神的な重圧も、それと同時に消え失せた。

「なんとか、間に合った、みたいだな…大丈夫か、スウ」

走り続けて息切れした、ジークの声が、聞こえた。

死なずに済んだ。スウはそう実感するのに少し時間がかかった。

しかし、真つ暗な中でジークの手が、スウの手を握った時、そして腕の力でスウを立ち上がらせてくれた時、そして外に出て眩しい光の中でジークの横顔を見た時。

スウは、自分が今までなかったほど死ぬことを怖がった理由が、分かった気がした。

「ジークさん…怖かったよお…」

そう言ってスウは堰を切ったように泣き出した。

「お、おい、泣くなって…」

ジークはやはりどうしていいか解らずに途方にくれていた。

「ぐ…メトネスは逃げたようだな」

グルナはジークが走って行った方を見て、不意にそういった。

どんな方法かは知らないが、どうやら悪魔は離れていても互いの気配を読むことが出来るようだ。

「よそ見すんなっ！」

カレハはそう言ってグルナに切り付けた。しかしグルナの体は、黒い煙のようになっていて、カレハの刀は空を斬った。カレハは諦

めずに何度も刀を振るったが、結果は同じだった。

「いいだろう…どちらにしろ作戦は失敗したのだし、もはやここに居残って戦う意味はないか」

グルナはそう言い残して、よく悪魔がやるように、真っ黒な霧となつて霧散した。

「最後に一つ言っておくが、この程度で我々悪魔を負かしたと思つなよ！」

グルナの声が、誰もいない虚空に響き渡った。

「カレハ、無事か!？」

そこに、ジークとスウが駆け寄ってきた。スウの頬は濡れていた。「ああ。スウも、とりあえず無事そうではよかったな」

カレハは、まだメトネスから受けたダメージが抜け切れずジークに手を引かれてよろよろと歩いてくるスウを見て言った。その手にはあのオカリナが握られている。

「そういや、スウ、さっきどうしてオカリナの力が使えたんだ?」
突然思い出してジークが聞いた。

「分かんない…必死になつてたら、突然頭の中に、あの曲が思い浮かんで…それで、吹いてみたの。それだけ…」

スウは、どこか落ち着かない様子で言った。

「それは、もしかしてスウの正体と関係が…」

カレハは反射的に口走る。

「言うな、カレハ」

それをジークが静かな声で止めた。カレハも自分が言った事に気づき、ハッと口を押さえた。

「…やっぱり、あたしって普通じゃないのかな」

そう言うスウの目は、はや潤み始めていた。

カレハは自分の言ったことを心から後悔した。普通の人間にはない紫の瞳と尖った耳を持つが故にこれまで、差別の下で生きてきたスウにとって、普通ではない、ということがどういう意味を持つのか、少し考えれば分かったはずだ。

「そんなこと無い」

しかしジークは確信に満ちた声で言った。

「…え？」

スウは驚いて聞き返す。

「大丈夫だ。お前は何もおかしくなんかない」

ジークは繰り返すように言った。

「ジーク…」

カレハが呟くように言った。

「とにかく、そういうことは後にしようぜ」

ジークが言った。

「オレは腹が減った」

二章「The Phantom Town」完

第三章 「禍つ尾」

幻の町〜中央街ノーレラス間の街道

「それにしても、あの悪魔達の目的は何なんだろうな？」

グルナという悪魔が作り出した幻の町を出て、昼食も済ませた後、ジークは歩きながら隣を歩くカレハに向かって言った。

「初めのパテルでの事件は無差別だったみたいだが、昨日の幻の町での襲撃は、明らかにオレ達三人を狙ってた」

「…まあ、アタシ達『リイト』はこうして悪魔の動きを探ってるんだから、あいつらにとってはいろいろと邪魔なんだろうな」

カレハは一考して、答えた。

カレハの言う通りだった。しばらく前、スピルナ公国に悪魔が入り込んだことをいち早く知ったリイトのリーダーは、その動きを監視するという命令をリイト全員に発していた。

「そういえば、オレが初めにパテルに向かったのは、テグレスに言われたからだったな。あれはメトネスがパテルに攻め入るのを知ってたからなのか。あのババア本当に何でも知ってるんだな」

ジークは思い出したように言った。

「まあ、あんなんでも『預言者』だからな」

カレハは笑って言った。

「あんなんって何だよ。仮にもリイトのリーダーだぜ」

ジークは呆れたように言った。

そう、テグレスとは、リイト達をまとめるリーダー的存在の老婆だ。スピルナ公国の東に位置するゾド山脈の中の緑龍峠に住んでいて、世の理を見通す『預言者』でもある。

「自分もババア呼ばわりしてるくせに何言ってるんだよ」

カレハはそう言ってまた笑った。しかし、ふと思いついたように言った。

「そういえばジーク、お前はレイアークに着いた後どうするんだ？」
「ああ、そう言えばまだ決めてなかったな」

ジークはそう言っただけで数歩後ろを歩いてきたスウに振り向いて尋ねた。

「なあ、スウ、どこか行きたい所あるか？」

「ジークさんの居るところ！」

スウは即答した。

「いや、そういう意味じゃなくて…」

ジークは呆れた声で言った。

「ま、しょうがない、そのことはレイアークに着いてから決めることにしようぜ」

「お前、そんなことでリイト（旅人）として大丈夫なのか？」

今度はカレハが呆れたように言った。

「何言っただよ。リイトだからこそ、自由気ままに旅してるんじゃないか？」

ジークはさも当たり前のように言う。変に筋が通っているだけに反論しづらい。

「ところで、そういうカレハはどうするんだよ」

と逆にジークが聞く。

「アタシは東に向かうぜ。テグレスに幻の町の事も報告しなきゃなんねえみてえだし、ちょっと東の方に野暮用もできたしな」

カレハが答える。

「それじゃ、もうカレハさんに会えなくなるんですか？」

そこでスウが少し寂しそうに口を挟んだ。

「大丈夫大丈夫、互いがリイトである以上、またそのうちどこかで会えるからよ！」

カレハは明るい声でそう励ました。

「それに、別れることになるレイアークまではまだ時間があるんだから、先のことと悩むのはやめようぜ、な」

カレハはそう言っただけでスウの頭を撫でた。それでもスウが浮かない

顔をしているのを見て、カレハはスウに近寄ってジークに聞こえないように耳打ちした。

「それに、アタシがいなくなったらまたジークと二人っきりになれるんだぜ」

それを聞いたスウは一気に尖り耳の先まで赤面した。

「今何言ったんだ、カレハ？」

ジークが気になって尋ねたが、カレハはニヤニヤして言った。

「ジークみたいなデクの坊にはわかんない話だよ」

「…悪かったな、デクの坊で」

「否定しないのかよ…」

カレハはジークの意外な反応に内心驚いていた。ジークのあの性格からして、いつものように反論するかと思っただが。今までスウの事ばかり気にかけていたが、もしかしたら、この二人の出会いがきっかけで変わり始めているのはスウだけではないのかもしれない。

「どうしたんだ？」

ジークにそう聞かれて、カレハは自分がすっかり考え込んでいた事に気づかされた。

「あ、いや、何でもねえよ」

カレハがそう答えると、ジークは素直にそうか、と呟いた。ホント、ジークが鈍感で良かった。とカレハは思う。

「そう言えば、スウ」

思い付いたようにジークが話を変えた。

「なあに？」

「幻の町でお前が吹いたあの曲、今でも吹けるのか？」

「え…と、どうかな…」

スウは困ったように言い淀んだ。

「あの時は必死だったから、あんまり覚えてなくて…たぶん、今はムリ…」

スウはだんだんと申し訳なさそうな口調になっていた。スウの才

カリナの持つ魔を抜く力は、今後悪魔と戦うことになった時、役立つかもしれない。だからスウは、次は同じようには吹けないかもしれないという事を負い目を感じ始めているのだ。

「そうか。いや、いいんだ。ちょっと気になったただだからよ」
フォローするようにそう言いつつ、ジークは頭では別のことを考えていた。

それは、自分の非力さについてだった。

自分は弱い。その思いが、ジークの心を占めていた。もしスウの助けがなかったら、自分も仲間も、死んでいただろう。そしてメトネスを切ることが出来たのも、メトネスがスウの首を絞め付けるためにともとも煙状だった体を実体化させていたからだった。それも、間接的にだがスウがいたお陰だった。

力がほしい。ジークは心のそこでそう感じ始めていた。悪魔にも直接ダメージを与えることの出来るような力が。

ジークは他の二人に見えないようにしながら、両手の拳をきつくにぎりしめた。

その日の夕方、一行は夜営地を見つけ、スウは習慣になり始めているオカリナの練習をした。基本を覚えたとはいえ、まだまだ技術は未熟で、失敗する度に自分なりに試行錯誤して対応していた。

カレハがオカリナの元の持ち主から聞いて覚えていた曲は数えるほどしかなく、その内誰かに新しい曲を教わる必要があるそうだった。

そしてスウの懸念通り、幻の町で吹いた曲は覚えていなかった。

「だから気にすんなって、な」

草の上に座ったまま、しょんぼりした表情のスウに、ジークは隣に座って励ますように言った。

「でも…」

スウはやはり諦めきれない様子だった。

「…だって、もし次悪魔に襲われたら、どうするの?」

「それは…」

ジークは痛いところを突かれて言い淀んだ。それこそまさに、ジークが最も懸念している事だった。

「あたしだって、ジークさんの役に立ちたいから…あたしにできることなら…」

スウは自信なさげに、ゆっくりとした口調で言った。

「…分かった。でも、だからと言って無理はするなよな」

ジークはそう言いつつ、スウを安心させることが出来ない自分を憎んでいた。

「うん…」

スウは目を伏せてそう頷いた。その後、互いに何も切り出せない時間が長く続いた。

しかし、しばらくして思い立ったようにジークに振り向いた。そして静かな声で言った。

「話は変わるけど…ジークさん、あたしの正体っていったい何なんだと思う？」

「！…スウ、その事は…」

ジークは驚いて言った。まさかスウが自分からその話を切り出すとは思わなかったのだ。スウにとって『そのこと』は、考えたくもないコンプレックス以外の何物でもないだろうに。

「さっきは取り乱しちゃったけど…やっぱりあたしも、自分のことが自分で分からないのは、怖いから…。ね、ジークさん、あたしっていったいなんだと思う？」

スウはどこか縋るように、草の上に置かれていたジークの手の上に自分の手を重ねて、そう尋ねた。

「それは、オレにも分からない。オレも親がいなくて自分の出生が分からないから、お前のそういう気持ちもそれなりに分かっていると思う。でも…」

ジークはスウのいる方向ではなく前を向いて、スウに向かってだけではなく、自分自身にも言い聞かせるように言った。

「一つだけ言っとく。オレはお前の正体が何だろうと気にしない。どんな出生だろうと、どんな力を持っていようと、結局お前はお前スウ・ロ・ヤマ・イシユラーグ以外の何者でもないからな」

スウはその言葉のひとつひとつに聴き入っていた。そしてジークが話終わると、ため息をついて言った。

「やつぱり、ジークさんはすごいなあ……あたしはジークさんみたいに強くないから、すぐこんなに弱気になっちゃうのかな」

「そんなことないだろ」

すかさずジークが声を多少大きくして言った。

「お前は今日、自分の危険も顧みずにオレ達を助けてくれたじゃないか。お前がいなきゃオレ達は死んでた。スウはオレなんかよりもずっと強いよ」

「ジークさん……」

スウは半ば放心したような声で呟いた。ジーク越しに遙か遠くに見える夕日が眩しくて、スウは目を細めた。

「だから、お前はもっと自分に自信を持てばいい。持っていていいんだな？」

ジークはスウを振り返って言った。ジークとスウの目が合った。

「……うん、ありがと」

しばらくしてスウは言った。しかし、それから突然思い出したように言う。

「そうだ、オカリナの練習まだ途中だった！」

ジークの手に重ねていた手を離して、スウはオカリナの吹き口を口に含み、ゆつくりと息を吹き込んだ。出てきた音は、ゆつたりとした落ち着いた音だった。さっきの練習の時にはなかった奥深さがあった。まだ初心者らしいたどたどしさは残っているものの、その音色にはどこか惹かれる所があった。

人々が現実を生きる内に忘れかけていた『幻想』そのものが籠った音色だと、ジークは感じた。どこか遠くにある世界、摩訶不思議で軟らかな光の差し込む、緑に満ちた世界。スウのオカリナの音色

は、そんな温もりに溢れた世界を想像させた。
そうしてオカリナを吹くスウの姿を、ジークは隣で不思議な感覚に包まれたまま眺め続けていた。

幻の町のあつた荒野

「まさか、また計画を邪魔されるとは…」

グルナは歯噛みして言った。真つ暗な夜、そこにはパテルの脇の林の時と同じ、四人の悪魔達が集っていた。

「まったく、あいつらホントに気に食わないしさ！」

メトネスもグルナと同じような悔しさ剥き出しの声で言った。メトネスは右手でジークから一撃を受けた部分を庇っていた。明らかに深く切り込まれたようだが、血は出ていなかった。悪魔の体には血が流れていないのだ。

「ハッ、あんなやつら相手に傷まで負うとは、悪魔の名折れだなあ、メトネス」

二人の様子を見ていた別の悪魔が言った。その悪魔は、メトネスやグルナよりも人間に近い姿をしていたが、やはり体は真つ黒だった。そして、長い毛と、特徴的な長い尻尾が生えている。

「うるさいしさ、ベリウス！それにしても、スウ・ロ・ヤマめ、あんな力まで隠し持つてるなんてね…」

「あんな力、とはどういう事だあ？」

メトネスのその言葉に、ベリウスと呼ばれた悪魔は目を細めて聞き返した。

「…やつの笛の音で、私の作った幻が掻き消されたのだ」

グルナは静かな声で言った。

「ハッ、そいつぁ興味深い。いつてえ、どういうことだ？」

ベリウスはさも面白そうに言った。

「やつが『特別な存在』だって事は知ってるが、まさか悪魔の持つ

闇の力を打ち消せるとは、思っても見なかったなあ」

「まあ、やつに限って言えば、あんな能力を生まれ持ってておかしくないがな。なにせやつは……」

「そんな事よりとにかく、今はあいつらを追いかけた方が良さ！この調子じゃ逃げ切られるぜ」

グルナの声に被せるようにメトネスが言った。そのせいで、グルナが言おうとしていた言葉は聞こえなかった。

「…それもそうだな」

グルナが半ば感心したように言った。

「メトネス、お前そんなマトモなこと言えたんだなあ。ずいぶんと成長したもんだぜ」

「お前はいつも気に障る言い方をするね、ベリウス！」

リイト達に二度も計画を邪魔されたメトネスは、悪魔達の中で最も気が立っていたようで、声を荒げて食ってかかった。

「まったくこの二人は…とにかく、早く行くぞ」

グルナは嘆息して言った。

「それで次は、どこ行くんだあ？」

「やつらの行き先はレイアークだ。それを追う」

「ハッ、そうかよ。けど、今度の襲撃はオレ一人に任せてもらうぜえ。お前らじゃあ頼りないんでなあ」

ベリウスは意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

「…勝手にしろ」

グルナは屈辱を噛み締めつつ言った。しかし確かに、今までの戦績からして、次はメトネスやグルナと違い敵に物理的に攻撃できるベリウスに行かせるのが妥当だ。

「じゃ、さっさと行くしさ」

メトネスのその言葉を合図に、メトネス・グルナ・ベリウス、そしてついに一言も喋らなかつた四人目の悪魔は、例によって例のごとく闇の霧となって消えうせた。

ノーレラス地方中央街レイアーク

翌朝、旅を続けていたジーク達の前に、中央街レイアークが姿を表した。外から見た感じは、パテルとほぼ同じだった。灰色の城壁に円形に取り囲まれ、その上から建物が建ち並ぶのが見える。

パテルと違うところといえば、街が湖の中に孤島のように建っているところだ。

藍色の鏡のような湖面に映る、いくつもの塔がそびえる街の姿は、どこか神秘的な風格を漂わせていた。そしてその街の中央には、大きな灰色の荘厳な城が建っていた。城からは、いくつもの高さの違う塔が立ち並んでいた。もしその中で一番高い塔にのぼってそこからこの湖を眺めたら、きつとすばらしい風景が見えることだろう。

そしてその街からジーク達のいる湖畔までまっすぐに石作りの幅の広い橋が架かっている。

「この街は昔はルネアっていう一族がこの地方を治めてた時の城だったんだぜ」

とカレハがスウに説明した。

「二年前、スピルナ動乱が終わってスピルナが平等主義国になった時、当然ルネア一族の支配権も失われた訳なんだけど、ルネア一族はこの地方の人々に慕われてたから、それ以来も町長として、この中央街レイアークの主導権は実質的にルネア一族が握ることになった。まあ、それだけルネア一族の今の女当主・シーゼル・セン・ルネアが魅力的だったってことだけだな」

「そのシーゼルさんって、どんな人なんですか？」

とスウが無邪気に尋ねる。

「さあね、アタシも直接会ったことがある訳じゃないから、詳しいことは知らないけど…ま、これだけ人気があるんならそれだけ綺麗ってことじゃん？」

カレハは適当に答える。

「綺麗……」

その言葉はスウの心の中に不思議と響いた。その言葉は、自分とはまったく縁のない言葉だ。二年前から難民同然の生活をしてきたスウは、自分の見た目に完全に無関心になっていた。

実際今も、ファツシヨナブルとはお世辞にも言えない、着古した茶色の質素な長袖シャツとスカートを着て、地味なサンダルを履き、顔に泥がついていても気にしないし、最後に髪に櫛をいれたのも、いつの事やら覚えてさえいない。

今まではそれでも気にならなかった。誰かに綺麗に見られたいと思われた事などないし、周りの人間の中にもまた自分の見た目を気にする人間はいなかった。

しかし今、人間らしい生活を多少なりとも取り戻しはじめたスウは、自分への関心もまた曖昧にだがり戻し始めていた。

そこへ来て『綺麗』という言葉聞いた時、スウの中の何かが動いた。

スウは、特別美人になりたいとは思ったことはないし、自分の見た目で周りの人を惹きつけたいとも思わない。

しかし、今のスウには一人だけ、少しでも気を引きたい相手がいる。それが誰だかは、言うまでもない。

スウは自分の艶の無い髪の毛を見て、自分の今のだらしない服を見て、不意に恥ずかしくなった。

「おい、スウ、カレハ、早く行くぞ！」

その時、少し先に進んでいたジークが声をかけた。

「つたく、せつかちなやつだな」

と言いつつカレハもジークに続く。そこでスウも考え事を中断し、急いでその後を追った。

しっかりした石作りの大きな橋の手摺りには、植物をイメージしたらしい複雑な形の彫刻が彫ってある。

その手摺りの上から見える湖と、その先のほとりにある林は、こ

れまた中々いい風景だった。

橋にはジーク達以外にも数えるほどの馬車や通行人が行き来していた。その誰もがなぜか、心なしかウキウキしているようにスウには見えた。

そんなことを不思議に思いながら、スウはジークの後ろについて、高さ五メートルはあるつかという巨大な街の城門をくぐった。

すると、まず目に入ったのは街のどこか異様な賑わいだった。大通りの脇に建ち並ぶ商店街はともかく、普通の住宅までもが、色とりどりの装飾を施されていた。

といつてもどうやらまだ準備途中と言った様子で、そここに脚立に乗って作業をする男達や、飾りの入った箱を運ぶ子供達の姿があった。その表情は、橋の上で行き交った人々と同じくことなく生き生きしていた。

「クレオスナ祭か…もうそんな時期になったのか」

スウの隣でジークが呟くように言った。

「『くれおすなさい』…？ジークさん、それっておいしいの？」

とスウがジークに尋ねる。

「いや…どう聞き取ったら食べ物に聞こえるんだよ」

ジークが呆れたようにつつこむ。

「だから、要するにお祭りだよ、お祭り」

そこでカレハがフオーする。

「それで…『おまつり』っておいしいんですか？」

「……」

さすがのジークとカレハもこれには閉口する。しかし当のスウはというと二人がそんな反応をする理由が分からず、ただ不思議そうに首を傾げるだけだった。

「どうしたんですか、カレハさん？」

悪気なくそう尋ねる無邪気なスウに、カレハは深く嘆息した。

結局、二人はスウに『お祭り』を説明するのに数分を費やすこと

になった。そうしてなんとかスウが納得したようなので、カレハは
やっとクレオスナ祭の説明に入ることができた。

「クレオスナ祭ってのは、スピルナに昔からある伝統的なお祭り
で、年に一回、ちょうど今から二週間後の五月十日から一週間行われ
るんだ。もともとは、スピルナ帝国初代皇帝クレオスナがスピルナ帝
国を建国したことを祝う祭典だったんだ。でも、時代を経るにつれ
てだんだん、いわゆるお祭りの要素が強くなって行った。」

クレオスナ祭では、国民は自分たちの一族の民族衣装を着て、そ
れぞれの伝統に則ってこの日を祝うんだ。もともと多民族国家で民
族間の軋轢が絶えなかったスピルナでは、民族同士の理解と親交を
深めるために、こういう祭典が必要なんだよ。」

カレハはできるかぎり解りやすくかいつまんで説明したつもりだ
った。が、危惧していた通りスウはチンプンカンプンのようだった。
「なるほど…えっと、それで『くれおすなさい』って細長いんです
か？」

スウが尋ねる。

「なんでそうなるの!？」

とつつこむカレハ。

「え…それじゃ、丸いんですか？」

スウは驚いたように言う。

「お祭りだから!形なんてないから!」

さすがに気疲れして声を荒げるカレハ。

「それじゃ、『おまつり』って食べられないんですか!？」

スウは落胆した声で言う。

「どうしてお前は何でもすぐ食べ物に結び付けるんだよ」

そこに今まで横から二人の会話を聞いていただけだったジークが
割り込む。

「だって、お腹すいたから、つい…」

そこにきて不意にしょんぼりするスウ。

「それはいいけど、少しは常識力も持つとけよ。今まで大変な生活

してきたのは分かるけど、いくらなんでも教養なさすぎだぜ」

とジークに言われてスウは情けなさにさらにしょぼくれてしまう。その様子を見ていてジークは不意にあることに気がついた。スウは、少なくともジークと会ってからは、一度も怒ったり言い返したりしたことがないのだ。

始めの頃ジークは、おいてきぼりにされるのを恐れていたからだと思っていたが、ジークの直感がなぜだか、理由はそれだけではないと言っていた。

「おい、ジーク、ちょっと言いすぎじゃねえか？」

そこでカレハがフォローするように言った。見るとスウは落ち込むあまり涙目になっていた。ジークは一瞬怯んだが、強がって言った。

「何言ってるんだよ。そうやって泣いたら許されるって思ってるから、女は質が悪いんだ。言つとくがオレはそんなには騙されな……」

「……ぐすん」

「……しよーがねーな、今回だけだぞ」

ジークはそう言って照れを隠すようにすたすたと先を歩いて行く。

「ナイスだ、スウ」

ジークが声が聞こえない所まで行った時、カレハはスウの耳元でそう囁いた。

「ふえ……？何がですか？」

しかしもともと悪気のなかったスウにとっては、カレハの言葉は当惑が増すだけだった。

三人が街を歩いていると、来たるクレオスナ祭に備えて装飾を施されつつあるレイークは、道を進むごとに新たな姿を見せた。当然、ノーレラス地方にもともと住んでいる民族だけでなく、他の地方から移住してきた人々や、クレオスナ祭を通じて他民族との交流を深めようとやって来る人々もいるので、街は色とりどりに彩られていた。

あちらを見れば様々な色をゴチャゴチャに混ぜたようなタペストリを掲げていたり、そちらを見れば極彩色の摩訶不思議な絵柄が描かれた旗をなびかせていたり、かと思えば別の場所ではとげとげの茨を家全体に巻き付けるように飾り付けていたり、スウはそのひとつひとつを眺めようとするだけで首が痛くなりそうだった。

クレオスナ祭まではまだ二週間あるという。それでこの状態だ。本番になったらどれほど豪華な物になるのか、スウには到底想像がつかなかった。

「ジークさんは、クレオスナ祭に参加したことあるの？」

スウは何気なくジークに尋ねた。

「いや、オレがこの国に来たのはたった四年前だったからな。この祭は、去年まではスピルナ動乱の影響で休止していたんだ。だからこの国の国民にとっても、この祭はかれこれ十二年ぶりってことになるんじゃないか？」

ジークがそう答えた。

「…それじゃ、その前はどこに住んでいたの？」

スウが不意に気になって尋ねる。しかしなぜか、ジークはその間に答えようとはしなかった。

「後でアタシが教えてやるよ、スウ」

ジークの反応を不思議に思っただけで再び口を開きかけたスウを制すように、カレハがスウの耳元で囁いた。

「とにかく、ジークの前でその話はしないほうがいい」

スウはなぜだろうと聞いたかったが、それを今、口に出すべきで無いことは流石に分かっていたので、何も言わなかった。

「そう言えば、カレハさんはこの街であたしたちと別れることになってましたよね。いつ、ここを発つんですか？」

スウは知恵を働かせて、話題を変えた。

「そうだなあ、残念だけど、今日中には出るようになるかな」

カレハはそう答えて、それから突然言った。

「もしかして、ジークと二人きりになるのが待ち切れないのか？」

「そ、そんな、違いますよお！」

慌ててそう答えながら、スウは顔を真っ赤に染めていた。

「嘘つくの下手だねえ、あんた」

カレハはからかうように言った。

「だから、そうゆう、事じゃなくて……」

スウは慌てて言い訳するようにつつかえつつかえ喋ったが、終いにはどうしていいか分からなくなって困り果てて半泣きしてしまった。

「どーしてここで泣くんだよ。あんた、感情のコントロールも下手なんだなあ」

そう言いながらカレハは、ジークが『スウは訳が分からない』と言っていた理由も、何となく分かる気がした。

これもクレオスナ祭の影響なのか、街の宿屋という宿屋は客で溢れかえっていて、一行はジークとスウの寢床を探すのにかなりの時間を要した。そしてしばらく歩いてやっと空いている部屋を見つけた。

それからジークは、買い物をするためにスウを部屋にのこして出かけて行った。

一人残されたスウは何となく部屋を見回していた。すると、扉の横に据え置かれた鏡台と、その上にあつたベッコウ製の櫛が目にとまった。

スウは鏡台の椅子に座って、おそろおそろ櫛を手にとる。今までスウは自分で髪を梳いたことは一度もなかった。しばし櫛を目の前に掲げて眺める。

茶色い半透明のベッコウのその櫛は、これと言って凝った作りがない、シンプルな物だった。柄は軽く括れていて、柄の先についた十三センチほどの長さの板から、数え切れない数の歯がついている。スウはどこか緊張した面持ちで、その櫛を持った左手を後頭部にそえる。そして、思い切つて櫛を下に滑らせる。

ぐしつ、という髪の毛の悲鳴のような音を立てて、櫛は数センチも進まない内に動きを止める。それきり櫛はスウの髪の毛に刺さったまま動かなくなってしまった。

今まで自分がどれだけ自分の髪を粗末に扱ってきたのかを、スウは思い知って、深くため息をついた。

「あんた、髪の毛の梳き方も知らないの？ まったく……」

その時突然カレハの声がして、スウは飛び上がった。カレハはいつの間にか扉を挟んでスウの反対側の壁にもたれ掛かっていた。

「カレハさん……」

「貸しな、アタシが梳いてやるよ」

カレハはそう言うと、スウの後頭部に刺さっていた櫛を抜き取って、鏡台の手前にあったベッドの端に座る。そして、慣れた手つきでサツサツとスウの長い髪を梳きはじめた。

「スウ、あんたせつかくキレイな髪持ってたんだから、ちゃんと大切にしていなきゃダメだぜ」

カレハは梳きながら言った。

「それに、あんたみたいな年頃の女の子なら、自分の髪くらいは梳けて当然なんだぜ、ホントは」

そう言われてスウは恥ずかしくなって少し顔を赤らめた。スウは言うまでもなく壁側を向いていたが、鏡に写るので、カレハはスウの表情を見ることができた。

「ごめんなさい、あたし、いつもカレハさんに迷惑ばっかかけて……」

「別に謝らなくていいよ。迷惑だとも思ってたねーし」

カレハはそんなスウを励ますように言った。

「そりゃ確かに、手のかかる妹が増えたみたいで、めんどくさいとも思ってるけどさ。でも、そういうのは迷惑つてのとは別だろ？」

「増えて……？ カレハさんには妹さんがいるんですか？」

スウは何気なく聞き返した。

「まあな。ホント、手のかかるやつだよ。かれこれ六年は会ってな

いけどな」

そう言うカレハの顔が一瞬曇ったように、スウには鏡ごしに見える。姉妹なのに六年も会ってないということは、何かただならぬ事情があるのだろうか。

そう察してスウは、そのことについてそれ以上は聞くのを止めて、カレハが自分の髪を梳いてくれる規則的で、心地よい感覚にその身を任せた。

その頃、ジークはレイアークの商店街を歩いていた。食料など必要な物は買い終えたが、何となくまだ宿に帰る気にはならなかった。改めて考えてみると、スウに出会ってから、こうして一人でゆっくりするのは初めてだった。

ジークは別にネクラではないが、やはりこうして一人で目的もなく歩き、リラックスするのもなかなか風情があった。

商店街の先にある大きな噴水が見えはじめた頃、不意に商店街の一角にある装飾品店が目についた。

特別な理由があった訳ではない。特にどうということはない、どこにもあるような店だった。しかし、何かジークをその店に引き付けたのだ。

ドアを開くと、チリンチリンとベルが鳴った。店中の配色は落ち着いた茶色で統一されていて、ジークが装飾品店に抱いていたけばけらしいイメージとはまったく違った。

「いらっしやい、ぼうや」

カウンターから声がした。振り返ってみると、声の主は店主とおぼしき老人だった。

「お探し物は何かね。カノジョへのプレゼントかい？え？」

「べ、別にそんなんじゃないよ」

ジークは慌てて否定する。

「ふふ…若いつてのはいいねえ」

店主はお見通しといった様子で楽しそうに言った。決まりが悪く

なつて、ジークはその言葉を無視して、店内を見回す。

すると、壁に並んだペンダントの一つが、不意に目に留まった。

「これ、見たところエンリアル製だな」

ジークがそれを手に取りながら言った。

「ほう、良く分かるね」

老人は感心したように言う。

「エンリアル製の銀は他のどのよりも純粹で澄んでて、独特の金属光沢があるから、一目見ればすぐ分かる。今までいろいろ旅して来たから、これくらいの事はな」

ジークはそう言いながら、手に持ったペンダントを眺めた。三センチほどの大きさの銀に、信じられないような細かい装飾が施されている。そしてその中央に、大粒のアメジストがはめ込まれていて、透き通った光を放っていた。その紫の輝きは、スウのあの大きな瞳によく似合いそうだと、何となく思った。

「どうやらほうや、ただもんじゃ無いな」

店主はなおも面白そうに言った。

「そんなんじゃないやねえよ。なあ、これいくらだ？」

ジークは手に持ったペンダントを掲げて見せた。

「本当は五千ギルだがね、ほうやなら安くするよ」

「いや、定価で構わねえよ。五千だな」

そう言つてジークは財布を取り出した。そして金貨を一掴み無造作に取り出した。

「これで足りるか？」

「ほうや、アンタやつぱりただもんじゃないじゃろ……」

カウンターに置かれた十数枚の金貨の束を見て店主は言った。五千ギルなど、大人であってももんじょそこいらの一般人がポケットマネーで簡単に出せるものではない。そして店主はふとジークの白い髪に目をとめた。

「ひょつとしてアンタ、『白銀の獅子』じゃあないかね？」

店主はまさかという様子で尋ねた。まさか、こんな子供が……

「…たしかに、昔そう呼ばれてたこともあったな」

ジークは半ばはぐらかすように言った。正直、あの頃の事はあまり思い出したくはなかった。

「なるほどね、こんなぼうやがねえ…」

店主は驚いたように言った。

「ったく、だからどうと言う訳じゃねえだろ。とにかく、これはもらってくぜ」

ジークはそう言ってたった今買ったペンダントを、店主から受け取った箱にしまい、ポケットに押し込んだ。

「おう、カノジョによろしくな、ぼうや！」

ジークが扉を出る際に後ろから店主がからかうように声をかけてきた。ジークは反論する替わりに扉を大きな音を立てて閉めた。

目の前に、商店街の突き当たりにある、街の広場に堂々とそびえる白い石でできた噴水が見えた。湖に浮かぶこの街にはピツタリのモニュメントだ。おそらくは、今の女町長であるシーゼルが作らせた物だろう。

ジークは何となくその噴水を眺め、広場にいくつか据え置かれたベンチの一つに座った。

この街も今じゃこんなに平和になったのか、とジークはしみじみ思った。前にここを訪れた時は、まだスピルナ動乱の真っ只中で、この街に限らずどこもかしこも荒廃しきっていた物だった。

それが今は、アルデバラン・アルトの働きによって平和を取り戻し、これだけ繁栄している。そして今、十二年ぶりに、人々に愛され続けたクレオスナ祭が復活しようとしている。改めて考えてみると、どこか不思議な気分だった。

その時、ふと反対側のベンチに座っている人影が目についた。こんな暖かい明るい陽気なのに、その人は全身を深緑色のマントで包んでいるのだ。その上フードも目深に被っていて横を向いているせいで顔も見えず、高い鼻の頭だけが見えている。それなりの身長はあるようだが、そのシルエットから女性だろうと予測はついた。

のどかな広場の風景にまったくそぐわないその女性が、なぜかどこかで見たことがあるような気がして、ジークはしばらく不思議な思いでその女性を見ていた。

「ジークさん！」

その時、突然後ろからスウの声がして、ジークは飛び上がった。振り返ると、ベンチの後ろにスウが立っていた。

「カレハさん、もう行っちゃったよ。挨拶しなくてよかったの？」
スウが心配そうに言った。

「いいんだよ。リイトの別れに言葉はいらねえからな」

それに対してジークはどうでも良いというように答える。その間もジークの視線はベンチに座った女性に注がれていた。

「あの人が、どうかしたの？」

スウは不満げに少し頬を膨らませて尋ねた。そしてその女性を眺めて、言った。

「なんだか、ふしぎな人…すごく寂しそう…」

なぜスウにそんなことが分かるのか、ジークにはまったく分からなかった。しかし、パテルで魚屋がメトネスに操られていたのを見抜いたことから、やはりスウには何かしらの能力があるのだろう。もしかすると、精霊族の証でもある尖り耳とも関係があるのかも知れない。

その時、ジークの後ろでスウが何かに気づいた様に突然後ろを振り返った。

「どうしたんだ、スウ？」

ジークが眉をひそめて聞いた。

「この『音』…ジークさん、この街の近くに、悪魔が来てる！」

スウは緊張した面持ちで答えた。

「本当か？」

ジークもまた、緊張して聞き返した。

「うん…それに、今までより強いかも…」

それを聞いてジークは考えを廻らせる。パテルでの前例がある。

よりによつて祭の準備で活気づいているこの街を、パテルの二の舞にする訳にはいかない。だとすれば、こつちから出向いて敵の注意を街に払わせないようにしなければならぬ。

「スウ、ついて来い」

ジークはそう言つてスウの手を掴み、最後にベンチの女性に一瞥を投げかけて、商店街に向かつて走り出した。

その時になつてジークの存在に気づいた女性は、なぜかその顔に驚きを浮かべていたが、ジークがそれを見ることはなかった。

そして女性は、唐突にジークの後を追つて走り出した

ジークはスウに悪魔のいる方角を聞いて、その方向に走つて行つた。いくつもの小路を走つて、角を曲がり、気付けば商店街とは別の大通りに出ていた。

その通りは大通りといつてもあまり人気がなく、どこか寂れた場所だった。そしてジークがスウに、次はどつちだと聞こうとした時、足元の影が変な形になるのを見た。

しかし、変になつたのはジークの影ではなかった。ジークはすぐに、スウを連れてその場所を離れる。

次の瞬間、上空から落下してきた影の主が、大きな音と砂ぼこりを立てて着地した。

「今の攻撃を避けるため、素早いじゃねえか」

影の主は言つた。メトネスやグルナと同じく真つ黒な人間の姿だが、より形がはつきりしていて、見たところ今までの悪魔のような煙状の体ではなく、ちゃんとした実体があるようだった。

「てめえが今回の悪魔か。どうやら、今までとは格が違いそうだな」
ジークはそう言つてその悪魔をにらんだ。そして背中に背負つた包みを一気に取り払い、二振りの得物の大刀を引き抜いた。

「ハッ！そうやって余裕ぶっこいていられるのも、今のうちだぜえ！」

獣じみた声を上げ、悪魔はジークに飛び掛かつてきた。

「スウ、オレの後ろから離れるな！」

敵の力が未知数である以上、むやみにスウを逃げさせるのは逆に危険だ。幻の町の時のように拉致されてしまいかもしれない。

悪魔の突き出した腕が眼前に迫って、ジークは咄嗟に刀でそれを受け止める。しかし悪魔の攻撃は、思っていたほどの威力はなかった。それで気を抜きかけたジークを嘲るように、悪魔は笑った。

次の瞬間、ジークの刀ごしに何かの強いエネルギーがぶつかった。そのあまりの威力に、ジークは二本目の刀を地面に刺してブレーキをかけることによつて、何とか吹っ飛ばされずに済んだ。

「一体、何を……」

そう言いながら、ジークは刀を悪魔に向かって切り付けた。悪魔はそれを軽々とかわし、跳躍でジークと距離を取った。その身体能力は、メトネスやグルナにはなかった物だった。

「ハツ、お前、オレが何したかわかんねえ、て顔してやがんなあ」

悪魔はさも面白そうに言った。どうやら好戦的な性格のようだ。「いいぜ、冥土の土産に教えてやらあ。悪魔にはよお、それぞれに対応した『体のパーツ』がある。それはその悪魔の象徴にして、その能力そのものでもある。例えばよお、メトネスの司る体構造は『耳』で、やつは音を使い、耳を通して相手を洗脳し、操る。グルナが司るのは『目』で、幻覚を見せて敵をたぶらかす悪魔、て訳だあ。そしてこのオレ、ベリウスが司るのはあ……」

そこで悪魔・ベリウスは言葉を切り、再び跳躍で縦に回転しながらジークに飛び掛かってきた。そして叫んだ。

「『尻尾』だあ……！」

そして、宙返りで回転の力と遠心力が加わり、さつきとは比べ物にならない破壊力のこもったベリウスの尻尾が、ジークを襲った。

ジークは焦らずそれを横に避けた。ベリウスの尻尾はその破壊力を保ったまま地面に打ち付けられ、轟音とともに地面に大きな亀裂を作った。もしこれをまともに受けていたら、まず命はなかっただろう。

やはり、そうか。とジークは思った。ベリウスを初めに見た時からジークの中に構築されていた仮説が、ベリウスの言動とその攻撃力によって裏打ちされた。

メトネスの司る体構造は『耳』、グルナは『目』、そのどちらもが感覚器官だ。今までの二人が攻撃力に欠いていたのは、そのせいだったのだ。

しかしベリウスは『尻尾』で、感覚器官ではなく直接攻撃できるパーツだ。つまり、ベリウスはメトネス達のような人をたぶらかすような能力はない。その分の力が、攻撃に使われるということなのだ。

だとすれば、今度の戦いは、今までとは次元が違う。ジークはそう覚っていた。

三章「The Darkness Tail」完

第四章 「誰かのための強さ」

レグラ地方エスル村

昼間の暖かい陽気の中、突然レインディア亭の扉のベルがカラカラと鳴った。いつも通りグラスを磨いていたシグルスは、その顔を扉に向けた。

入ってきたのは、旅装束の青年だった。その腰には、マント越しに剣のシルエツトが見えた。

青年はゆっくりとした足取りでカウンターに向かい、どこか優雅にも見える動きでシグルスの目の前の椅子に腰掛けた。

「リイトの活動拠点、レインディア亭の亭主、シグルス・キエスト殿ですね」

青年はフードの下からシグルスを観察するように確認した。

「随分と珍しい客だな。一体、何の用だ？」

シグルスは、以前その青年に会ったことがあった。と言っても、今まで直接話したことはないのだが。

「いえ、大したことでは…ちょっと人探しをしておりますね。リイトの居場所はあなたに聞くのが最も効率的ですから」

「誰を探しているんだ？」

シグルスは興味なさ気に聞いた。

「ジーク殿を」

それに対して青年は短く答えた。それは、シグルスが半ば予想していた通りの答えだった。

「何のために？」

シグルスは続けざまに尋ねる。いくら顔見知りとはいえ、理由も聞かずに仲間の情報をおいそれと渡す訳にはいかない。

「交渉するためです」

と曖昧に答える青年。しかしこの青年とジークの関係をわかってい

るシグルスには、青年の言わんとしていることがすぐに分かった。

「あいつの事だ。また突っぱねられると思うがな」

「試してみなければ分かりませんよ」

青年はそう言っただけで少し笑った。その笑い方もやはりどこか上品だった。

シグルスはどうでも良さそうな声で「そうかよ」と言うと、ため息をついて、青年の質問に答える。

「今頃は恐らくノーレラス地方のレイアーク辺りにいるだろうな。

でも、お前が今から行ってレイアークに着く頃には、多分もう出発してる。その先は自分で調べな」

「ありがとうございます」

そう礼を言っただけで、青年はさりげなくカウンターに銀貨をいくつか置いて、すぐに席を立ち、レインディア亭を出て行った。ドアのベルが再び鳴り、その後レインディア亭は静寂に包まれた。

「……ったく、なんかまたいろいろと拗れそうだな」

シグルスは手に持った銀貨をチャリチャリ言わせながら、一人こちた。そして銀銀貨をポケットに突っ込むと、またグラスを磨く作業に戻るのだった。

ノーレラス地方中央街レイアーク

ジークは苦戦していた。やはり、今度の悪魔・ベリウスは、今までの悪魔とは格が違った。

その尻尾による攻撃の一撃一撃に圧倒的な破壊力があり、一発でも喰らえば命の保証はないことは間違いない。

スピードにおいてはジークの方が勝っているのは、不幸中の幸いだった。落ち着いてさえいればベリウスの攻撃を避けることはできる。

しかし、言うまでもなく、攻撃を避けるだけでは戦いには勝てな

い。かと言って、攻撃するために下手に距離を詰めると、ベリウスの攻撃を受ける危険が一気に増す。

その時、真っ黒なベリウスの尾が、横からジークの頭に打ち付けられた。ジークはすぐに体を屈めてそれをかわす。

「ハッ、いつまでチヨロチヨロ動き回ってるつもりだあ!？」

ベリウスはもどかしそうに言った。

「うるせえな……」

それに対して、ジークは妙に落ち着いた声で応えた。ベリウスの戦闘力は明らかにジークより格上だ。真っ向からぶつかって勝てる相手ではない。

ならば、この好戦的な性格を利用することは出来ないだろうか。

そうジークは考えていたのだった。そのためにはまずベリウスを挑発して頭に血を上らせる事だ。

そして考え通り、ベリウスはジークのその冷静さが気に食わない様子だった。その証拠に、ベリウスの攻撃は一段と激しくなっていた。

ベリウスの尾がジークの頭の横を掠める。ジークはすかさず右の刀で反撃したが、ベリウスの尾に阻まれて、攻撃が届くことはなかった。ベリウスの尾は堅い鱗で覆われ、先端は鉤になっていた。

続けて鞭のようにしなる尻尾が、ジークを襲った。ジークは確実にかわしつづける事はできたが、反撃することは出来ず、だんだんと追い詰められて行った。

スウは、目の前で危険な目にあって戦っているジークを、道端に立って、半ば呆然として見ていることしか出来なかった。ベリウスの尻尾が振るわれ、ビュンビュンと空を切り裂く鋭い音がするたびに、ジークがその攻撃に切り裂かれて、死んでしまうのではないかと言う恐怖が全身を駆け巡っていた。緊張と恐怖と不安で、スウは下唇を噛んで、胸の前で握った両手に汗を握っていた。

その時、ジーク達が走ってきたちょうどその小路から、マントで

身を包んだ女性が走ってきた。

「あなたは、さつき広場にいた…」

スウはその女性を振り返って呟いた。

「あら、あなた、白銀の獅子と一緒にいた娘ね」

その女性はその時になつてスウの存在に気付いたようだった。戦っているジーク達に向けていた視線を、スウに向けた。それでスウには、初めてその顔が見えた。

「綺麗…」

ジークのことが心配で、スウにはあまり集中して見ることはできなかったが、それでも一目で美人とわかる女性だった。一瞬、スウはその女性に見惚れていた。

「危ない!!!」

突然その女性が叫んで、スウを横に押し倒した。その次の瞬間、さつきまでスウがいた場所に、一筋の黒い閃光が走った。それは、ベリウスの尾だった。いつの間にか、ジークが押されるにつれて戦っていた二人がスウの居る場所に近づいて来ていたのだ。

「…スウ!!!」

自分の後ろにスウが居ると知ったジークは、戦いの場をスウから遠ざけようと、力を振り絞って一気に形勢を盛り返した。

「ほら、あなたもこっちに!!!」

スウもマントの女性に連れられて、その場から離れる。

「なるほどなあ、スウ・ロ・ヤマに危険が迫ったら本気になるって訳かあ!!!」

尻尾がスウを掠めた瞬間から始まった突然のジークの猛攻に、ベリウスは面白そうに言った。

「お前：どうして、スウの名前を…」

ジークは驚いて言った。そう言えば、幻の町でメトネスもスウの名前を呼んでいた。

「ハッ、残念だが、そいつはまだ企業秘密ってやつだぜえ!!!」

ジークの左の刀を避けつつ、ベリウスは言った。

「…そうかよ」

続けざまに右の刀を切り付けながら、ジークは言った。ベリウスはそれを尾で受けた。

「ハッ、それにしても、そんな攻撃じゃオレは倒せないぜえ！」

ベリウスは尾でジークの刀を振り払い、しならせた尾をジークの体に叩き付けた。ジークは焦っていたせいで、ベリウスと一定の距離を保つのを忘れていたのだ。

その圧倒的な力に、ジークは数メートル後ろの家屋の壁にたたき付けられた。石の壁に体がめり込む程のその衝撃と苦痛に息が止まり、ジークは一瞬意識が朦朧とする。

周りの世界がぐらりと揺らぐ。朦朧とした意識の中で、ジークはスウが自分の名を叫ぶのを、どこか遠くの物音のように聞いた。

ジークは、改めて自分の無力さを呪った。オレは、もう二度と目の前で誰かが死ぬのを見たくない。昔、そう誓ったと言うのに

このままでは間違いなく、オレも、スウも、あのマントの女性も死ぬ。そしてベリウスは、自分の破壊衝動のままにこの街を破壊してしまうだろう。

せめて、オレに悪魔に対抗出来るだけの力さえあれば…まるで映像がスローモーションで再生されているかのように感じる中、ジークは何よりもただそれだけを願った。

その時、なぜだか、心の奥で声が出た気がした。

君は、また大切なものを失うのかと。

絶対に諦めてはいけない

ジークの心の中に響くその声は言っていた。

お前は、誰だ

ジークは訳が分からず、その心に響く声に尋ねた。

今は、名乗ることは出来ない。でも僕は、君の『力』を少しだけ、

目覚めさせることができる

オレの、『力』？

ジークはその言葉に戸惑った。一体何のことを言っているのだろうか。オレに、『力』なんてあるのか？

だから、一つだけ約束して。君が護りたいと思う大切な人を、絶対に護り通すこと

その声は、強い口調でそう言った。

なぜ、お前がそんな事を？

僕は、君だから。彼女を失えば、君は絶対に一生後悔する

ジークにはその言葉の意味が分からなかった。だが、今は何より、スウを護らなければ。その声が語った言葉によって突然蘇ったその強い思いが、ジークの迷いを一気に吹き飛ばした。

ああ、約束する

ジークは儼かな声でそう言った。

マントの女性の制止を振り切ってジークに駆け寄ろうとするスウの目の前に、ベリウスが立ちはだかる。

「ハッ、見つけたぜえ、スウ・ロ・ヤマ！」

『見つけた』という言葉の真意はスウには分からなかった。ただ一つ、分かっていたのは、自分が殺されようとしていると言っただけだった。

まるでスローモーションのように、ベリウスの尾が振り上げられる。スウは死を覚悟した。

しかし、その尾が振り下ろされる事はなかった。ベリウスは何かに感づいて、突然その場から跳びのいた。

その次の瞬間、ベリウスが居た場所に白銀の閃光が走った。スウが信じられない思いで見ると、そこに、ジークが立っていた。その両手に握る一対の大刀は、白銀の光に包まれて輝いていた。

「ジークさん…よかった…」

「いいから、どいてる」

感激のあまり涙ぐむスウに向かって、ジークは言った。しかし、スウはそこから動こうとしない。

「しょうがねえな…シーゼル、こいつを安全な所に連れて行ってくれ」

ジークはマントの女性に向かって言った。ジークはその顔を見て、女性の正体に気がついていた。

「せっかく久しぶりに会えたって言うのに、随分と人使いが荒いのね、白銀の獅子！」

その女性・シーゼルは怒ったように言ったが、指示に逆らうことはせず、スウの手を引くと急いでその場を去る。

「ハッ、行かせるかよお！」

ベリウスはシーゼル達の後を追おうとしたが、それはジークに阻まれた。

「お前はこの先へは通さない」

ジークは厳かな声音で言った。

さっき、あの謎の声と話して、約束した瞬間から、やけに心臓の鼓動が大きくなっていった。そして、さっきまで以上にベリウスの攻撃が遅く見えるようになっていた。

「なんだあ？てめえも何か隠し持ってた見てえだな」

ベリウスはあくまで面白げに言う。さっきまでのジークとの違いに気付いているようだ。隠し持ってる、とはおそらく『力』の事だろう。

「だったら何だ」

「嬉しいぜえ。さっきまで退屈してたからなあ！」

そしてベリウスはジークへの攻撃を再開する。しかし、やはりジークにはその動きが遅く見えた。

ジークはベリウスの尾を片方の刀で弾き、反対の刀で切り付ける。ベリウスは紙一重でそれをかわして、さっきジークを叩き付けた家の屋根の上に逃げる。

「逃げる気か？」

「誰が！」

そう言つとベリウスは屋根から飛び上がり、勢いをつけてジークに飛び掛かった。ただの攻撃でもあの威力なのだ。自然落下の勢いと体重が加われば、その破壊力は計り知れない。

しかし、ジークはそれにたじろぐことはせず、落ち着いて刀を構える。

そして、ベリウスの尾とジークの刀が、真つ向からぶつかった。

「あなたが、シーゼルさん…？」

スウは信じられない様子でシーゼルを見た。

「そう。私はこの街の町長、シーゼル・セン・ルネアよ」

シーゼルは多少照れ臭そうに言った。

「それじゃ、どうしてあなたがジークさんの事を？それに、白銀の獅子つて…」

「とにかく今は、ここを離れましょう。話なら後でできるわ」

シーゼルはそう言つてスウを連れていこうとする。しかし、スウはそれに逆らつた。

「でも、ジークさんをひとりで置いて行けません！」

「あの人なら、大丈夫よ。あなたが居る方が今のあの人には邪魔になるわ」

シーゼルの言っていることは正しかった。さっきジークがベリウスの攻撃をまともに受けてしまったのは、スウが戦いに巻き込まれないようにしようと思つたからだった。スウにはシーゼルの言葉に反論する術は無かつた。

「さ、分かつたら早く！」

シーゼルが急かすが、スウはそれでも後ろ髪を引かれる思いだつた。

「ジークさん…」

スウはジークの居るはずの方向に向かつて呟くように呼び掛けたが、それで決心したのかシーゼルについて反対側へと走つて行つた。

ベリウスの尾とジークの刀は互いに弾きあい、どちらも傷つくことは無かった。

「まったく、頑丈な尻尾だな」

「ハッ、てめえの刀こそ、やけにかてえじゃねえか！」

実を言うと、ジークは淡い光に包まれた自分の刀を見つめながら、ベリウスが言ったのと同じことを考えていた。ジーク自身の経験からしても、あんな攻撃を食らってこの刀が持ちこたえるはずは無かった。

これが『力』なのか？ジークは考えた。

まだ全く実体が掴めないが、どうもあの声によって目覚めさせられたジークの『力』が、ジークの身体能力だけでなく刀の能力まで引き上げた、と考えるのが妥当なようだ。

しかし、人間誰でもそうだろうが、突然知らない人間から高級なプレゼントを貰ったりすれば、喜ぶよりも先に戸惑い、贈り主の目的が分からずに、その人物の事を疑うだろう。

今回の場合のジークも全く同じで、『力』を手に入れたことを素直に喜ぶ気にはなれなかった。何か、裏があるのではないかと疑わずにはられないのだ。

だが、今はそんな事を気にかけていられる状態ではないことも、分かっていた。とにかく今は、ベリウスを倒すことだ。

ジークはベリウスとの距離を詰めようと、地面を蹴る。すると予想を遥かに越える力が出て、ベリウスが反応する間もなくジークは敵の懐に潜り込む。ジークは左の刀を袈裟掛けに切り付けた。

「ハッ、いきなりやるようになったじゃねえか！」

その攻撃を間一髪でかわしたベリウスは、まだ少し余裕を残していたが、明らかに自分が劣勢に成りつつあることも理解しているようだった。

ベリウスが反撃しようとして尾を振るが、ジークはバックステップで軽々とそれを回避する。

表には出さずとも、ベリウスが苛立ちを募らせつつあるのは間違
いなかった。そこでジークは、ベリウスの感情を利用するために、
あえてベリウスの攻撃範囲ギリギリの距離を保つことで挑発した。
果たしてベリウスはその挑発に乗ってきた。ジークは自分に向か
って突進して来たベリウスをひらりと避ける。ベリウスは勢い余っ
てジークの後ろにあった家屋の壁に激突する。ベリウスは体ごと壁
にめり込み、少しの間身動きが取れなくなった。それが、ジークの
作戦だった。

「これで終わりだ」

ジークはそう静かに言った。そして、自らの行動によって大きな
隙を作ってしまったベリウスに、二本の刀両方を振りかざした。

その時、突然戦場に妖しい呪文のような言葉が流れた。低音で唱
えられるその言葉を聞いている内に、ジークは不意に強い頭痛を感
じた。

「…まったく、あれだけ人をけなして置いて、良いザマだね、ベリ
ウス」

その言葉とともにジークの目の前に、長い腕を持つ真っ黒な少年
のような姿をした悪魔が現れた。

「お前は…メトネス…たしか、『耳』の悪魔だったか」

ジークはメトネスをねめつけた。

「ケケケ、どうやらベリウスが随分と喋ってくれちゃったみたいだ
ね。まあ、いまさら隠す必要もないけどさ」

メトネスは真っ赤な丸い目でジークを睨み返した。

「とにかく、今回はアンタの勝ちって事にしといてやるしさ。その
代わり、コイツは連れ帰らせて貰うしね。じゃあな！」

そう言ってメトネスはベリウスを抱えて、消えた。ジークは後を
追おうとしたが、音を操り敵をたぶらかすというメトネスの発した
呪文の効果がまだ続いているのか、思うように体が動かなかった。

ジークは『力』を解放されてから過敏になっている感覚で、辺り
の気配を探ってみる。が、この辺りに悪魔の気配はもう無かった。

確かにやつらは逃げた。そう確信し、ジークは緊張を解く。それと同時に、『力』の効果が消えたのか、体から一気にエネルギーが抜ける感覚があった。と同時に、さっきまで『力』によって抑えられていたらしいベリウスからの攻撃で受けたダメージが、一気に蘇ってきた。

恐らくは『力』の反動もあいまったのだらう。その痛みは想像を絶するものだった。なす術もなく、ジークはその場に倒れ、意識を失った。

「シーゼル様！また仕事をほったらかしにして街をほったつき歩いていたのですか!?!」

レイアークの中心にある屋敷、ルネア家の邸宅で、黒い服を着たシーゼルの秘書が怒鳴っていた。

「まあまあクイル、街のことを良く知るのも町長の仕事じゃない。いわゆる視察つてやつよ」

シーゼルは悪びれもせず言う。

「そんな言い訳して、シーゼル様のはただの散歩じゃありませんか!」

秘書クイルは、なおも語気を緩めず言った。

「それにそんなっ…子供まで連れて来て!」

クイルはシーゼルの後ろに半ば隠れるように立っているスウを指差し、つい口に出しかけた『不吉な』という言葉をかみ殺して言った。

「彼女は私の客です。無礼は許さないわよ」

シーゼルも耐え兼ねて声を荒げた。まったく、この秘書と来たら…。と彼女は内心毒づいた。

「あのっ…」

そこでスウが恐る恐る口を挟んだ。

「どうかあたしのために、喧嘩しないでください…」

「あら、ごめんなさい、聞き苦しかったわよね。クイル、彼女を客間に連れていってあげて。丁重にね」

シーゼルはスウに向かっては申し訳なさそうに、クイルに向かっては釘を刺すように言った。

「まったく、秘書を何だと思ってるんだか…」

クイルはぶつぶつ言いつつも、指示には逆らわなかった。スウに手招きして、不機嫌そうに部屋の扉を開いた。スウはこわごわその後が続いて行った。

そうして部屋はシーゼル一人だけになった。シーゼルは安楽椅子に深く座り、嘆息した。

少しして、扉を叩く音がした。シーゼルが入室の許可を告げると、扉を開いて、あらかじめ指示を出していたシーゼルの部下数人が入ってきた。

「シーゼル様、白銀の獅子が道に倒れていたのを保護しました。いかが致しますか？」

「客間に運んで頂戴」

シーゼルは、クイルもこんなに忠実だったらと思いつつ答えた。

彼は有能だが、シーゼルではなく今は亡きシーゼルの父に忠実な男だ。

シーゼルの指示を受けて、部下達は部屋を後にした。そして、シーゼルもまた自室へ向かうべく大儀そうに安楽椅子から立ち上がった。

ジークが目を開くと、目の前にシャンデリアのぶら下がった天井の景色が広がった。体に包帯が巻かれているのが、触感で何となく分かる。

「ここは…どこだ？」

ジークは無意識につぶやく。するとその声に気付いたスウの顔が視界に入ってきた。

「ふぁ、ジークさん！よかったあ！」

言うが早い。スウは思い余ってジークに抱きつく。

「うわ、ちょ、スウ、くつつくなくて…」

ジークは顔を真っ赤にして慌てた声でそう言って、無理やりスウを引きはがす。恥ずかしいのはもちろんだが、今は下手に触れられると傷が痛むことの方が問題だった。

どうやらスウもその事に気づいたようで、はっとしてすぐにその腕を引っ込める。

「ごめんなさい、あたしのために、こんな…」

スウはジークの様子を見て、申し訳なさそうに謝った。

「別に…オレの力が足りなかっただけだ。こっちこそ、あんな危ない目にあわせちゃまって、悪かったな」

ジークはそんなスウを励ますように言った。スウはその言葉に感極まったように目を潤ませた。

「泣くなよ。つたく、相変わらず泣き虫だな。それより、ここは…
シーゼルの屋敷か？」

「あら、もう起きたのね、白銀の獅子」

ジークが尋ねると同時に、部屋の扉を開く音がして、シーゼルが入ってきた。ジークが反射的に上体を起こそうとすると、体の右肩から左脇腹にかけて強い痛みが走った。その痛さに思わず呻きもれる。

「一応手当はさせたけれど、まだ動かない方が良いわ。あなた、自分の体がえぐられてるって自覚してる？しばらくは絶対安静よ」

シーゼルが放った言葉に、ジークは戦慄した。ベリウスの一撃でそれだけのダメージを受けておきながら、『力』によって傷口が抑えられるのを良いことにベリウスと戦っていたのだ。『力』の効果が切れた今、傷口は攻撃を受けた時より遙かにひどくなっているに違いない。

「それと、荷物は宿屋から持ってこさせたわ。今日はここに泊まりなさいな」

シーゼルはそう言って、ジークが寝かされているベッドの脇の小机の上に置かれたジークの荷物を指し示した。

「悪いな、迷惑かけて」

「こんな時くらい、自分の心配しなさいよ。それに、あなたには恩がある。これくらい当然よ」

シーゼルはベッドに歩み寄りながら言った。

「その『恩』って一体何なんですか？」

それを聞いたスウがシーゼルに尋ねた。

「あら、あなた、彼と一緒に居るのにそんな事も知らないの？」

シーゼルは呆れたように聞き返した。

「知らないから聞いてるんです」

スウはそう言いながら、内心淋しさを感じていた。

「なるほどね、言うじゃない」

シーゼルはおもしろそうに言った。

「おい、シーゼル、余計な事言うんじゃないぞ」

そこですかさずジークが釘を刺す。

「なるほどねえ」

一を聞いて十を知ったように、シーゼルはにやっとした。

「あなたって案外シャイなのね、白銀の獅子」

「なっ、どういう意味だよ」

ジークはそう言って我を忘れて起き上がろうとしたが、再び痛みが返って来て、スウによってベッドに押し戻される。

「すぐそっやってムキになって…そういう所はまだまだお子ちゃまね」

シーゼルはなおもおもしろそうに言った。

「でも、傷で動けない今のあなたに、私の話を止めることは出来ないわね」

ジークを見下ろして、悪戯っぽく言うシーゼル。それに対してジークは唸るしか出来ない。

「そーゆー事なら、教えてあげるわ。ちょっと遠回りになるけれど、

我慢してね」

スウに向かって茶化すようにそう言っつて、そして語り出した。

「今からちょうど四年くらい前、知つての通りこの国は長年続いたスピルナ動乱で荒れ果てていた。昔は風光明媚と歌われたこの街も、自衛のために戦うことを余儀なくされていたわ。」

その頃のスピルナは、ゴート家・アルト家・ライアル家・ヒカナ家・シロトナ家の大きな五つの派閥に分かれていた。

そしてここ、レイアークは豊富な水資源がもとでヒカナ家に長い間狙われていたの。

私たちは必死に戦っていたけれど、当時の五大勢力の一角とたった一つの街とでは、戦力の差は歴然としていた。もはや万策尽きたかと思われたそんな時、彼・ジークはどこからともなく現れた。

当時の彼はどの派閥にも属さず、スピルナの国中を旅して、あの血で血を洗う悲惨な戦争から、関係のない人々を護るために戦っていた。

そして彼に助けられた人々は、その銀髪をなびかせる彼の姿を見て、彼を『白銀の獅子』という通り名で呼ぶようになった。各地の神話に残る、『総ての命の守護神』と呼ばれた、白いライオンの姿をした大地の神にあやかっつてね。

そして、彼はまさに一騎当千の強さを持って、ヒカナ家の軍隊からこの街を護つた。彼がいなければ、きっとレイアークはヒカナ家の家来達に蹂躪されて、この街の人々は皆奴隷にされていたわ…だから、この街の人は皆、彼には大恩があるのよ」

シーゼルが語り終えた時、スウはジークのことをより知ることができた嬉しさと、今までジークのことを何も知らなかった寂しさとを同時に感じていた。

「ジークさんがそんなにすごい人だったなんて…話してくれたら良かったのに」

「話す必要はなかった」

ジークはまるで他人事を話すかのように言った。

「でも、教えてほしかった…」

スウは疎外感を感じながら言った。

「何でだよ」

「ふえ…それは…」

そう聞かれてスウは言葉に詰まった。自分でもどうしてなのか具体的には分からなかったのだ。

「気にしないで。この人はいつもこういうのよ」

そこにシーゼルが口を挟む。

「いつも自分の事を隠したがって、何て言うか…常に自分の事は二の次にして、他人のために無茶ばかりしちゃうのよね」

その時、部屋の扉をノックする音がした。シーゼルが行って扉を開くと、屋敷の女中らしき人が顔を出した。

「お客様、お風呂が沸きました。よろしければお入りください」

女中はお辞儀をして言った。

「あら、ちょうど良かった。スウ、入ってきたら？あなた長旅で垢が溜まつてるでしょう？それに、服も汚れてるし…この子に合う服も用意してくれるかしら？」

シーゼルが言うと、女中はまたぺこりとお辞儀した。

「それと、ジークは怪我があるから今は無理ね」

シーゼルは、ベッドに寝ているジークを一瞥して言った。

「それでは、ご案内致します」

女中はそう言うと、スウを連れて部屋を出て行った。スウはシーゼルにお礼を言ってから、その後続いた。

「それにしても本当、あなたって意地悪なのね」

スウがいなくなった部屋で、シーゼルは言った。

「そうかもな」

ジークは寝返りをうって、シーゼルに背を向けながら言った。

「あなた、自覚してないんでしょ」

シーゼルはため息をついて言った。ジークはすぐには答えず黙っ

ていた。

しかし、シーゼルが答えを諦めかけた時、ジークは口を開いた。

「なあ…何が悪かったんだ？」

その答えにシーゼルは思わず吹いてしまった。

「あれほどたくさんの人間を救った英雄も、こういう事になると年相応って訳ね。案外と可愛いところもあるじゃないの」

シーゼルは笑いをこらえつつ言った。

「ったく、うるせえな」

ジークはぶすつとした声で言う。

「ほら、そんな拗ねないで！」

シーゼルはクスクス笑いを漏らしながら言った。しかし、ジークはその言葉に無視を決め込んだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ね」

込み上げてくれる笑いを何とか抑えつつ、シーゼルは謝った。

「それで、『何が悪かったか』ですって？知りたいならシーゼルお姉さんが教えてあげますよ」

しかしジークはまた無視する。

「もう、そんな怒らなくて、冗談に決まってるじゃない！」

シーゼルはそんなジークの様子を見て可笑しそうに言った。しかし、これ以上ジークをからかっても意味がないと思っただのか、話をもとに戻す。

「そうね…あなた、大事なことが解ってないわね。誰だって、好きな相手の事は少しでも良く知りたいって思うものでしょ？」

「好き…？誰が？」

ジークは内心驚いてシーゼルを振り返って尋ねた。

「え？もしかしてあなた、気がついてないなんて言わないわよね？」

シーゼルは驚いたように言った。

「だから、何に？」

なおも訳が分からないようすで、ジークは尋ね返す。

「スウがあなたの事を好いてるっていうことに、よ」

シーゼルが当たり前のように放ったその言葉に、ジークは心臓が跳ね上がる思いがした。

「そ、そ、そうなのか!？」

「まさかとは思ったけど、気付いてなかったのね…」

シーゼルはやれやれという風に言った。

「ていうか、何でお前にそんな事が分かるんだよ」

「彼女を見ていて、気づかない方がおかしいわよ」

そう言われてジークは、信じられないといった様子でシーゼルを見た。まるで、シーゼルが次の瞬間には冗談だと言い出すのではないかと訝っているかのようだった。

「…とにかく、」

シーゼルは呆れて言った。

「好きな人の事を知ってるって、すごく嬉しい事じゃない?それだけ相手のことを理解してるってことになるし、相手から直接教えてもらえたら、それだけ相手に信頼されてるってことになるから」

「そついうもんか?」

「…相変わらず、本当に鈍いのねえ」

そう言ってシーゼルは、扉の方に向かって歩いて行った。

「とにかく、スウはあなたの事がもつと知りたいのよ。しかも、できればあなたの口からね。それじゃ、私は仕事があるし、あなたも休息が必要そうだから、これで失礼させてもらおうわよ」

そう言ってシーゼルは扉を開き、部屋を出て行った。

スウは口の上までお湯につかり、ぶくぶくと息を吐いた。

ルネア家の邸宅の浴場は、スウが予想していたよりも相当豪華な物だった。大理石でできた、プールとしか言えないような大きさの浴槽の側面や、壁や床、銀色に輝く蛇口のひとつひとつにまで細やかな彫刻が施されていて、貧乏生活が体に染み付いているスウにとっては、触ることすら億劫になるほどだった。

備え付けている石鹸もまた高級な物のようで、これもスウは、自分なんかが使ってしまうのを勿体なく感じつつ、それで長年溜まった垢を落としたのだった。

スウはその浴槽につきり、その浴槽の中央にある、口からお湯を吐き出しているライオンの姿の彫像を眺めつつ、先程シーゼルから聞いたことに関して考え込んでいた。

ジークはスピルナ動乱で沢山の人々の命を救った英雄だった。あまり実感は湧かないが、恐らく助けられた人々から見れば、ジークは偉大な人間なのだろう。

それを知ってスウはまず驚き、次にどこか誇らしくなり、しかしその次には淋しく感じた。

その理由は大きく二つと言っていていいだろう。その一つ目は、なぜだかジークが唐突に遠い人間になってしまった気がしたからだ。人々から嫌われてばかりの『不吉』なみずばらしい孤児である自分とジークでは釣り合いが取れる訳がない。その気持ちだが、スウの胸を締め付けたのだ。

そしてもう一つは、ジークが自身の事を自分に話してくれなかったことに対する多少の恨めしさだった。

改めて考えてみると、ジークは今まで自分の事をほとんど話そうとしなかった。ジークが旅をする理由を尋ねた時も、ジークの出身地を聞いた時も、ジークは答えようとしなかった。

一度だけ、自分に家族がいたかどうかさえ知らない、と話してくれた事があったが、本人から聞いたのはそれっきりだった。

(どうしてジークさんはあたしに自分の事を話そうとしないのかな…)

とスウは思った。

(あたしの事、信用してくれていないのかな)

そこに考えに至ったとき、スウは微かな怒りを覚えた。

しかしその瞬間、スウは突然不思議な感覚に包まれた。

(あれ、あたし…怒ったのっていつ以来だっけ…)

それは普通の人間からすればありえないような妙な気分だった。もし例えるなら、出掛けるときに大事な物を家に忘れ、その事の後になって気づいたような感じだった。ただ、スウが特殊なのは、その『忘れ物』が感情だったということだ。

自分はいつからか、怒りという感情を忘れていたのだ。スウは悪寒を感じて、反射的に自分の肩を抱いた。

その時、自分の中にスウは『何か』を感じた。その何か、スウから怒りという感情を奪っていた何かが、自分の中にいるのだ。

それは、まるで真つ暗な闇その物のようであり、スウは一瞬、自分の中のその闇に飲み込まれるような錯覚を覚えた。

しかし、その『何か』は出てきた時と同じように突然その気配を消し、それと同時にさっきジークに対して感じた怒りも、自分か闇の中に飲み込まれるような感覚も消えうせた。スウは訳も分からず落ち着かなくなつて、急いで浴槽から出た。

今、一瞬自分の中に感じた『何か』は、もしかすると自分の正体に関係しているのかも知れない、とスウは直感した。自分の中にいる漆黒の闇、恐らくはそれがスウを普通の人間とは違うものにさせ、それが他の人間にスウへの根源的な敵愾心を抱かせているのだ。言い知れない不安を感じて、スウは半ば走るように浴場を後にした。

ジークは窓越しに、レイアークの街の風景を眺めていた。流石に町長の邸宅だけあつて、街で最も高い丘の上に建っているので、湖に囲まれた美しい街の全体を見渡すことができるのだ。

その時、ドアをノックする控えめな音がした。その叩き方が誰のものなのか、ジークにはすぐに分かった。そこでジークが入ってくるように言うと、ドアを開いて案の定スウが顔を出した。しかし、顔を覗かせるだけで、なぜか中には入ってこない。

「どうしたんだ、スウ。入ってこないのか？」

ジークがその様子を訝しんで尋ねると、スウはなぜか恥ずかしそ

うに顔を赤らめる。

「それは、その…」

スウはしどろもどろな声で言葉を濁す。

「だから、どうしたんだよ」

「ふえ…だから、その…」

スウは目を泳がせつつ言った。

「あんね、ジークさん…お風呂から出たら、女中さんが新しい服、用意してくれてて…そのう…」

そこでスウはにわかに関心を固めたようにゆっくりと部屋に入ってきた。

「…これ、似合うかなあ」

ジークはしばし、そのスウの姿に見惚れた。スウはシーゼルが用意させたらしい緑色の綺麗な長い服を着ていた。スウには多少大きいようではあったが、そのおっとりした雰囲気はスウに似合っている。その服にかかる長い髪の毛はまだしっかりと湿っていて、石鹸の物らしいほのかな香りを漂わせていた。

「ど、どうかな…？」

スウは落ち着かなそうにそわそわして尋ねた。

「別に…」

ジークも居心地が悪くなって心にもないことを言ってしまう。しかし、ふと気付いたように言った。

「そう言えばお前、意外と綺麗な肌してたんだな。今まで汚れてたから気付かなかったけど」

「ふえ…そお？」

スウは袖をまくって自分の腕を眺めて言った。ジークは恥ずかしくて口には出せなかったが、その腕はそれこそまるで絹のような、色白できめの細かいほっそりとした腕だとジークは感じた。

「ああ。なんつーか、こうして見ると、真珠みたいだな」

ジークは内心緊張しつつ、自分でも気障だと後になって恥ずかしくなるような台詞を言った。

「えへへ、そんな事ないよう。ジークさんたら、おせじが得意なんだから」

スウは照れつつ言った。

「べ、別に世辞じゃねえよ。ただ、何となくそう思っただけだ」

ジークは目をそらして言った。

「そう？そう言っつて貰えると嬉しいなあ」

スウはその言葉通り嬉しそうに顔を綻ばせる。

「やっぱりあたし…あの日ジークさんに出会えて、ホントによかった！」

「なんでそんなこと藪から棒に言っつんだよ」

ジークは訝しむように言った。

「だって、ジークさんに出会えてなかったら、今頃もう死んじゃつてたかもしれないもの」

「それは…そうかもしれないけど」

ジークが初めてスウを見た時、スウは例の魚屋に泥棒したと誤解されて追われていたのだ。そしてその魚屋は、その直後にメトネスにたぶらかされてパテルに火を放ったのだった。

そう言えば、とそこでジークはふと思った。メトネスはあの時、

『オイラはこのニンゲンの中に巣くっていた『闇』を、このニンゲンの願いが叶えられるように、力に還元してやっただけだぜ？元々すべてはコイツが願ったことだったんだぜ』

と言っていた。もし魚屋の『願い』が破壊衝動だったとしたら、その原因を作ったのは恐らくあの昼の出来事だったのだろう。だとすれば、魚屋がメトネスに操られた責任は、間接的に自分にもあるということになる。

「でも、もしかしたらお前はこれから、オレに出会ったせいで死ぬことになるかもしれないんだぞ」

その言葉は、ジークの口から自然に出ていた。

「…きつとジークさんが護ってくれるから大丈夫だよ」

スウは愛くるしい微笑みをジークに向けた。

「まったく、そんなこと言っつて、死んでから恨むなよ」

ジークも少しつられて、顔を綻ばせて言った。

「そしたらあたし、化けてジークさんの背後霊になって、荷物の中の食べ物ぜんぶ食べちゃうよ」

「それだけはホントに困るからよしてくれ」

ジークはスウの表情を見て、スウなら本当にやりそうだと思いつつ言った。もしスウの背後霊などに取り付かれたら、本当に食糧を食い尽くされて行き倒れになってしまうこと請け合いだ。

「だから、絶対に死ぬなよ」

「うん！」

表の意味と、裏の意味、二つの意味をこめてジークが言った言葉に、スウははつきりと頷いた。

護るべき人がいる。その幸福さをジークは噛み締めていた。もう、昔とは違う。オレは、誰かのために生きることができんだ、と。

しかし、もうあの頃のように自分のために生きる世界には戻りたくない。そう強く思えば思うほど、心の奥底にうごめく、大切な人の死への恐怖感は募っていくばかりであった。

四章「The Strength For Someone」

第五章 「夜空の星」

「いったただきまーす！」

スウは、そこがまるで天国でもあるかのように幸せそうな声で言った。

「うるせえな。もっと静かにできねえのか」

ジークは頼杖について窘める。

「だって、だつてえ」

スウは駄々をこねるように言う。もつとも、スウが大騒ぎする気持ちも分らないではなかった。スウとジークの目の前のテーブルには、恐らくスウにとつては今まで見たことも無いような豪華絢爛な料理が並んでいるのだ。大食いなスウがよだれを垂らさない方がおかしいとも言える。ジークがルネア家の邸宅に運ばれた日の夕食での事だった。怪我をしているジークをあまり動かす訳には行かないので、ジークが寝ていた客間で食事を取るようになった。

「急いで用意させたからちゃんと準備出来なかったんだけど、喜んでもらえた様でよかったわ」

シーゼルはスウのはしゃぎ様を見て嬉しそうに言った。

「何から何まで済まねえな、シーゼル」

ジークもジークなりに感謝の気持ちを込めて言う。

「子供はそういう事は気にしなくて良いのよ」

しかし思わずからかってしまうシーゼル。

「誰が子供だ！」

「どう見ても子供じゃない。だいたい、あなたが子供じゃないって言うならそれより八歳も年上の私はなんだっていうのよ」

「んなもんだだのババ……！」

と言いかけてジークはおぞましい殺気を感じて慌てて言葉を切った。もし今の台詞を全て言ってしまったら、間違いなくジークの命は無かつただろう。

「…あ、いや、頼れるお姉様…ってとこかなあ」
慌てて言い直すジーク。

「それでよし！」

とシーゼルは満足げに頷いた。

「ねえ、ジークさん、これすごくおいしいよ！」

スウは七面鳥を頬張りながらはしゃいだ。

「ジークさんも食べたら良いのに！」

「ああ、そうだな。でも、食べ物頬張りながら喋るなよな」

ジークは諭すように言った。そして七面鳥の肉を切り取って自分の皿に盛る。表面は程よい焦げ目がついていて、中は肉汁が溢れている。確かに美味そうだ。

「ところで、白銀の獅子、聞きたい事があるんだけど」

その時シーゼルが言った。

「昼間のあの黒い影みたいなのは、一体なんだったの？確か、悪魔と名乗っていたけれど」

そういえば、シーゼルは悪魔の存在を知らなかったな、とジークはいまさらながら気がついた。

「ああ、その名の通りの悪魔だ。今まで北の氷原に住んでいたのが、この国に忍び込んだらしい」

ジークはそこで言葉を切ったが、シーゼルはその説明に満足していない様だった。しかし、ジークがそれ以上何も言わないのを見て、がっかりした表情を見せた。

「前から思っていたけれど、ライトのする事って分からないわね」

シーゼルは言った。

「どの国にも属さない、自由な旅人、と言うけれど、実際はどんな事をしているのかしら？」

「お前に教える義理はない」

ジークは即座に言い放った。

「冷たいわね。私とあなたの仲じゃないの」

「あのなあ…誤解を呼ぶような言い方するなよ」

ジークは後ろに感じるスウの突き刺すような視線に戦きながら言った。

「とにかく、誰にでもホイホイ言えることじゃないんだよ。ライトの秘密はな」

ジークは気疲れした声で言った。

「それより、さっさと飯食おうぜ」

ジークのその言葉に、シーゼルは残念そうな顔をしながらも、諦めたように食事に戻った。

その夜、ジークは奇妙な夢を見た。そこには、二人の若い人影が互いの手を取って見つめ合っていた。片方は長くてしなやかな髪を持つ女性で、もう一人は背の高い男性だった。二人の奥から夕日が差し込んでいるので、その顔を判別することは出来ない。

そこは、とてつもなく広い草原だった。どこまでも続く果てしない草原は、太陽の光に茜色に輝いている。そこには、その二人以外には何もいなかった。ガブル平原だ、とジークは直感した。ジークが生まれ、育った場所。しかし、ジークの知っているガブル平原とは何か違った。ジークが育ったガブル平原は、こんな穏やかな土地ではなかった。

ジークがそう考察している間も、二人は身動き一つせず見つめ合っていた。平原を一陣の風が吹き抜け、二人の髪をなびかせても、二人は全く動かなかった。

永遠とも思える時間見つめ合っていた二人の影は、やがて静かにそよぐ、赤い光に彩られたまるで絵画のような風景の中、名残惜しそうに顔を背けた。その時、二人の目に涙があるのを、ジークは見取った。

そして二人は、ゆっくりと、反対の方向へと歩みはじめた。それにつれて長く延びた二人の影も、次第に離れて行く。

二人は途中、何度も立ち止まったが、振り返ることはしなかった。もしかしたら、振り返ることができないのではないかと、ジークは

思った。所詮は夢の中、ありえない事ではない。

それは、あまりに哀しい情景だった。二人は互いに深く愛し合っているのに、どんな理由からか今こうして振り返ることすらできず、別れなければならぬのだ。一体この夢は何を意味するのかと、ジークは訝った。ただの夢とするには、あまりにも鮮明過ぎた。が、確かにただの夢であることも、なぜか間違いなく分かっていた。

二人の距離は次第に広がって行き、ついにはジークは二人を同時に視界に入れることもできなくなった。そこで二人は一際長いあいだ立ち止まり、しかしやはり振り返ることはせず、やがて別々の道を去って行った。その二人の別れに、ジークは何もしてやることができなかつた。それが何よりふがいなかつた。

次の朝、ジークは哀しい気持ちのまま目覚めた。一瞬寝ぼけて、なぜ自分はこのように哀しいのだろうと考えて、次の瞬間、昨夜に見た夢の事を思い出した。まだ多少フワフワした気持ちのまま、夢の意味を考えたが、まったく何も思い浮かばなかつた。

「ふあ、おはよ、ジークさん」

隣のベッドでは、ちょうどスウも目覚めたところだったようで、寝ぼけ眼でジークを見つめているのが背中では何となく感じられた。

「ああ、おはよう」

とジークは適当に返す。何気なく窓を見ると、明るい朝の日差しが差し込んでいる。あの夢の事がなければ、爽やかこの上ない朝になつていただろう。

「スウ、お前…」

まだ起き上がるのは面倒なので寝返りを打ってスウを見た瞬間、ジークはあることに気づいてしまい、急いで赤面した顔を背けながら、おどおどと言った。

「めくれている…ネグリジェが」

「ひゃぶ!？」

背中越しにスウの叫び声が聞こえる。寝ぼけていたせいで、今ま

で気づいていなかったらしい。

「だからオレは別々の部屋が良いって言ったのに…」

ジークはドギマギしたまま言った。

「ジークさん…見た？」

しかしどうやらスウには、ジークの意見などより差し迫った問題があるようだった。

「ほとんど見てない」

そこでジークは事実を答えた。

「んじゃ、ちよつとは見た？」

「…だからほとんど見てないって」

もう振り返っても良さそうなので、ジークは恐る恐るスウを振り返った。するとスウは泣きそうなる顔をしていた。

「で、なんでそこで泣きそうになるんだよ。ふつう怒るだろ」

ジークはそのやり取りにデジャヴを感じつつ言った。

「ふえ、それは…」

その質問に、スウは答えられなかった。一晩経つ内に、昨日浴場で感じた奇妙な感覚の事は、怒りという感情と共に忘れてしまっていた。

この時になってジークも、もしかしたら『怒り』という感情を持たないということも、スウの正体と関係するのではないかと考えはじめた。だとしたら、このことは一体どういう意味を持つのだろう。

「そこで、結局どんくらい見たの？」

スウはなおもしつこく尋ねる。

「いや…だから…ほとんど、見てない…って」

ジークにはそれ以上の事は言う勇氣はなかった。

その朝、ジーク達はシーゼルの屋敷で朝食をとった。

「それでジークさん、次はどこに行くの？」

スウはフォークを口に運びつつ尋ねた。スウは既に、シーゼルから貰った真新しい水色のワンピースに着替えていた。

「そうだな…一度テグレスの所に戻った方がいいか」

ジークは一考して答えた。テグレスは、リイトの頭目である老婆の預言者で、スピルナ公国の東にあるゾド山脈に住んでいる。

「それよりあなた、傷は大丈夫なの？」

そこでシーゼルが口を挟む。

「ああ、どうも寝ている間にほとんど治っちまったみたいだな」

「あの傷が一晩で治るなんて、相変わらずバケモノみたいな体してるのね」

シーゼルは驚いた声で言った。正直、ジーク自身もその事には驚いていた。今まではいくらなんでもこれほどの回復力はなかった。

もしかすると、昨日ジークに顕れた『力』とやらとも関係があるのかもしれない。

「とにかく、オレ達はあまり一所に留まらない方がいい」

ジークは言った。

「どうして？」

シーゼルが眉をひそめて尋ねる。

「みたところ悪魔は、オレ達を狙ってる。オレ達がここにずっと居れば、またここが狙われて、今度は被害が出るかもしれない」

今、ジークはあえて『オレ達』と言ったが、それはある意味嘘だった。恐らく悪魔が狙っているのはジークではなく、スウだ。昨日の悪魔・ベリウスやメトネスがスウの名前を知っていたことから、それは明らかだった。しかし、もしその事を知れば、スウはそれを負い目を感じてしまうだろう。それは、ジークの望むところではなかった。

「…そうなの」

シーゼルは悩ましげに言った。

「あなたの事だから、引き止めようとしても無駄でしょうね。せめて何か、私に出来ることがあれば良いのだけだ」

「大丈夫だ。余計な心配はいらない」

ジークは素っ気なく言った。

「あなたって相変わらずつれないのねえ」

シーゼルは奇妙な笑みを浮かべて言った。そして続けて声をひそめて囁く。

「それにしても、今まであれだけ人がついて来る事を嫌ってたあなたがわざわざ連れ歩くなんて、よっぽどスウの事が好きなのね」

「な、なんだよ、藪から棒に……」

途端に赤面するジーク。相変わらず、こついう所は子供丸出しである。

「二人とも、何の話してるの？」

何も知らないスウが純粋な好奇心から尋ねてくる。

「え、いや、なんでもない」

ジークはシーゼルが妙な事を口走らないように注意を払いつつ言った。

「それより、もう食べ終わったんなら、さっさと出発するぜ。あんまり長く居ても迷惑だろうし」

慌てて取り繕うように指示するジークを、シーゼルはさも面白そうに眺めていた。

出発の準備を済ませ、ジーク達がレイアーク市街に出ると、街は昨日以上に賑わい始めていた。十三日後に開かれるクレオスナ祭の準備は着実に進んでいるようで、一日経つ内に街の装飾も増えている。祭が始まるのを待ち切れなくなつてか、箆笥の奥から掘り出したであろう各々の一族に伝わる民族衣装で身を包む人々も多く見られる。

「そつういえば、あなた達はどつするの？」

その街の様子を見て、ふいにシーゼルが言った。

「クレオスナ祭って一言に言つても、地方や街によつて色々な特徴があるから、どうせ旅してるなら、どこでクレオスナ祭に参加するか、考えた方がいいんじゃない？」

「そつうだな……」

ジークが答える。

「でも、一度テグレスの所に行つてからじゃなきゃ、次にどこに行くかは分からないからな」

ジークは面倒臭そうに言った。

「まあ、オレもスウもクレオスナ祭に参加したことはないし、別にどこが良いなんてこだわりもないからな。成り行きでなんとかなるだろ」

「随分と適当ね」

シーゼルはそう言いつつも、内心それが妥当だとも思っていた。

ジークもスウも、シーゼルとは違いスピルナの生まれではない。今まで参加したこともないスピルナの祭に親近感が湧かないのも当然だ。

「まあ、好きにすればいいけど。どちらにしても、私には関係ない訳だし」

シーゼルとジークがそんな話をしている中、スウは興味深げにあちらこちらを見回していた。シーゼルがスウの尖った耳を隠すために用意してくれたクリーム色の鰐広の帽子は、スウにぴったりフィットしていた。

今までずっと体を洗うこともせず、着古してきたボロを着て、尖った耳を周囲の目にさらしていたがために、周囲から人並み以下の扱いを受けてきた孤児であるスウにとって、今こうして体を洗い、汚れ一つない立派なワンピースを着て、上品な帽子で不気味がらめる耳を隠せていることは、まるで自分ではない何か生まれ変わったような気分だった。

天国にいるような嬉しさが強いのはもちろんだが、同時に何かふわふわした、自分が自分で無くなってしまったような漠然とした不安も感じていた。

それでも、こうして人並みの恰好をしていることは、やはりスウに言い知れぬ感動と自信を与えていた。そのためか、スウは今まで

になくはしゃいでいた。

「ふあ、ジークさん、これおいしそうだよ!」

店のショーウィンドウに飾られた色とりどりのお菓子を見つけて、スウは言った。

「だから何だよ。オレに買えつてののか?」

ジークがまさかという風に聞いた。

「ふえ、買ってくれないの?」

そこでスウもまさかという風に聞き返す。

「いや、オレ別に『買ってやる』とかいう雰囲気してないだろ」

ジークは答えた。

「つーかなんでお前はそう食べ物にしか興味がないんだよ。他に欲しいものはないのか?」

「あつたら買ってくれるの?」

「いや、買わないけど」

ジークは居心地悪いような顔をして言った。

「意地悪言わないで買ってあげなさいよ。どうせお金は余るほどあるんでしょ?」

そこにシーゼルがやって来て茶々を入れた。

「何たつてレイアークを助けて貰った時に謝礼金がたんまり出たんだから」

「ふえ?今までジークさんつてつきり貧乏だと思つてたけど」

スウは驚いて言った。前からジークはよく貧乏人っぽい台詞をよく言っていた。

「念のためだよ。もし金持ちだと思われたら、狙われるだろ」

ジークはいつでも良さそうに言った。

「まああなたの場合、もし金持ちだつて知られたら、泥棒とかに狙われる前に、スウにしこたま使い込まれるでしょうね」

「ふえ、使つて良いんですか!」

シーゼルの言葉に、スウは途端に目を輝かせた。

「良くねえよ!」

ジークが慌ててつつこむ。

「そんなカリカリしなくても、ちょっとくらい使わせてあげてもいいんじゃないの？どうせまだいっぱいあるんでしょ？」

シーゼルが呆れたように言った。

「うるせえな……」

ジークはそう呟いてちらりとスウの表情を窺った。そこでスウは思いつきり期待の眼差しを向ける。

「……しょうがねえな、今回だけだぞ」

ジークが観念したように言った。

「ふあ、ありがと、ジークさん！」

シーゼルが腹を押さえて必死で笑いを堪える中、スウはジークの気が変わらない内にとその手を引いて菓子屋に入って行った。

「さて、ここでお別れってことになりそうね」

その後、一行がレイアークの橋にたどり着いた時、シーゼルが言った。

「いろいろと世話になったな」

ジークが言った。

「本当に、ありがとございました」

スウもそう言っぺこりと頭を下げた。その手には買ったばかりの飴が握られている。

「お礼なんていいわよ。それより二人とも、気をつけてね」

シーゼルが返した。

「私は事情は分からないけど、あなたの事だからまた誰かのために危険な事に首を突っ込んでるんでしょ？」

そう言ってシーゼルはスウを指し示すような意味ありげな視線をジークに投げかけた。

「……まあな」

ジークはバツが悪そうにそっぽを向いた。シーゼルは感づいているのだ。悪魔達の目的がスウであることに。

「それと…何かやりたいことがあるならさっさとやっちゃった方がいいわよ」

シーゼルは続けて悪戯っぽく言った。ジークは無意識の内に着ている上着のポケットに意識をやった。そこには昨日ジークがスウにプレゼントしようと思っただけの銀のペンダントが入っていたが、ジークは今のところ期を逃して渡し損ねていた。まったく、これだから女は怖いんだ、とジークは思った。

「さて、それじゃそろそろ行くとするか、スウ」

ジークははぐらかすように言った。

「じゃあな、シーゼル」

「もし恋愛の事で相談があったら、いつでもまた来るといいわ」

シーゼルは不意にジークに詰め寄り、ジークにしか聞こえないように声を抑えて言った。ジークはむすつとして、顔を背けた。

「それじゃあ二人とも、またね」

「それでは、失礼します」

再び声のトーンを戻し、軽い口調で言うシーゼルに、スウは再び頭を下げた。

そしてスウとジークは、橋を渡る人混みの中に紛れ込み、ノーレラス地方の中央街・レイアークを後にした。

レイアークを出た二人は、ゾド山脈に向かうために、東へと進路を取った。道は左側を川が流れ、右側には林が続いている。この川は、ノーレラス地方の東にある地方、ハシラ地方から流れ、レイアークを囲む湖を通って遙か西のガブル平原にまで続いている。

スピルナ公国の東にあるゾド山脈に向かうために、ジーク達はハシラ地方・ヒカナセク地方を経由しなければならない。ハシラ地方は比較的小さな地方だが、全体が緩やかではあるが山地になっている。そのため今までよりも移動時間は多くかかることになるだろう。

ゾド山脈に着くまでに、再び悪魔に襲われることはあるだろうか、とジークは思った。やつらの目的は恐らくスウだ。しかし、それに

しては不自然な行動が目立つ。もしスウを奪うことだけが目的なら、わざわざ一体や二体ずつ送って来なくても、一度に全員で来れば、ジークなどでは到底太刀打ち出来ないだろう。それに、幻の町ではメトネスは一度スウを拉致していた。スウを捕まえたいだけなのなら、その時にすぐに連れて逃げて逃げれば良かったはずだ。

まだ分からないことだらけだが、ゾド山脈にたどり着けば、恐らくテグレスから詳しい話を聞けるはずだ。そもそもジークをパテルに派遣してメトネスと戦わせたのはテグレスなのだ。何も知らないとは言わせない。

そんな事を考えながら歩いていると、不意に体の右側に触れるものを感じた。見ると、スウがジークに寄り添うようにして歩いていた。

「どうしたんだよ、スウ」

ジークは少し戸惑ったように言った。

「これくらいいいじゃん。別に誰も見てないんだもの」

しかしスウは構わずジークの腕をほっそりした両腕で抱きかかえてきた。

「それに、こうしてジークさんと二人っきりで旅するのって、なんだか久しぶりだから……」

「久しぶり……つつてもそもそも、オレ達出会ってからまだ一週間経ってないぜ」

腕に感じるスウの温もりにより少し動悸を感じつつ、ジークは言った。パテルに向かう街道で初めてスウを見たのは、ちょうど六日前だった。

「それでも、嬉しいもん」

スウは少し拗ねたように言う。

「つたく、相変わらず変な奴だな」

ジークはさりげない風に装って言った。しかし、実際は緊張のあまり動悸が収まらない状態だった。しかし、スウの事だから抱き着くのを止めるといっても聞かないだろう、とジークは自分に言い聞

かせた。仕方がない事なんだからと…。

「あんね、ジークさん、聞きたいことが…」

しばらく歩いた後、スウは、ジークに質問するときの決まり文句を口にした。

「何だよ」

「どうして、ジークさんはヒカナ家からレイアークを護ったの？」

「なんでそれを今聞くんだよ」

「なんだか、とつぜん気になって…」

スウは素直な声音で言った。その声から、本当にただの気まぐれなんだろうとジークは推測した。

「オレがレイアークを護った理由、ねえ…」

ジークは面倒臭そうに言った。

「別に、これと言って深い理由は無いんだけどな。まあ、オレがお前を魚屋から護ったのと同じ理由、って言えば分かるか？」

「それってつまり、『気まぐれ』ってこと？」

確かに前にジークはそんな事を言った覚えがある。

「まあ、そうとも言えるかもな。とにかく、ヒカナ家の脅威にさらされて、死か強制労働を待つばかりだったレイアークのやつらをほっとけなかつただけだ」

「そっか、ジークさんって優しいもんね」

スウはほほ笑んで言った。

「だから、そんなんじゃねえって。あの時の状況を見たら、誰だって同じように考えるさ。それだけひどい有様だったんだ」

「でも、そのために実際に立ち上がって、自分の命を賭けて戦うなんて、誰にでもできることじゃないでしょ」

スウは突然諭すような口調になって言った。スウはオレに自分が優しいと認めさせたいんだ、とジークは気づいた。

「そんな事知るかよ」

へそまがりなジークははぐらかすように言った。そして、強がってこう付け足した。

「そもそも、『命を賭けて』だったって、オレはあんな程度の戦いで死ぬ気なんて毛頭無かったぜ」

「ふーん」

スウは明らかに納得してないような反応を見せた。

「まったく、ジークさんたら、自分に素直じゃないんだから」

悪戯っぽくそう言っつて、スウはつかの間ぎゅっとジークの腕を抱きしめた。そしてジークの腕を離して、嬉しそうにジークの前をスキップして行つた。それに合わせてシーゼルから貰つた青いワンピースの裾が楽しげにはためいた。

「何意味の分らないことを言っつてんだか……」

ジークは頭の後ろをかきながら、仕方なさそうにスウの後を歩いて着いて行つた。

幻の町のあつた荒野

「この足跡……どうやら、ここで戦闘があつたようですね」

数日前の物と推測されるいくつもの足跡が残る地面を観察しながら、旅装束の青年は独り言を言つた。この荒野には何も無いのに、こうして同じ時期の同じ足跡があちこちに散在しているということから考えても、ここで何かの争いがあつたと見るのが道理だ。

足跡が何日も後まで残るほど深く刻み込まれているのも、その証拠だ。それだけ地面を強く蹴る必要があつたということだからだ。

青年は後ろに鹿毛の馬を牽いていた。エスル村でジークの情報を聞いてから、青年は馬を走らせここまで追つてきたのだ。焦る必要はないためあまり馬を酷使せずゆったりと来たが、かといつてここでジークを見逃す訳にもいかない。悪魔の被害は、確実に増えている。やつらから人々を護るには、どうしてもジークの力が必要だった。

実際、エスル村の前に言つたレグラ地方の中央街パテルでは、悪

魔によるものと思われる大火災が起こっていて、かなりの犠牲者を出していた。実行犯はチャノ村で魚屋を営んでいた男・ヘテーク・ハレアだったが、どうやら悪魔によって心を操られていたようだった。そして本人の証言によると、ヘテークから悪魔を引きはがし、撤退せしめたのは白銀の髪の少年だったということだ。恐らくそれがジークであったと見て間違いないだろう。

もし、ジークが止めていなかったら、今頃パテルはどうなっていた事か。

「やはり、彼の力はスピルナに必要という事ですか」

青年は自分に言い聞かせるようにそう言って、引き続きジークの後を追おうと軽やかに馬に乗った。

「ケケケ、オイラ達のことを嗅ぎ回ってるってのは、あんたかい？」

その時、虚空から不気味な声が響いた。

「だったら、何です？」

青年は怯む事なく聞き返す。

「メンド臭いけど、もしあんたがオイラ達に害を加えそうなら、消すように頼まれてんのさ」

その言葉とともに、真っ黒な人影に真っ赤な目と口、異様に長い腕を持った悪魔が姿を現した。

「面倒臭いのなら従わなければ良いのでは？」

青年は冗談混じりに提案した。

「残念ながら、そういう訳にも行かないのさ！」

悪魔・メトネスはそう言って青年に飛び掛かった。青年は馬の手綱を引いてそれを避けさせた。

しかし、直接攻撃することがメトネスの目的ではなかった。メトネスはグニヤリとグロテスクに体をねじらせ、青年の懐に入り込んだ。

「その体、悪いけど使わせて貰うしさ！」

メトネスはそう言って、青年の耳元に呪文を囁き始めた。魚屋へ

テークにも使った、相手の心の闇を増幅させて操る得意の呪文だ。青年はめまいを感じて、自分がされている事が何かに気がついた。すぐさま剣を鞘から抜き、メトネスを振り払って馬の向きを変え、馬の腹を踵で蹴って走らせた。

メトネスには、その馬に着いて行けるだけのスピードはない。その上、今はジークから受けた傷がまだ疼いている。この状況での追跡は不可能だった。

「ちっ、逃げ足の早い奴だしさ！」

メトネスは悪態をついたが、追跡そのものを諦めた訳ではない。元来『耳』を司る悪魔であるメトネスには、いわゆる『地獄耳』の力もあつた。それによって、馬を駆る青年の物音から、向かっている方向を確実に予測することが出来る。

「なるほど、あの白髪のリイトと合流しようって算段だね」

しばらく耳を澄ませた後、そこまで覚つたメトネスは、仲間の悪魔にそれを知らせるべく、霧となって消えた。

ノーレラス地方とハシラ地方間の街道

その日の夜、ジークとスウはいつも通り街道の脇の林の中にあつた空き地で野宿することになった。街道を挟んで反対側を流れる川の音が涼やかに鳴り響いている。

スウはいつもの習慣通り、たき火のそばに座ってオカリナを吹いている。その腕が日に日に良くなっていくのは、音楽の心得の無いジークにさえはつきりと分かる程だ。

スウが今吹いているのは、カレハから教えてもらった曲の一つで、確か曲名は『湖面の月』だ。あの短い時間でスウが覚えることができた曲は少ししかなく、これはその中でスウが最も気に入っている物だ。

しかし、今のレパトリーではいずれスウは飽きてくるだろう。

次に、オカリナのもとを持ち主に会ったら、スウに他の曲も教えてやるように頼んだ方が良さそうだ。

ジークは夜空を見上げ、スウのオカリナの音色に聴き入りながら、そんな事をぼんやりと考えていた。夜空にはそれこそ数え切れないような星々が散らばり、瞬いていた。真つ暗な空を彩る、その儂く静寂を感じさせる光は、ジークの心を洗い流してくれるようだった。

ジークは昔から夜空の星を見上げるのが好きだった。遠い空の彼方で輝く星に、こうして淡く照らされる時間が好きだった。言葉に表せないその神秘的な感情は、スウと一緒に居る時とどこか似ていることに、ジークはふと気づいた。

スウと居ると、ジークは呆れたりドギマギしたりしてばかりで、一見星を眺めるときの静かな思いとは掛け離れているようにも思えるが、ジークは今その二つの間に、もっと深い部分での共通点を見出だしていた。

「…星は夜空の中でこそ輝き、夜空は星によってのみ彩られる」

その言葉は、自然とジークの口から漏れ出ていた。それは、古くから知られる言葉だった。どうして今、その言葉が口について出たのか、ジークにはにわかには分からなかった。

「ジークさん、それって…」

それを聞いて、スウは驚いて口からオカリナを離し、ジークに振り向いた。

「何だ、知ってるのか？」

ジークも驚いて聞いた。

「うん…お父さんが、よく言ってた」

スウは思い出すように言った。

「あたしの名前：スウ・ロ・ヤマは古代の言葉で『夜空の星』っていう意味で、今ジークさんが言った言葉から名付けたんだって」

「古代の言葉…それってもしかして、『聖霊語』の事か？」

ジークは尋ねた。聖霊語とは、太古の昔にいたすべての精霊族の祖先でもある聖霊達が使っていたとされる、魔力を帯びた言語の事

だ。しかし、今の時代ではごく一部の精霊族を除けば、その言語を完全に解する者は居ないとまで言われている。

「よく覚えてないけど、確かそんな事も言ってたと思う」

スウは自身なさ気な声で言った。

「そうなのか」

スウの言葉を聞いて、ジークは考え込んだ。今さっき説明したように、この時代の人間で聖霊語を知っている者はそうそういない。

スウの養父 確か名前はシルート・サーズと言ったか は一体、何者なのだろうか。

「『夜空の星』か…お前にぴったりな名前だな」

ジークは純粹に心に浮かんだことをそのまま言った。

「ほんと？そう言ってもらえると嬉しいけど…」

「けど、何だ？」

「あたし、まだ自分に自信がないの。あたしはあの星みたいに綺麗じゃないし、あの星の光みたいにおしとやかでもないもの…」

スウは胸に左手を当てて、少し哀しげに言った。

「そんな事はないって」

ジークは即座に言った。スウは驚いたようにジークを見つめた。

「スウは綺麗だよ」

ジークは星明かりに朧げに照らされたスウの、紫色の瞳を見つめ返した。ジークには一瞬、その瞳に空の星々が映っているように見えたが、それが錯覚なのか、ジークには分からなかった。

「ホントに？」

スウは信じられないという表情でジークを見た。

「本当だ。少しはオレの言葉も信用しろよ」

ジークは答えた。

「…ごめんなさい、そういつつもりじゃ…」

スウは恥じ入るように少し顔を俯けた。

「とにかく、少なくともオレの目から見れば、お前は綺麗だ。お前自身が思ってる以上にな……もっとも、お淑やかじゃあないのは確

かだけどな」

ジークはついでのように付け足した。

「…そこははつきり言うんだ…」

そう言つてスウは一瞬わざとらしくむすつとした表情を見せたが、次の瞬間にはクスツと笑つた。

「でも、ジークさんのそういう所も、あたしは好きだよ」

「なっ、何変な事言つてんだよ」

ジークは顔を赤らめて慌てて言つた。その様子をスウがどこか愛おむような表情で見つめてくるので、ジークは自分の気障ぶりに一層ばつが悪くなるのだった。スウと出会う前のジークなら、口が裂けてもこんな台詞は吐けなかつただろう。

幻の町跡地の近く

「それにしても、いつまでこうして手加減してなきやいけないのさ！？」

メトネスは苛立たしげに愚痴を言つた。

「まったく、最近のお前は文句を言つてばかりだな」

グルナが面倒臭そうに言つた。

「これだけつまらないことが続けば、誰だつてこうなるしさ！特にオイラはあの銀髪のリイトに傷まで付けられたんだしね」

メトネスは言つた。

「ハッ、いくら手加減していたからと言つて、それはてめえが弱かつただけじゃねえか？」

ベリウスは馬鹿にするように言つた。しかし、メトネスはあえてそれを無視した。

「それで、結局いつまでこんなつまらないこと続けりゃいいのさ？」

メトネスはグルナに尋ねた。

「それはスウ・ロ・ヤマ次第、ということになるだろうな」

グルナは落ち着いた声で言った。

「あの疫病神かい。でも、本当に、あんな奴の為にここまでしてやる必要があるのかい？」

「奴の持つ『力』は、我々の計画には間違いない必要だ」

グルナは言った。

「いくら頭の悪いお前でも、我々の目的を忘れた訳ではあるまいな？」

「忘れる訳が無いしさ！」

馬鹿にされたメトネスは声を荒げた。

「ハッ、それならそうやってグズグズ言うのはやめるんだなあ」

ベリウスが言う。

「それは確かにそうだけども、やっぱり終わりが見えて来ないことにはやる気も失せてくるしね」

メトネスは言い返した。暗に、『この状態がいつまで続くのか教える』と言っているのだ。

「そうだな……」

メトネスの考えを覚ったグルナは、勿体振るように言った。

「まず、スウ・ロ・ヤマの本来の力を解放させないことには、奴を捕らえた所で意味はない。そこで我々の今の目的は、奴の力を解放させることなのだ。しかし、奴の力は奴自身のある感情によってのみ解放されうるものなのだ」

グルナは説明しはじめた。

「その引き金となる感情は、奴の『怒り』だ。奴が怒れば、その『力』は解放されるのだ。だが、あの力は奴自身にとっても負担が大きい。そのために、普段の奴は怒りの感情を本能的に封じているのだ」

「つまり、問題はどうかやってアイツの中に眠る『怒り』を呼び覚まさせるか、つてことかい？」

メトネスは納得したように言った。

「その通りだ。お前にしては勘が良いな」

グルナは冷やかすように言った。メトネスはイラツとした表情を見せたが、話の先を聞く方に興味をそそられているようで、手を出すことはしなかった。

「メトネスの言う通り、問題はそこだ。つまり、我等の計画を進めるには、奴が分別を棄てて身を任せるほどの強烈な怒りを起こさせなければならぬのだ」

「ハツ、その事とオレ達が手加減しなきゃいけないってのは、一体どんな関係があるんだあ？」

ベリウスがもどかしそうに聞いた。

「いいか、ベリウス。人間というものは、自分自身が傷つけられるよりも、自分にとって大切な物を傷つけられた時の方が、ずっと強い怒りに駆られる物なのだ」

「……ってことはつまり、スウにとって自分自身よりも大切な物を攻撃すればいいって事かい？」

「その通りだ、メトネス。そしてその大切な物を、あの銀髪のリイトにさせるのが、我等の計画なのだ」

グルナは言った。

「つまり、オイラ達と戦わせることで疫病神に、あのリイトに対する思い入れを強めさせて、そのリイトを攻撃することでアイツに怒りを植え付ける、って事かい？」

メトネスが聞いた。

「要するに、そういう事だ」

「それで、今はどのくらいなのさ？」

「やってみなければ分からないが、恐らくそろそろ、もう一度試してみてもいいだろうな」

グルナは考え込むように言った。

「ハツ、そう言うことなら、もう一度オレに行かせてもらっぜ。どっちみちてめえら二人じゃ、スウ・ロ・ヤマに力を解放されたら何も出来ないんだろ」

ベリウスが活気づいた声で言った。あの銀髪のリイトと再び戦え

ることが嬉しいのだ。

「それはそうだが、お前も一度負けた相手だぞ。勝算はあるのか？」
グルナが訝しげに言った。

「ハッ、なめんじゃねえ。もしオレが手加減してなきゃ、あの野郎はとつくに死んでるぜ」

「どうだかね、オイラの助けがなきゃ、死んでたのはどっちだい？」
メトネスは反発するように言った。

「だから、手加減してなきゃてめえの助けも要らなかつたつってんだよ！」

ベリウスは声を荒げて言った。

「やめろ、二人とも！」

メトネスが言い返そうとするのを遮るように、グルナは言った。

「お前達はどつしてそう仲が悪いんだ」

「グルナには関係ないね！」

メトネスが言った。

「いいや、関係はある。お前達の不仲のせいで計画にもしもの事があつてはならんからな」

グルナが言い返す。

「ハッ、その事なら大丈夫だ。メトネスがいなくても計画に問題は無いからなあ」

「ベリウス、そいつはどういう意味だい!？」

メトネスが食つてかかった。

「言葉通りの意味に決まってるだろおが。まさか、こんな言葉の意味も分かんねえのか？」

ベリウスはからかい口調で言った。

「まったく、いい加減に喧嘩は止める！」

そこでグルナが仲裁に入る。このままではいつまでも話が進展しない。

「とにかく、次の襲撃にはベリウスが行く。そして、もし奴のリートへの想いが十分に強くなっているようなら、一気にあのリートを

攻撃しろ。その時は本気を出しても構わん」

「ハッ、その言葉を待ってたぜえ！」

ベリウスは意気揚々と言った。その様子をメトネスはどこか苦々しげに眺めていた。

「おっと、そう言えば一つ言い忘れてたしね」

その時メトネスが突然言った。

「何だ？」

グルナが聞く。それを聞いてベリウスもメトネスを振り返った。

「今日、幻の町があった場所で『継承者』を見かけたのさ。逃げられちまったけどね」

「継承者だと？と言うことは、やつらもついに重い腰をあげたと言うことか」

グルナは思惟しながら言った。ベリウスは黙ってその会話に聴き入っている。

「まあ、そういうことになるしね」

メトネスは言った。

「それも、あの銀髪のリイトと合流しようとしているみたいだったしさ。やつらとリイトが手を組んだら、厄介な事になるし、計画をさっさと進めるべきだと思うね」

「ならば何故、のんきにベリウスと口喧嘩などしていたのだ？」

グルナは呆れ声で言った。

「だが、そういう事ならば確かに急いだ方が良さそうだな。すぐに出発するぞ」

言うが早い、グルナは一瞬にしてその体を黒い霧へと変化させて、その場から消え去った。

「ケケケ、ベリウス、もし今回ミスしたら、『兄貴』からどんな罰を与えられるか見物だしね」

その後もメトネスとベリウスは少しの間そこに留まっていた。

「ハッ、うるせえ。今度は絶対に失敗しねえ！」

ベリウスもまげじと言い返す。

「ケケケ、そういう事なら、次もし死にかけても、今度は助けてやらないしやー!」

「もともとてめえの手なんか借りるつもりはねえよ!」

その言葉を最後に、その二人の悪魔達も、グルナと同じように霧と化して、その場を一瞬にして離れた。

五章「The Star of The Night Sky」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2999x/>

フェトレアス物語～白銀の獅子～

2011年10月21日08時08分発行